
ドッペルゲンガー

LAWSUN

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ドッペルゲンガー

【Nコード】

N5327Y

【作者名】

LAW SUN

【あらすじ】

織斑一夏の双子の弟、織斑秋二^{シユウジ}。

兄に比べ落ち着いた彼もまたISを使うことが出来たのだった。

いろいろな二次創作を見て、自分も書いてみたいと書き始めたもの。不定期でひっそりと上げていく予定（予定ですらない）

ここにはまことの男が少ない。だから、女性が男性化する。つまり、本当に男らしい男だけが女の中に女を解き放つ。

『ツアラトウストラかく語りき』

窓から見える青空は不思議と心を穏やかにしてくれるような気がする。すると織斑秋二は体験する。態々教室の中を見回すような愚行はしない。自分の席が先頭なので周囲の注目を一身に受けている事を確認することは出来ないが、恐らく予想は当たっていることだろう。

女性にしか使えないISの操縦者を育成するIS学園には必然的に女性しか入学できない。そのIS学園に男が混じっていけば注目を浴びないはずが無い。上野のパンダが人気を博すように、このIS学園では男という生き物は見世物のようなものかもしれない。

入学式が終わり、教室に戻ってからずっと針の筵となつてたがそれを気にせず参考書を読んでいたのが功を奏したのか、席の周りに集まってくるようなことは無かつた。

現在、クラスでは自己紹介が行われており、もう少して自分の番が来る。不幸中の幸いとしてトラブルメーカーの一夏は別のクラスで助かつた。別のクラスといつても隣のクラスであるのだが、まあそんなことはいい。

「あー、じゃあ次織斑」

担任の、些かだらしの無い女性、佐藤詩織が声を出す。それに返事をして立ち上がり振り返って「織斑秋二です。よろしく願います」とだけ言って、そそくさ座ろうとすると佐藤先生に止められた。

「あー、他に何か言うことはないのか？ ほら趣味とか」

「趣味は読書と音楽鑑賞です」

「好きな食べ物は何？」

「麻婆豆腐」

「ちゃんと答えられるじゃないか。じゃあ最後にもう一つ好きな女性のタイプは？」

「平塚らいてう」

佐藤先生は「真顔で答えるか」。詰まらないな」と言って天を仰いだ後、ぶつぶつ言いながら自己紹介を進めていった。自己紹介ではないが気にすることも無いだろう。後方から不満が聞こえるが知ったことじゃない。閉じておいた参考書を開いて、また読み進めることにした。

事前に詰め込んだ知識で授業も滞りなく進み、授業の合間の休憩にも人が寄ってくることは無かった。相変わらず視線の雨に晒されていたが、まあいい。

参考書を読んでいるところで、誰かが近づいてくるのがわかった。本を閉じ、顔を上げるとそこにはブロンドの髪を縦ロールにして伸ばした女性が立っていた。

「ちよつと、よろしくて？」

「構いませんよ。初めまして、私は織斑秋二と申します」

「ええ、知っていますわ織斑一夏さんの弟さんでしょう。私は入試主席のセシリア・オルコットですわ。まあ貴方は織斑一夏さんよりは礼儀を弁えているみたいですからねど・・・」

他人に礼儀を求めるわりには随分と恥知らずな人だ。立ち振る舞いや仕草は確かに精錬されていて、育ちのよさを感じさせる。しかし、ジョングル英国人はいつから恥知らずになっただんだ。

「それで何の用かな？」

「いえ、私は入試主席ですから素人の貴方の手助けがしたいだけですわ。困った事があつたらなんでも質問して構いませんわよ」

「それなら一ついいか？」

「いいですわ」

「アラスカ条約が形骸化していることについての君はどう思う？」

条約ではISの軍事利用は禁止されているが、どの国も態々軍隊を解体してまでISの開発を押し進めている。そのお蔭で各国の機動戦力は十分の一以下にまで削減されている。しかし、ISが出来たからといって戦争が無くなる訳じゃない。それにも拘らず戦力を減らすということは、ISを戦力として見做していることの証左じゃないかな。空軍の基地だったところは戦闘機の代わりにISが常駐するようになった。そのうち空母にもISが乗るようになるさ。

何処の国も今はISをどうやって軍事利用し、その上で民衆を納得させる大義名分に頭を悩ませているんじゃないか？　これが私の考えなんだが、ミス・オルコット、君はどう考えている？」

我ながら意地の悪い話だと自覚する。入試主席という事を強調してきたのだから、おそらくオルコットは何かしらの国の代表候補生であろう。アラスカ条約の形骸化についてはすでに暗黙の了解となっている。しかし、国家に帰属する人間がそのことを認めれば、即国際問題に発展する。故に答えることが出来ない。

「・・・それは」

オルコットが言いよんでいる間にチャイムが鳴った。

「時間だ。教室に戻った方がいい。担任は誰か知らないが怒られたくは無いだろう？」

そう言うとオルコットは渋々帰っていった。そのオルコットと入れ替わりに入ってきた佐藤先生がニンマリ微笑んでいたのが気になった。

何なんですか？　男性で唯一ISが使える人間として織斑一夏が世界中で注目的になったのは記憶に新しい。そして織斑一夏には一卵性双生児の双子の弟がいて、同じ遺伝子を持つ彼も同様にIS

を起動することが出来た。

織斑一夏の印象は状況を理解できていない愚鈍な亀といったところ。ISが使えるのなら今まで見てきた男達とは違うかもしれないという期待もあったが、それも無駄に終わった。教官を倒したなどと言っていたが、どうせ何かの間違いだろう。

織斑一夏と同じなのだからどうせ無駄だと思ったが、念のため見に行った。何処に居るかは知らなかったが、一組と同様の人だかりが二組にも出来ていたためすぐにわかった。人だかりを掻き分けて教室に入れば、そこにいた。

兄と同じ黒い髪は絹糸のようにまっすぐに伸びていて、一見女性と間違えてしまいそうになる。席に着いて参考書を見る姿は織斑一夏と同じだが、彼の顔は至って平静で、眉間に皺を寄せ、如何にもわかりませんというような顔をしていた織斑一夏とは全く違った。

もしかしたらという期待が蘇ってくる。しかし、その期待は織斑一夏とは別の形で裏切られた。

『アラスカ条約が形骸化していることについての君はどう思う？』
正直に言うと、彼の話の半分くらい聞き逃していた。考え付かなかったわけではない。ISが兵器としての一面を持っていることは知っているし、理解しているつもりだった。ISに乗っていても戦争なんて言葉は遠い遙か向こうの世界の出来事ぐらいの認識しか持つていなかった。

『ミス・オルコット、君はどう考えている？』

奥歯が歯軋りを立てた。気付かぬうちに力が入っていたようだ。

何なんですか？ 何も知らずにへらへらと笑う男の顔。口を真一文字に結び表情を変えない男の顔。二つの同じ顔が浮かんでくる。似ているのに全く似ていない。

クラスでは今、代表を選出しているが、珍しいというだけで織斑一夏が選ばれようとしている。正直、我慢の限界だった。

納得がいきませんわ！！

「バンドもそれにはしゃぐ人達もあのドツペルゲンガーも全部もつ一度齒が軋む音がした。」

「納得がいきませんわ！！このような選出は認められません」感情の昂りに任せてセシリア・オルコットは声を上げた。

それから事は、はっきり言つてあまり覚えていない。怒りに任せて有ること無いこと言い散らかしたような気がする。我ながら見苦しいと思う。

クラス代表の座を賭けて試合をすることになったのは僥倖だ。あの男を地に這い蹲らせれば、このイライラも収まるかもしれない、そんな思いがあった。

「じゃあクラス代表は秋二君で決定ね」

隣のクラスから罵詈雑言が飛び交っている余波が聞こえてきたが、気にしないことにする。クラス代表に選ばれたことは面倒臭いが、仕方が無い。どういう意図かは読めないが、織斑秋二を矢面に立てることで、このクラスはある種の一体感を持っている。こうなってしまうえば反論の余地が無いことは明らかだ。

「それでは秋二君、クラス代表になった意気込みをどうぞ」

「不肖の身ではありませんが、代表として選ばれた以上、それに見合うように努力する所存であります」

教室を一望してから礼をして席に着く。我ながら、似合わないと思う。傍から見ていたら噴飯モノだっただろう。そのことは佐藤先生も気付いていたようで「かたいな」。もつと気楽にしたら？」と言われた。

「そうですね、自分でもそう思います。気付かないうちに緊張していたみたいです」

そう指摘されるまでも無く気付いていたのだが、俺はおどけて見せた。

後日明らかになる事ではあるが、織斑秋二がクラス代表に選ばれたのは、この学園で珍しい男子を代表に選ばばいいという押し付けだけではなく、昼前のオルコットとの対話の際の毅然とした態度が評価されていたらしいが、まあそんなことはいい。

02・Stand|by|me

汝が汝自身のごとく隣人を愛するとき、汝はまたその隣人を愛するごとく、汝自身をも愛さねばならない。

『愛と生命の摂理』

今日という日は激動の日であったと織斑一夏は嘆息する。IS学園に入学し、七年振りの幼馴染と再会し、姉には叩かれ、セシリアとか言うニューシシユセキのダイヒョウコウホセーサマに喧嘩を売られて、買って、家に帰ろうと思えば、今日から寮生活だと言われ、私物を殆ど回収できず、部屋に入ったらバスタオルを身体に巻いただけ箒が居て、襲い掛かれて、秋二には会えなかった。

「あいつも大変なんだろうな」

ベットに横になって、独り言が口から出たのは疲れているせいだったと思う。それに箒が同じ部屋に居るのも忘れていた。

独り言のつもりだったのに「どうかしたか？」と聞かれて、少し焦ってしまった。それでも平静を装って「秋二のことさ」と答えられた自分を褒めてあげたい。

「あいつも俺と同じでこの学園に入学した筈なんだけど、会えなくてさ。如何してるのかなと思ってさ」

今日から寮生活だと言われたときは、どうせ秋二が相部屋だろうと思っていたものだが、どうしてこうなった。

「秋二か、元気にしてるのか？」

「そりやもう。七年前とは大違いさ」

心配させないようにおどけて見せたが、それとは裏腹に箒の顔は少し陰った。あまり触れない方がいいのかもしれないと思って、少し強引に話題を変える。

「あのさ、箒」

「なんだ？」

「俺にISを教えてくれないか？俺はISについて何も知らない。セシリアには啖呵をきって見せたけど、このままじゃ勝てない。だから黙って負けを認めるなんて嫌だ。俺には箒の助けが必要なんだ。頼む」

向かいのベットに腰掛けている箒に頭を下げる。

「ま、まあ、そこまで言うのであれば教えてやらないことも無い。顔を背けながらも箒は了承してくれた。あまり気乗りはしないのかも知れないが、協力してくれることを純粋に感謝した。」

その後話し合った結果、知識に関しては完全に俺の責任ということで、まず参考書を熟読することが言い渡された。この参考書、電帳帳みたいなかさなのに、一週間で覚えろとかみんな鬼だ。

ISの操作訓練はISの使用許可を得るのに時間がかかるということでもまずは操縦者の身体を鍛えようという話になった。つまりは俺の身体を鍛えなおすということだ。放課後に剣道の練習をするという話だったが、全国一位の箒と打ち合ってもコテンパンにされるだけのような気がする。

とりあえず、強くないと。セシリアの奴をギャフンと言わせてやる。

放課後になってすぐにIS使用許可の申請に行ったら、受付の人に驚かれた。なんでも入学初日から申請に来る人はいないそうだ。お蔭で明日にでも使えるらしい。尤もそれ以降は時間がかかるようだ。申請用紙に氏名を書いて受付の人に提出する。

「それでは、許可証を発行しますので明日の放課後にまた来てください」

ありがとございますと頭を下げた立ち去る。今日のところはも

う用事は無いので帰ることにした。大して荷物の入っていないカバンを提げて、歩いていると校門の横に姉さん、織斑千冬が立っていた。

「どうかしたんですか姉さん」

「織斑先生と呼べ。どうしたもこうしたも無いが、お前は家に帰るつもりだったろう？」

姉さんなりに立場はハッキリとしておきたいらしい。ここでは姉弟の関係ではなく、教師と生徒であるということだろう。公私混同をしないのは、教師としては当然のことなのだろう。少し淋しいような気がしたが、仕方が無い。

姿勢を直して返事をする。

「そうです」

「今日から寮に入ると佐藤先生から聞かなかったのか？」

「初耳ですね。一週間は自宅から登校するはずでしたが？」

そう答えると姉さんは頭を掻いて「またあの人は・・・」とぼやいていた。抜けた印象のある佐藤先生だが、その印象は間違いではなかったらしい。

「変更だ。お前も今日から寮生活だ」

「まあ、相部屋が一夏なら家とあまり変わらないし問題ないですね」

「・・・一夏とは別室だ」

「・・・ホントですか？」

「ああ」

今度は二人で頭を抱えた。何の陰謀だこれは？ 姉さんの反応から見て、一人部屋という線は薄い。つまりは見知らぬ誰かと相部屋になるということだ。この部屋割り考えた奴は何を考えているのか問い質したい。

「唸っついても状況は変わりませんから、とりあえず、その部屋まで行きましょう。先生は相部屋の人に説明をお願いします。私はその人に謝罪します」

「お前が責任を感じる必要はないぞ秋二。悪いのはこの部屋割りを組んだ馬鹿と運だけだ」

状況を整理しながら二人で並んで寮へと向かう。昔は見上げていた姉さんの顔も、いつの間にかまっすぐに見つめられるようになったものだ。この分ならずすぐに追い抜いてしまふかもしれない。その事に少しだけ顔が綻んだ。

「申し訳ありません」

ドアが開いた瞬間に頭を下げた弟を見て織斑千冬はため息を吐いた。確かに謝罪すると言っていたが、いきなり言われれば相手も戸惑うだろう。案の定ドアから顔を覗かせた更識簪はキョトンとしている。

「秋二、いきなり謝っても相手を困らせるだけだ。更識、中に入れてもらっていいか？」

「・・・あ、はい、どうぞ」

おどおどする更識を先頭に私たちは部屋に入った。

「話は聞いていると思うが、こいつが相部屋になる織斑秋二だ。更識にはすまないが新しい部屋割りが組まれるまでこいつと上手くやって欲しい。こいつの人格については私が保証する。おい秋二、挨拶をしる。謝るなよ」

「初めまして、織斑秋二と申します。よろしく申し上げます」

「よ、よろしく申し上げます」

ペコペコと頭を下げあう二人。これではまるで話に聞くお見合いのようだ。あいにくと未経験であるが、知ったことか。

「固くなり過ぎだ二人とも。これはお見合いじゃないんだぞ」

我が弟ながら呆れたものだ。ここで私が「後は若い二人に任せて」だけでも言って退出すれば、本当にお見合いになりかねん。ある程度は任せておこうと思ったが、無理だ。そう思い至って、二人の間を

取り持つことにした。

その後の事を一言で言うなら、やはり、お見合いのようであったと言っほか無い。

次の日の教務室では織斑千冬のため息が度々聞こえたが、その真意を理解するものはいなかった。

03 - 造花が笑う

人の一生は重荷を負って遠き道を往くが如し。急ぐべからず。不自由を常と思えば不足なし。心に望み起こらば、困窮したるときを思い出すべし。

堪忍は無事長久の基。怒りは敵と思え。勝つ事ばかり知りて、負くること知らざれば害その身に至る。

己を責めても人を責めるな。及ばざるは過ぎたるより勝れり。

『徳川家康公遺訓』

「ではこちらが、IS使用許可証となります。どのアリーナーを使っても構いませんが、事故の無いようにお願いします」
礼を言っ受付の人から許可証という名の紙切れを受け取る。その紙切れを仕舞い込んで、足早にアリーナへと向かった。

今日することは、ISの機動訓練だ。戦闘において最も重要なことは火力でもなければ、技術でもない。もちろんそれらも戦闘に於ける要素の一つではあるが、一番は足である。今自分がどのような状況にあるのか、どうすれば良いのか、それらを把握し、それを行動に移すことが出来なければただの的だ。

そのためにも機動に最優先で時間を割かなくてはならない。それに、訓練機で出来ることなど限りがある。まずは土台を固めることから始めよう、と織斑秋二は踵を鳴らせた。

セシリア・オルコットが織斑秋二を見かけたのはほんの偶然だった。腰にまで達しようかという黒髪を靡かせながら歩く姿は、見間

違えようが無かった。

彼は声をかける隙も見せず足早に歩いていった。もともとの体格差もあって、追いつけそうにはない。

大声を出して呼び止めるのも見つとも無いし、ここで引き下がるのは何だか癪だった。

そこから彼の後をつけることになったのは必然だったと言える。足音を殺し、至って自然に後をつけた。

彼についてやって来たのは第三アリーナだった。こんなところに何の用が？

その疑問も彼の行動ですぐに氷解した。彼はポケットの中から紙切れを取り出し、整備員に見せるとすぐに、ISに乗り込んだ。

一番最初に思ったことは素人にしては随分と慣れたようにISを扱うものだ、で、次に思ったことは何故という疑問だった。

彼は何故入学二日目にしてISの訓練をしようと思ったのか？

それから呆けたように彼の動きを眺めていたような気がする。始めた頃のぎこちなさは消え、今では鳥のようにアリーナを飛行している。これがISに初めて乗る素人の動きには到底思えなかった。

結局、監視員に締め出されるまでの2時間弱、彼はずっとISの飛行訓練を続けていた。

アリーナから閉め出され、部屋に戻ろうとすると、織斑秋二とばったり会ってしまった。しかし、不思議と気恥ずかしさは感じなかった。それよりも興味が勝っていたからかもしれない。

「ごきげんよう。ISの動きを見せてもらいましたけれど、初めて動かしたとは思えないほど機敏な動きをしていましたね」

「初めてじゃないさ」

そう答える彼の顔には少し陰りが伺えた。一見、自虐にも思われ

る。もしかしたら素人ということに気がしているのかもしれない。時間も限られているので二人で並んで廊下を歩いていく。

「入学するときに動かしていたんですものね。それでも素人とは思えませんでしたわ」

「・・・イギリス代表候補生の君に褒められるとは光栄だね」

素人という言葉にはやはり敏感のようだ。今も少し顔をしかめている。

「あら、ご存知でしたの」

「君は有名人だからね」

大袈裟に驚いてみせると、彼は皮肉っぽく返したが、そうやって笑うのはなかなか様になっていた。

今なら聞けるかもしれない。そう思うが早いかな、気付けば口から声が出ていた。

「入学二日目からISの訓練なんて、勤勉なものです。何処かの誰かにも見習っていただきたいものですわ」

そう言って横目で彼の表情を伺うとさっきまでの笑みは消え失せ、闇のように深い彼の眼に視線が釘付けになった。否、怯えていた。

見たこともないような生物に出くわしたかのように体が動かなかつた。立ち止まって彼の言葉を待つ。遅れた私を彼は振り返ると視線をまっすぐに合わせて、口を開いた。

「それは勤勉にもなるさ。自分が望む望まざるに関わらず、今ここにいるということは、本来ここにいるはずだった人間を私は何の努力もなしに踏みにじったことに等しい。私はその上で胡坐をかいていられるほど図太くは無いし、厚顔無恥でありたく無い」

そうはつきりと言う彼の視線から、私は眼を逸らした。何故かはわからないが、自分の中で、言い知れぬ怒りのようなものが渦を巻いているのは理解した。

私は恥も外聞も捨ててそこから逃げ出した。

部屋に着くと制服のまま、ベットへ飛び込んだ。ルームメイトが

心配そうに声を掛けてくるのを無視して、布団に潜り込んだ。

もう何度天地がひっくり返ったことだろうとぶれる視界の中で織斑一夏は思考する。仰向けに倒れて、荒い息を整えながら、唾を飲む。

「何時まで寝ているつもりだ？ 立てないというなら立たせてやるぞ」

目の前には竹刀を持った鬼がいる。後ろでまとめてある長い髪を振り回して襲い掛かる姿はまさしく……。

「ぐえ」

「馬鹿なことを考えている暇があるならさっさと立て」

竹刀を振り下ろされてまた視界が歪む。いくら竹刀だって力任せに叩けば死ぬんじゃないか？

これ以上叩かれるのは御免なので、足をふらつかせながらも立ち上がる。

「よし、もう一度だ。構えろ」

「いや、流石にこれ以上は無理だつて。そもそも全国一位の箒に俺が敵うわけ……」

「甘っちょろい！！ やる前からそんな弱気でどうする！！ 中学でやっていかなかったとはいえ、この体たらくではあの女に勝つなど不可能だぞ」

そう言われると反論できない。しかし、こっちだって押し込まれるわけにはいかない。ここで押し負ければ俺に明日は無い。

「そうは言ってももうそろそろ切り上げないと学食も閉まるし……」

「そう言つと箒も押し黙る。これならいけるか。」

そのまま箒を丸め込むと俺達は一度部屋に戻ってから、学食に向かうことにした。

男の人と並んで歩くのなんて人生で初めての事だと思うと更識簪は緊張した。隣を歩く織斑秋二の横顔をちらりと盗み見る。ISの機動訓練をしてきたというが、その顔に疲れはさして伺えない。

初めてあった時の印象は変わった人。表情を変えずに頭を下げる彼の姿に面食らってしまったのは、記憶に新しい。あの場に織斑先生がいなかったらと考えるとあのまま日が暮れていたかもしれない。ふと口元が綻んでいることに気が付いた。人前で笑ったのなんて久しぶりかもしれない。顔を上げるといつの間にか前を歩いていた秋二君が不思議な顔をしてこっちを見ていた。

「どうかしたか？」と聞く彼に「なんでもない」と言っただけで彼の隣に追いついた。

学食は賑わっていたが、ちょうどテーブルが一つ空いていたから難なく座れた。私は和食の定食を買って、秋二君はカツ丼とラーメンに加え、その横に炭酸飲料をテーブルに並べている。

バランスも何も無いそのメニューを見て、私の口から言葉が飛び出したのは至極当然だった。

「秋二君、もう少しバランスとか考えた方がいいんじゃない？」

「よく言われるが改めるつもりは無いよ。健康は食事からと言うが、禁欲の果てにある健康なんて要らない。健康でなければいけないなんて法も無いしね」

そう言った後に「ナチスドイツじゃないんだからさ」と付け加えて、ラーメンを啜った。

「好きなものを好きなように食べて、その結果長生きできなかったとしても私はそれで満足だ」

「うーん、でも、健康であることに越したことは無いんじゃないかな？」

「確かに健康であることに越したことは無いが、健康でない人間が劣っているわけじゃないし、・・・それに俺は好き嫌いが多いんだよ」

そう言つて彼は悪戯っぽく笑うと今度はカツ丼をかき込んだ。

今まではいつも大人びた印象を見せていた秋二君が、子供みたくに笑つたことに私は驚いた。

彼が炭酸飲料を呷つているところに私の背後から声がかげられる。私にとっては突然のことだったが、ちょうど向かいに座っている彼は落ち着いて答えた。

「秋二！ こんな所にいたのかよ。いやあ、立つた数日振りなのに随分と久しぶりな気がするぞ。一緒に飯食おうぜ」

「構わんが、あまり騒ぐな一夏。それと隣の彼女は？」

彼が噂の織斑一夏なんだろう。さっきまでの多かつた視線がさらに増えるのが体感出来る。しかし、彼の登場によつて秋二君の顔が元に戻つてしまったのは少し残念だった。

「篝だよ。覚えてるだろ？」

「・・・ああ、見違えたんで気が付かなかつたよ。久しぶり、でいいのか篝」

「ああ、久しぶりだな。それにしてもその髪は何だ？」

そう言われた彼は髪を弄りながらため息を吐いた。

「こうでもしておかないと一夏と間違えられるんだよ。それは良いとして、彼女はルームメイトの更識簪だ」

「は、初めまして」

焦らなかつたわけではないが、後ろを振り返りながらお辞儀をするのは大変だということがわかつた。

その後二人の自己紹介を聞いてから、四人で食事を取ることになった。

結局、織斑一夏君目当ての女子が大勢集まつてきて、大所帯になる頃には、私も秋二君もその場からこっそり逃げ出していた。

いつの間にかいなくなっていた二人に一夏が気付いたのは、自分の食事を摂り終わってからだった。

羽が生えれば、親鳥を棄てるのが当たり前だろうが。

『ベニスの商人』

今から始まるセシリアとの試合まで、剣道の特訓しかしていなかったと篠ノ之箒は記憶する。

そうなってしまったのは一夏が不甲斐ないせいであって私の責任ではないはずだ。今も横で文句を垂れているが無視だ。ふいと顔を背けると「無視すんなー！」と一夏が声を荒げている。

これから試合だというのに、何とも緊張感の無い奴だ。昔からそういう奴だったが、もう少し秋二を見習って貰いたいものだ。

秋二を見て思ったことだが、七年も経てば、普通、人は変わるものなのだろう。秋二は一夏とは違って随分と変わったように見えた。髪が伸びたとか、背が高くなったとかではなくて、身に纏う空気と違うのか、そういうものが大人びていた。

七年前の秋二はいつも私たちの一步下がったところにいた。運動は出来たが、もともと体が弱かったこともあって、運動しているところをあまり見なかった。見たことのあるのは一緒に剣道をしていた時ぐらいのものだと思う。

だから、一夏が秋二のことを「そりやもう。七年前とは大違いさ」と言ったとき、私は言いようのない寂しさを覚えた。

七年経っても一夏は変わっていないかったが、秋二は変わった。私も一夏が言うには「一目でわかった」らしいが、秋二が言うには「見違えた」らしい。

私は七年で変わったのだろうか？ 変わってないのだから

うか？ 変わろうと望んだらうか？ 変わりたくない願っただらうか？

「来ました！ 織斑君の専用IS！」

山田先生が大声を出しながら飛び込んできたことで私の思考は遮られた。私はその事にホツとした。

山田先生の方に顔を向けるとその横には無骨な置物があった。否、あれこそが一夏のISなのだろう。一次移行も最適化処理も済んでいない鈍色のISに一夏は見蕩れている。

私はその横顔に見蕩れていた。

時間になっても現れない秋二を探して織斑千冬は校内を歩き回っていた。寮の部屋から学校の屋上まで探してみたものの、一向に見つかる気配が無かった。急がなければ一夏の試合が始まってしまおうというのに。

こうなってしまったのも佐藤先生の怠慢だというのに、何故態々私とその尻拭いをしなければならぬのだ。

すれ違う生徒が怯えていたので、多分私の眉間には深い皺が刻み込まれていたのだろう。

後日呼び出せばいいかと考えているときに窓の外に秋二の姿が見えた。木の下に位置するベンチに腰掛け、読書をする秋二に腹が立ったのはしょうがない。これも佐藤先生の怠慢のせいだ。

「こんなところにいたのか。探したぞ」

声を掛けるまでこちらに見向きもしなかったあたり、集中して読書をしていたことが伺える。本に頬を挟んで、顔を上げた秋二は驚いたような顔をしていた。

「どうしたんですか、こんなところに」

「それはこっちの台詞なんだがな。まあいい、お前の専用機が届

いたから今の内に一次移行と最適化処理を済ませておこうと思つてな。本来なら佐藤先生から話が行っている筈なんだが、その様子では知らなかったようだな」

佐藤先生は後で説教だな。

私が「着いて来い」と言つて歩き出すと、慌てた様子もなしに私の隣に並ぶ。

私が切れと言つても切ろうとする気配の無い長い髪を揺らしながら歩く姿は、遠目からは女性に見えるだろう。本人は自覚していないようだが、この学園において秋二よりも一夏の周りに人が集まるのは、人柄も関係しているだろうが、言つてしまえば女と勘違いされているからである。IS学園の制服はある程度の改造が認知されているため、パンツを好んで穿く生徒も多い。秋二はそのうちの一人と勘違いされているようだ。

隣を歩く秋二が不意に話しかけてきた。

「それにしても専用機が出来るのが早すぎませんか？」

「もともと倉持技研が開発していたものを引き取る形になったからな。一から作ったわけじゃない」

私がそう言つと秋二は顔を綻ばせて「ダウト」と言つた。

「東さんでしょ」

「……その通りだ。もともと倉持技研では手に負えないと凍結されていたプロジェクトを東の奴が完成させたものだ。よくわかつたな」

モルモット「素人にそこまで入れ込む人はそういないでしょう？」

「それでもないようだぞ。お前達のためにその他のプロジェクトをかなぐり捨てている様だしな」

それ程までにISを使える男に執着しているらしい。男でも使えるISを開発しようとしているのか、ISを使える男を研究しようとしているのかは定かではないが、どちらにしろ弟がモルモット扱いされてはいいい気分ではない。

「それよりも急ぐぞ。もう一夏達の試合はもう始まっている頃だ」

「わかりました」

その返事を聞いて私は歩幅を広げた。

ピットで一次移行と最適化処理を行いながら見た一夏の試合は、敢闘賞はあげてやってもいいくらいのものであったと織斑秋二は評価する。

姉さんと二人でピットに着いたときに、ちょうど一夏はミサイルの直撃を食らった所だった。そこで白式という一夏の専用ISが一次移行し、首の皮一枚繋がったが、最後は自分の武器の特性を理解せずに自滅という結果で終わった。

無傷で勝利したオルコットは、油断していたとはいえ流石は代表候補生といった所だろうか。

私としては試合よりも、七年振りになるらしい幼馴染の表情の変化を見るほうが楽しかったというのは秘密だ。

目の前では沈んだ様子で帰還してきた一夏を箒と姉さんが顔を綻ばせながら叱咤しているという、何とも微妙な光景が展開されていた。

気を抜いていたため、一通り言い終えてからこちらに振り向いた姉さんの言葉に対応できなかった。

「よし、次は秋二だ。オルコット、連戦になるが問題ないか？」

『問題ありません』

「よし、行け」

「……………聞いてませんよ、そんなこと」

「言っていないからな。いいから行け」

問答無用とはまさにこういうことを言うのだろつな。

「……………了解しました」

『呉葉』俺の専用機。基本的な装甲は白式と似ているが、カラーリングは深い赤を基調に置いたデザイン。武装に関しても刀一本の

白式とは対称的で、近接用の武装が一切無かった。切り札となる単
一仕様は白式同様搭載されているらしい。ジョーカー
ワン

スペックの確認もそこそこに、ISに身体を預けて発進する。

その途中で「負けるなよ！」と言う一夏の声が聞こえたが、返事はしなかった。

アリーナではすでにオルコットが待ち構えていた。彼女はスッと伸びた切れ長の眼で真っ直ぐに見つめてくる。

「御機嫌よう、秋二さん。貴方には手加減致しませんわ」

「お手柔らかに頼むよ」

おどけて見せると彼女は彼女は微笑んで見せた。随分と柔らかい笑顔をするようになったと感心する。何かあったのだろうか？

「ふふふ、では私と一緒に踊ってくださいさる？」

「ダンスは苦手なんだがね・・・」

以前会った時との違いに戸惑いながら頭を掻いた。

二人で笑いあっていると試合の開始を告げるブザーが鳴り響いた。

開始と同時にオルコットのライフルから光が奔る。それを回避する間にモシン・ナガンを取り出す。時間をかけずにライフルで狙い撃つが当然のように避けられる。時間をおかずにアヴェンジャーに切り替え、ガトリング砲で弾幕を張るが、オルコットはいとも容易くそれをすり抜けると、BT兵器を飛ばしてきた。右下方と左後方からの射撃を左下方に回避するがそこに待ち構えていたようにライフルの光線が向かってくる。それを加速で何とか避けて体勢を立て直そうとするが、四基の砲台と一人の狙撃手からの攻撃に隙は無く、防戦を強いられることになった。

「逃げてばかりでは、お話になりませんわ」

「せつかく付き合ってるっていうのにそれはあんまりじゃないか？」

せめて口だけでも虚勢を張るが、彼女の言うとおりこのままでは

話にならない。だが、気付いてはいないようだがもうすでに手は打つてある。

SVDライフルを取り出し、逃げながら打ち込んでいく。今はまだ君のターンだ。それはわかっている。真っ直ぐに飛んでくる銃弾を彼女は華麗に避けてみせる。当然だが、まだ甘い。直後、回避した彼女の周囲で爆発が起きた。彼女も、そして周りの人間も何が起きたのかなんて気付いてないはずだ。気付いているのは俺ただ一人ちよつとだけの優越感を身に覚える。

呉葉の武装の一つにマインスプレッドというものがある。粉末状の爆薬を空气中に散布し、その粉末が集まったところに銃弾を打ち込むと爆発するという見えない爆弾。

オルコット、ここからは俺のターンだ。

「演目を変えよう、セシリア・オルコット。君の奏でるワルツはここで終幕。今からは私の指揮する歌劇に付き合ってもらおうか」
何が起こったのか理解できていない彼女を尻目に高らかに言い放つ。

「オペラ…ですか？」

「ああ、主演は君で演目は……『魔弾の射手』だ」

演目を言うのと同時に異様に長いマスケット銃を取り出した。この銃こそが呉葉の単一仕様、魔弾の射手である。

警戒するオルコットの前でゆっくりと銃を構える。狙うのは彼女を守る衛星、その一つに狙いを定めて引き金を引いた。

彼女は当然撃ち落とされまいと回避させるが、銃弾はまるで獵犬のように衛星を食い破った。その事に彼女は驚いたが、指揮者は指揮棒を振り、また別の衛星に喰らいついた。二つの爆炎を眺めて、彼は謳い始めた。

「Was geschieht wohl auf Erden
dem J?gervergn?gen?

Wem sprudelt der Becher des L

e b e n s s o r e i c h ?
B e i m K l a n g e d e r H ? r n e r i m G r ?
n e n z u l i e g e n ,
d e n H i r s c h z u v e r f o l g e n d u r c h
D i c k i c h t u n d T e i c h
彼の歌声と共に衛星が落ちていく。そして彼女を守る矛がなくな
ったとき、猟犬は彼女へと襲い掛かる。

狩人は私で、貴方は愛しい青い鳥。

彼は猟銃をバトンのように振り回しながら、謳い続ける。

「 i s t f ? r s t l i c h e F r e u d e , i s t m
? n n l i c h V e r l a n g e n ,
e r s t a r k e t d i e G l i e d e r u n d w ? r
z e t d a s M a h l .
W e n n W ? l d e r u n d F e l s e n u n s h a
l l e n d u m f a n g e n ,
t ? n t f r e i e r u n d f r e u d ' g e r d e r
v o l l e P o k a l !
J o , h o ! T r a l a l a l a l a ! l a l a l a l a
l a l a . . . 」

彼女は必死に逃げ回る。しかし、猟犬はそれを許さない。ティン
ダロスの猟犬のように銃弾は歌姫を追い立てる。

「 D i a n a i s t k u n d i g , d i e N a c h t
z u e r h e l l e n ,
w i e l a b e n d a m T a g e i h r D u n k e l
u n s k ? h l t .
D e n b l u t i g e n W o l f u n d d e n E b e
r z u f ? l l e n ,
d e r g g i e r i g d i e g r ? n e n d e n S a a t

en durchw?hlt

誰もが息を呑んで見つめていた。聞き惚れていた。

外す事のない魔弾が獲物を仕留める瞬間を、誰もが持ち詫びていた。

「ist fürstliche Freude, ist m
?nnlich Verlangen,

erstarkt die Glieder und w?
zetz das Mahl.

Wenn W?lder und Felsen uns ha
llend umfängen,

tant freier und freudiger
volle Pokal!

Jo, ho! Tralalalala! lalalala
lala...」

彼が歌い終わると同時に青い鳥は墮ちていった。それと同時に青
い雫が零れ落ちた。

それから紅いISが獲物を抱えてピットに戻るまで、誰
も口を開くことをしなかった。

05 - くるくる少女

人は何でも忘れる事が出来るが、自分自身だけは、自分の本質だけは忘れる事はできない。

『幸福のためのアフォリスメン』

狩人というよりはも、まるで魔王ではないかと山田麻耶は怯えていた。

始めは劣勢でありながらも、的確に牽制を繰り返し、隙を見せることは無かった。しかし、攻勢に出るからは一方的であった。歌を歌いながら、自由自在に動き回る銃弾が追い立てていく。その姿は歌劇の中の狩人マックスというよりは、魔王ザミエルのようだった。ISを待機状態にし、オルコットさんを抱えて織斑君の弟さんがピットに戻ってきた。彼は地面に落ちた衝撃で気を失ってしまったオルコットさんをそつと脇の方へ横たえる。

その傍に織斑君が興奮した様子で駆け寄っていく。

「すげえじゃんか秋二！！ 何時の間にそんなに上手くなったんだよ」

それと対照的に弟さんは冷静だった。息を荒くして近寄る織斑君を片手で制して注意する。

「怪我人の前だ、少し静かにしている」

「秋二、オルコットはどうだ？」

そう織斑先生が声を掛けるが、少し声のトーンが低く感じられた。「気を失っただけだと思いますけど、素人判断では安心できませんから、保健室に連れて行ったほうがいいと思います」

「まあ、当然だな」

「ということ、後は任せたぞ一夏」

そう言つとすぐに踵を返してピットから去つていく。その背を当然のように織斑君が呼び止める。

「はあ！？ ちよ、ちよっと待てつて。なんで俺がそんなことしなくちゃならないんだ！？」

「俺は疲れたからもう寝る」

振り返ることも無く、靴の音を響かせながら歩いていった。その後姿に織斑先生も声を掛けることは無かった。

「ええつと、どうしたらいいんでしょうか？」

辛うじてその場を切り替えようと声を奮うが、何をしたらよいかわからなかった。

「オルコットを保健室に運ばなければならぬ。一夏、任せたぞ。山田先生も着いて行つてくれ」

そう言つと今度は織斑先生がピットから去つていった。

その後、残された三人でオルコットさんを保健室に連れて行つた。その際、終始篠ノ之さんが俯いていたようだと思つたら、次の瞬間には顔を赤くして怒り出したりと、百面相を垣間見た。

目の前で起きたことであるにも拘らず、先の試合のことを篠ノ之篤は理解できなかった。

一夏と同じく秋二もISに関しては素人のはずだ。それにもかかわらず、秋二の動きは一夏とまるで違った。

一夏はISの練習をしていなかったこともあり、その飛行はお粗末なものだった。試合の途中から徐々にまともになっていったが、あくまで素人にしては及第点を与えてもいいというものだった。

しかし、秋二は違う。始めからあの女と同様にアリーナを動き回っていた。秋二は訓練用のISで練習したと言っていたが、ほんの二、三回でそこまで上達するはずが無い。そして、代表候補生を圧倒してしまった。

私は少し怖くなった。IS学園に入学してから、もつと詳しく言えば、秋二と再会してからずっと胸に引っかかっていたしこり。

一夏達と別れてからの七年間、私はその頃の思い出を糧に生きてきた。友達がいなかったわけではないと思う。それでもどこか壁を作って生きてきた。

だから、IS学園で一夏達にまた会えるとわかって、私は頬に熱いものが伝うのを感じた。

一夏が七年経っても変わらずに、私に気付いてくれたときは、また目頭が熱くなった。それを気付かせまいと顔を逸らしていた。真っ直ぐに見つめたいというのに。

その一夏に連れられて学食に行くと、何かを見つけたのか一夏は走り出した。呆気にとられたが、遅れないように着いていく。

『秋二！ こんな所にいたのかよ』

その声を掛けられて顔を上げる、一夏に似た、幼い頃の面影を少し残した顔。彼の物腰は子供の頃とは大違いだった。髪は伸びきってはいるが、手入れは行き届いているようで、しなやかな黒髪だった。昔も髪を伸ばしていたが、ここまでではなかったと記憶する。今では私より少し短いくらいだ。

『隣の彼女は？』

秋二の口からその台詞が聞こえたとき、私の心がざわついた。だからきつと、気付いたのはそのときだ。

子供の頃の自分達にはもう戻れないのだな。

人は変わる。変わらない方がおかしいと思われる。その変化も、共に過ごせたのなら微笑ましく感じられただろう。

しかし、そう感じるには七年という月日は長すぎた。

「やっぱり、秋二は凄いやな」

そう呟くのは同居人でもある織斑一夏だ。一夏は秋二のことをどう思っているのだろう。

「そうだな。七年間で随分と変わった」

「そんなに変わったか？」

気付いていない一夏に「ああ」と返事をして立ち上がった。七年間隣に居たから気付かないのかもしれないな。

「そろそろ食堂に行くぞ」

「ああ、わかった」

返事をして一夏もベットから立ち上がる。早足で歩いてくるのをドアを開けて待つ。

二人並んで歩き出すと唐突に一夏が呟いた。

「秋二が歌ってたのって何の歌だ？」

「知るか」

今日は食堂を利用するのはやめておこうと織斑秋二は決意した。

都合のいいことにキッチンの戸棚の中にはパスタがあつたので、問題は無いだろう。更識の私物かもしれないから断りは入れておいたほうがいいかもしれないが、生憎と今は席を外している。事後承諾という形になるが、仕方が無い。

そう思っているところに、更識が帰ってきた。

「お帰り」

「・・・ただいま」

帰ってきた更識の様子がおかしいが、どうかしたのだろうか？

「調子でも悪いのか？」

「！？ うっん、なんでもないよ」

それだけ敏感に反応すれば丸わかりだが、話したくないことなら触れないで置こう。

「ああ、そうだ。このパスタ貰っていいか？ 後で代わりの買っ

てくるからさ」

「いいよ、気にしなくても。でも、どうして？」

「目立つちゃったからね。暫くは学食に行かないようにしようかなど」

そう言つと俯きがちに「そっか」とだけ言った。

俺は話を変えようと更識に切り出す。

「更識はどうする？ よかったら作るけど」

「いいよ、私のことは気にしなくても」

腕を大袈裟に振るいながら、遠慮する。もしかしたら男の料理なんて不味いと思つてるのかもしれない。

「茹でる量が変わるだけだ。大した手間じゃない」

「・・・それなら、お願いしようかな」

更識は控えめに返事をする。

断られたらそこまでにしておこうと思つていたが、了解は得ることが出来た。

俺は戸棚から適当な鍋を取り出して、パスタを茹で始めた。

これまでの人生は苦難の連続であつたとセシリア・オルコットは記憶する。

尊敬する母に先立たれ、幼いながらも当主としての自覚を持たねばならなかつた。

家を取り潰そうとする外戚達を押さえ込み、家を守らねばならなかつた。いくら子供だといつても、そのことは侮りを誘発するだけで、誰も手を差し伸べてくれるものはいなかつた。それでも私は私を、私の家を、慕つて着いて来てくれる人の為にも、亡き母の為に、負けるわけにはいかなかつた。

一人娘であることを呪つた事もある。どうして私には姉が、兄がいらつしやらないのだらうと。姉か兄がいてくれたのなら、まだ私

は子供のままでいられたのに。

私は環境に適応するために、変わらざるを得なかった。

子供なりによくやっていった方だという自負はあったが、それでも家の衰退は免れなかった。

そこに光明を齎したのがISであった。ISの操縦者となり、国を背負って立つほどの人間に成れば、家の再興もわけは無い。ISの適正がAであったこともあり、私はISの国家代表になろうと亡き母に誓った。オルコットの名を晒った者たちに見せ付けてやるうと。

ISの訓練は妥協しなかった。ライバルは多く、席は少ない。そんな椅子取りゲームを勝ち続け、遂には代表候補生になった。

しかし、まだまだ。まだ上がある。国家代表までの道程は長く険しいが、歩を止める気は毛頭ない。

IS学園入学の話が来たとき私は一も二も無く返事をした。各国のIS操縦者が集まり、切磋琢磨する学び舎。それは私が望むものだった。

IS学園の入試を主席で合格し、私はちょっとした優越感を感じていた。今、思えばもうすでに慢心が私の心を巣食っていたのだろう。もつと言え、代表候補生になることが決まったときからかもしれない。

しかし、そのとき私はそれに気付いていなかった。

それに気が付いたのは先の試合。素人と侮り、冷静さを欠いて、最後は後一步違っていたら私が負けていたというところまで追い詰められた。正直に言って、あの勝負を勝ったと胸を張っていえるはずが無い。それでも不思議と不快ではなかった。

己の未熟を再認識させてくれた、真っ直ぐな瞳。今まで見てきた男達とは違う眼。

そして、彼とはまた別の眼をした人を想起する。一見するとそっくりなように見えて、その本質は全く違うように感じられた。

連戦ではあったものの、損傷は軽微で、ビットも替えが利く。何も問題は無かった。気付かずに放って置いた油断も捨てた。その前の試合で気が付いたというのもあるが、それよりも何よりも、彼と本気で向き合いたいと思ったからだ。

『自分が望む望まざるに関わらず、今ここにいるということは、本来ここにいるはずだった人間を私は何の努力もなしに踏みじつたことに等しい。私はその上で胡坐をかいていられるほど図太くは無いいし、厚顔無恥でありたく無い』

以前、真剣な表情でそう語った彼。

その彼に対し、本気で勝負を挑み、彼はそれを正面から受け取って、私に敗北を突きつけた。虚を突かれて、訳もわからず敗北した。魔弾の射手、第3幕、第6場、第15番、狩人の合唱。それを歌いながら、猟銃を小手先で弄ぶ様子は、まるで指揮者のようであった。

たった一週間、たった数回の訓練であそこまで上手くなるのか。だとしたら彼は天才なのかもしれない。私が何年も掛けてたどり着いた場所に、彼はもう手を掛けている。

それでも私は諦めない。彼が天才だとしても、私は私。初心に還り、もう一度亡き母に誓おう。

私、セシリア・オルコットは家名と私自身の誇りに掛けて、国家代表になってみせます。

今は泣いてる暇なんて無い。そう拳を握り直すと布団から飛び起きた。

その後、オルコットは食堂に向かおうとしたが、すでに営業は終了しており、ルームメイトから簡易携帯食料を譲ってもらったことになった。

06 - 風の通り道

思慮分別は人生を安全にはするが、往々にして幸せにはしない。

『怠け者』

ノックの音を聞いてドアを開けると、そこには見覚えの無い女の子が立っていたと織斑秋二は認識する。随分と袖の余った制服を着ているが、物腰の柔らかい雰囲気と相まって、不思議と似合っていた。態々ここを訪ねてきたということは、更識に用があつてきたのだからか？ そうなのだとしたら残念ながら今は席を外している。

「あー、更識に用だったら、今はいないから、また今度にしてくれないか」

「えーっと、かんちゃんにじゃなくてしゅーちに用があつてきたんだよー」

間延びした声で言う、しゅーちゃんというのは俺のことなのだろうか？ 他にいないのだからそういうことになるのだが、まあそんなことはいい。しかし、彼女とは初対面だったはずなのだが、何の用だろう。

「織斑秋二のことなら私のことですが、何か用ですか？」

「やっぱりそうかー。おりむーとそっくりだもんね。それでね、おりむーのクラス代表就任パーティーするんだけど来れないかな？」

「遠慮しておきます」

短くそう言ってから、このまま返すのもあれなので「寄って行ったらどうですか？ お茶ぐらいは出しますよ」と彼女を促す。返事をして彼女はきよるきよる部屋を見回しながら進んでいく。

インスタントの紅茶を淹れて彼女に差し出す。俺が一口飲むのを見て、彼女も不機嫌そうに紅茶を啜った。

「むー、しゅーちゃんはどうして行きたくないの？ おりむーと仲良くないの？」

顔を上げて彼女の顔を見ると頬を膨らませて、如何にも怒ってますという表情をしている。それを見て、俺は頬を掻きながら「面倒なことは嫌いでね」と答えた。一夏との仲は悪くは無い。それでも双子はいつでも揃って仲良しこよし、なんて振舞うのは流石に勘弁だ。自分自身、他人に合わせることは苦手な人間だと自覚している。「この間の試合のせいで目立ってしまったね。暫くは引きこもってようと決めたんだ」

そういった後、思い出したように「それに二組の代表でもあるしね」と付け加えた。それを聞いた彼女は「そっかー」と言って天を仰ぐと、テーブルに突っ伏した。テーブルに身体を預けてこちらにダルそうな目を向ける。

「しゅーちゃんが来たら皆喜ぶと思うのになー」
とろんとした眼で見つめてくる彼女から、ふいと目をそらした。紅茶をまた口に運びながら、そういえばと思う。

彼女は更識のことをかんちゃんと呼んでいたことから知り合い、おそらく友人関係であることは想像に難くない。それならばと紅茶を置いて口を開く。

「それなら更識の奴を連れて行ってくれないか？ ここ最近悩み事があるみたいだからさ」

そのことに気が付いたのは試合の日。あの時、部屋に戻ってきてからずっと、落ち着きがないというか、うわの空というか、そんな感じだった。

呆気に取られているのか、瞬きを繰り返す彼女に付け加えて言う。「でも、その悩みの種と顔を合わせるの嫌かもしれない」
ため息を吐いてから、紅茶の残りを啣る。

彼女が余所余所しい態度を取る様になったのは、その次の日からだった。なんとなく遠慮しているような所は、元から見受けられたが、ここ最近はあからさまに顔を背けることも多くなった。どうし

てかを考えるには切片が少ないが、何が原因なのかはハッキリしている。

それは俺が一夏にあるのだろう。もしくは両方か。どちらにしろ同じ顔をしている以上、その顔とだぶってしまうのは当然といえるかもしれない。

飲み終えたカップをソーサーに乗せて彼女を見据えると、彼女は驚いたような顔で、口を少々だらしなく開けていた。そして、ぼそぼそと声を出す。

「……………気付いてたんだ」

「気付きもするさ。同じ部屋で生活しているわけだからね。ちょっとした気分転換にでもなればいいと思ったんだけど、やめといった方がいいかな？」

「誘ってみるよ。ありがとねしゅーちん、かんちゃんのこと思っ
てくれて」

そういつて彼女は微笑んだ。初め、誘いを断ったときに顔を膨らましていたのとは大違いだ。

それに対して「気にしなくていい」というと、彼女は紅茶を一気に飲み干して、部屋から出て行った。一度ドアを閉めてから、彼女はまたドアを開けて一言だけ言って去っていった。

「かんちゃんもクラス代表なんだけどねー」

去り際に皮肉を言っていく辺り、律儀なものだと感心する。表情豊かな人だとは思ったが、なかなか芸も細かいらしい。不意に口角が釣り上がるのを感じてから、あることに気が付いた。

彼女の名前、聞いてないや。

本音に会った瞬間に全身に悪寒が駆け巡ったことを更識簪は覚えている。私の数少ない友人の一人で従者でもある彼女との付き合い

は長い。その為か、彼女が悪巧みをしているときの顔は良く分かるのだ。

のほほんとした温和な表情の裏に隠した小悪魔の微笑を、私は確かに認識することが出来る。

しかし、わかったからといって回避できたことが無い。いつもいっつも、彼女に押し切られてしまう。

手を大きく振りながらパタパタと駆け寄る様子は犬のようにも見えたが、私にとっては悪戯好きな妖精のようであった。

「かんちゃん、パーティーだよ」

どんな言葉が来ても冷静に対処しようと思いついたときの出来事だった。要領の得ない台詞に対して、思考が停止しそうになるのを必死で動かす。

「何の？」

しかし、何が何だかわからなかった私は、あっという間に頭が回らなくなった。結局、口から出たのは疑問だけだった。そして、彼女の次の言葉で完全に思考は停止した。

「おりむーの就任パーティー」

本音は確か一組だった。おりむーというのは織斑一夏のことだろう。その名を聞くと胸の奥で何かがざわつくのがわかる。

完成間近で開発中止になった私の専用機。それが中止になったのは、織斑兄弟の専用機の研究に倉持技研が総力を結集しているからだという。それを聞いて、というより織斑兄弟に専用機が用意されるということを聞いたときから、私の心の中である感情が芽生えていた。

嫉妬。私は彼のことが羨ましかった。

ルームメイトである織斑秋二は勤勉な人だった。初日からISの訓練を始めようとISの使用申請をしたり、参考書を熟読し、またネットでも情報収集をしていた。だからといって、四六時中ずっとISに関することをしているわけではなく、時間を見て読書をした

り、私のことを気に掛けてくれる気さくな人だった。

私にとって初めての男の友達。大人しい印象とは裏腹に、時折子供のような顔を見せる彼。

そんな彼を羨ましいと思つてしまった。そのことは私の行動の端々に如実に出ていたが、彼はいつも通りに私に話しかけてくれた。

嬉しくなかったと言えは嘘になる。それでも私はそつけない態度を取つて欲しかった。矛盾した願望が私の中で渦巻いていた。

物語の主人公のような彼。私もそんな風に思つていた。しかし、彼はそれを否定した。

それは『どうしてそんなに頑張るの?』と聞いたときのことだった。彼は『オルコットにも似たようなことを言つたんだが』と断つてから、真つ直ぐな眼をしてこう言つた。

『私が今ここにいるということは、本来ここにいるはずだった人間を私は何の努力もなしに踏みにじつたようなものだ。私は言わば略奪者だ。だからこそ、私は努力を惜しむわけにはいかない』
略奪者と卑下する彼に向かつて『そうじゃない!』と叫んでしまった。目の前の彼も呆気にとられているようだった。

あの時、彼に言つた台詞は確か『秋二君は悪くない』だったはずだ。これだけは確信を持つていえる。

誰かの為に声を荒げるなんて初めてのことだった。

それを聞いた彼はばつの悪そうに頬を掻きながら『ありがとう』とはにかんだ。

よくよく考えれば誰かに対して嫉妬したのは初めてかもしれない。姉さんのことは凄いと思う。でも、不思議と嫉妬したことは無かった。それが純粹な憧れからだったのか、もうすでに敵わないと諦めていたからかは自分でも良く分からない。そのどちらの感情も自分の中には確かにあるから。

初めて出来ただだの友達。初めて感情を露にしたのも彼。

織斑秋二は私の初めてをどんどん奪つていくなと思つた。その次

の瞬間、顔がかつと赤くなるのを感じた。

隣から意地悪な顔で「どうしたの？」と声を掛けられて、私は咄嗟に逃げ出した。

しかし、その後捕まえられて、そのまま引きづられるように着いて行った。

のほほんさんが「私がしゅーちんを連れてくるよー」と言って、帰ってきたときに隣に居たのは更識さんだったと織斑一夏は天を仰いだ。俺が行けばよかったと思う反面、俺が行っても、面倒だとか言って、来なかったような気もする。

しかし、これでめでたく周囲の注目を一身に受けることになった。慣れたといってもこれはきつい。元々、今回のパーティーの主役が俺なのだから仕方ないといえは仕方ない。

なんとなく答えはわかっているが、念のためのほほんさんに確認してみる。

「秋二は？」

「しゅーちん？ めんどくさいからパスだつて」

わかっていた事とはいえ期待していないわけではなかった。しかし、面倒くさいからという理由は素直すぎる気がする。嘘を吐いて欲しいというわけじゃないが、双子の兄弟なんだしこんなときくらい一緒にいてくれてもいいのと思う。それに、この間の試合の事とかも聞きたいし。

もうすでに、なし崩しに始まっているパーティーであったが、仕切りなおしということで改めて乾杯の音頭をさせられた。でも俺に気の利いた挨拶とかは期待しないで欲しい。周りの物足りなそうな眼が痛い。

手元においてあった紙コップに手を掛ける。中身は市販品の炭酸飲料だったが、渴いた喉にはよく効いた。

咽返りそうになったが、何とか堪えて、辺りを見渡すと、箒とセシリアが口論しているのが見えた。この間からずつとあんな感じだけど、仲が良さそうなので安心した。箒は愛想が無いからクラスメイトと上手くやっていけるか心配だったが、どうやら杞憂だったようだ。満足そうに頷いてから、もう一度コップを呷った。そして、今度は完全に咽た。

「おりむー大丈夫？」

「咽ただけだから大丈夫」

そう尋ねてくるのほほんさんの隣には秋二のルームメイトだという更識さんがいる。秋二ってどんな生活しているんだろうか。今まで同じ家で暮らしてきたのだから、ある程度は予想がつくが、寮生活は今までと勝手が違う。その所を更識さんに聞いてみることにした。

「えーつと更識さん？」

「な、なんででしょう？」

「いや、秋二って部屋ではどんな様子なのかなって思って」

そう聞いた途端、辺りが騒然とする。

「更識さんって弟くんと同じ部屋なの!？」

「ずるいなー。私と変わってよー」

「寝顔とかどんななの？」

「聞かせて、聞かせて？」

俺の一言で一組の皆が更識さんに群がっていく。それに驚いた彼女は、全力疾走で逃げていった。

俺は女子の反応のよさに啞然とし、何も聞けなかったと呆然となった。

その勢いのまま、俺の所に秋二の質問が殺到し、根掘り葉掘り聞かれてしまった。後日一夏はそのことで秋二にこっぴどく絞られた。

07・ラフ・メイカー

喜びには悩みが、悩みには喜びがなくてはならない。

『ファウスト』

週が明けて学校に登校すると、クラスでは転校生が来るという話題でもちきりだった。その喧騒に織斑秋二は辟易した。

なんでも中国の代表候補生が二組に転入してくるらしい。こんな時期に変なものだと思わずにはいられないが、そんなことよりも転入生が来るという事実の方が興味深いらしい。

「ねえねえ秋二くん、転校生ってどんな子かな？」

「どうだろうね？ まあ、すぐにわかるだろうけど」

そう言って諸手を上げてみせるが、お構いなしに次から次へと捲くし立てていくクラスメイト達に若干うんざりした。

その後も騒がしかったが、その騒ぎも隣のクラスから聞こえてくる叫び声で静まった。

「んなっ……!!? 何てこと言うのよアンタは!!!」

非常に聞き覚えのある声がある。ホンの一、二年前に聞いたきりの、耳によく響く声だ。この声の主が転入生の正体というなら、面倒なことになりそうな気がする。

ため息を吐きながら入り口を見ると、佐藤先生がちょこんと顔を出している。一組の喧騒に目をやっているのだろう。そんなことをしていると、姉さんに叩かれるぞ。

そんなことを思っていると、佐藤先生に出席簿という鉄槌が下った。

その後、頭を抱えた二人が教室に入ってくる。一人はこのクラス

の担任である、佐藤詩織、もう一人はおそらく転入生なのであろう、数年ぶりに会う友人、鳳鈴音。

二人が頭を撫でながら入ってくる姿を冷めた目で眺めていたと自覚している。だから、目が逢った彼女が大声で捲くし立ててきたことは当然だったかもしれない。

「ちよつと、秋二！ 黙ってないでなんか言いなさいよ！！」

その声にふいと顔を背けるが、些か失敗だったかもしれない。背後では、また喧騒がよみがえっている。

それに気付かない振りをしてしながら、目の前で行われる友人の自己紹介を眺めた。時折こつちを睨んできたが、可愛いものだ。

授業が終わった瞬間に、馴染みの友人のところへ鳳鈴音は駆け出した。

「秋二？ 無視するとはいい度胸じゃない」

「久しぶりだな、ドルバツキー。元気にしてたか？」

「ドルバツキーって言うな！ まあ、見ての通りぴんぴんしてるわ」

「しぶといのはお互い様だね」

そう言って二人で笑い合う。こうして笑い合うのも数年ぶりになるのかと思うと懐かしいものだ。

織斑兄弟と出会ったのは数年前。中国からの留学生として日本にやってきたあたしはクラスで浮いた存在だった。自分も自覚していたが、愛想が無い子供であった為、あたしは更に孤立した。

そんな私に手を差し伸べてくれたのが一夏だった。元より優しい性分なのか、織斑一夏は誰にでも優しくかった。それは私にも適応したのか、初対面のあたしに対しても人懐こい笑みを浮かべていた。

そして、その後ろに秋二はいた。興味のなさそうな様子で本を片

手に一夏の後ろにいた彼は、初対面の私に向かって『・・・ネコ？』と呟いた。

それを聞いてあたしは秋二に向かって飛び掛った。が、またも興味のなさそうに首根っこを捕まえられて放り投げられた。

床に転がるあたしに一夏が『大丈夫か？』と言って手を貸してくれた。

これがあたし達の出会い。それから、あたしはよく笑う様になった。友達も増え、両親の不和も気に留めなくなった。

「ええつと・・・、秋二くんの知り合いなの？」

そう言われて意識を戻すとあたしと秋二の周りをグルッと囲むようにクラスメイトが立っていた。目の前の男の態度に気を取られて気にも留めなかったが、注目的になつていたようだ。

答えようとした私よりも先に秋二が声を挟む。

「ドルバツキーは私の友人だよ」

「ドル・・・バツキー？」

「ドルバツキーって言うなって言ってるでしょうが!!」

「ドルバツキーっていうのはこいつの渾名だ。近所にすむネコに似ていたモンでさ」

うるたえるクラスメイトに得意気にそう言う秋二にむかつて、拳を振るったのはあたしのせいではない筈だ。

わりと本気で殴ったというのにこの男は大した事も無いように払いのける。避けながら回りに「ネコっばいだろ？」と聞く様子にまた腹が立った。

でもそのお蔭で、クラスにはすぐ溶け込めた。

認めたくは無いけど、秋二のお蔭だ。認めたくない、認めたくないけど、いつもいつもそうやって気を使ってくれる。あたしにとって織斑秋二はそんな男だった。

昼になつて昼食に一夏と秋二を誘つて行こうと思つたが、まず秋二に声をかけたら「先約がある」と言つてどこかに行つてしまった。仕方なく一夏だけ誘つと喜んで付き合つてくれた。何だかよくわからない二人が隠れながら付いて来たが、一体何なのだろう。

「いやー、まさか鈴がくるなんて思わなかつたよ。それにしても久しぶりだな」

「ま、まあ、そうね、久しぶり。秋二にも会つたわよ。二人とも相変わらずみたいね」

久しぶりに会つてもこの男は変わらない。ほんの少し顔が熱くなる。それを振り払うように足を速めた。

「早くしないと置いてくわよ」

「待てつて、鈴」

そう言つてあたしは笑顔で駆け出した。

遠くに見える織斑秋二の姿に向かつて大きく手を振ると、彼が面倒臭そうに手を上げて合図したのを見て更識楯無は満足した。

正直に言つてしまうと、彼がこの場にきてくれるなんて思いもしなかつた。そのことにちよつと顔が綻ぶ。

不機嫌そうなのは誘い方が悪かつたせいだと思つたが、態々足を運んでくれるなんて律儀おもしういな人。

態々ここまで来てくれた彼は、態々私の隣に腰を下ろした。真正面から顔を見たくないという意趣返しだろうか。

「初めまして、織斑秋二君。私は更識楯無と言つたの。よろしくね」
そう言つて笑顔で微笑みかけるが、それを気にも掛けずに「初めまして」とだけ彼は言つて、持ってきた昼食に手を掛ける。

彼の噂はよく知つている。ISを使える二人目の男性で、つい先日には、一学年の主席であるセシリア・オルコットを下している。そして私のかわいい妹の同棲（勘違い）相手でもある。

初め聞いたときはどうやって消してやるうかと考えていたものが、今では幸運だったんだと確信が持てる。彼と会ってから、ちゃんとはよく笑うようになった。私の前では見せないけれど、人見知りだった彼女がここまで変わるとは思いもしなかった。だから、ちよつとだけ羨ましい。

左に顔を向けると麻婆豆腐を片手に、天井を頬張っている秋二君がいた。偏食家だと聞いていたが、これほどだとは思わなかった。

「ねえ、秋二君、もう少し食事のバランスとか考えたらどう？」

そう聞くと彼はキョトンとした顔を一瞬見せると、次の瞬間笑い出した。

「ははははは、何だかんだ言っつてやっぱり姉妹なんですね。簪も同じ事を言っつてましたよ。まあ、直す気はありませんけどね」

笑った彼の横顔からは不機嫌そうなものは見受けられなかった。

妹と同じだという彼の言葉が嬉しかったのは秘密だ。

「それより、今日呼んだのは何故ですか？」

「特に何も無いよ。強いて言うなら、君の顔が見たかったからかな」

「それであんなモノ送ってきたんですか？」

「気に入ってくれた？」

彼があんなモノというのは恋文を模した招待状のことだろう。意表をついてみたのだが、彼はどんな反応をしたのだろうか。

見た瞬間に顔を赤くして恥ずかしがったり、はないな。うん、絶対がない。どちらかと言うと、冷めた目で一瞥してからゴミ箱に放り投げそうだ。

「次やったら、真に受けますからね」

そう言う彼の横顔にドキリとしてしまったのは秘密だ。

「それじゃ、私はお先に失礼しようかな」

食べ終えてまとめた食器を抱えて、内心が零れ落ちないうちに、その場から立ち去った。

一方その頃、一夏の方は女性三人が血で血を洗うような洗わないような修羅場を展開していた。それを見かけた秋二は何も見なかったことにして、見つからないように細心の注意を払いつつ逃げ出した。

恋は決闘です。右を見たり、左を見たりしていたら敗北です。

『魅せられたる魂』

学園内の廊下を安全歩行していたら後ろから撥ねられたと織斑秋二は理解する。ぶつかったのは自分より一回りも二回りも小さい少女だった。腰の鈍痛に顔をしかめながら、倒れこんでいるリンを引き上げる。

「走る時はちゃんと前見ろって言ったろ」

起き上がらせてやったリンは顔を背けて何も言わない。しかし、目が赤く腫れているのはよく見えた。滅多な事で泣かないこいつが泣くとなると、一夏絡みか？

こうなると何を言っただって聞きやしない。だからといって、このまま放り投げるわけにもいかないし、今の状況を傍から見たら、俺が泣かせたように見えることだろう。

どうしようかとほんの数瞬悩んだが、すぐに止めた。女の事についてとやかく悩んでも何もわかりはしない。それよりも、信頼の置ける人に丸投げしてしまっただほうがいいかもしれない。そう思った俺は、リンの首根っこを引っ掴むと、引き摺るように歩き出した。

「ちよつと、秋二！？ 放しなさいよ！ 放せ！ 放せって言うてんでしょ！！」

「嫌だ」

「あたしの事なんて、放っておいてよ！」

「安心しろ。元からそのつもりだ」

「…へ？」

「着いたな」

リンが泣きわめいて五月蠅かったせいで、周りから白い目で見られたが、気にしないことにする。

リンを引き摺って来たのは俺の部屋。正確には俺と簪の部屋。そのドアの前に立って、ノックをして中に人がいることを確認すると、部屋の中にリンを放り込んだ。

「そういうことで、後は任せた」

そう言うだけ言って、返事も聞かずにドアを閉めた。まあ、簪なら問題ないだろう。

ドアの向こうから何か叫んでいる声が聞こえるが、それだけの元気があれば問題ないだろう。

帰りに缶ジュースでも買って行ってやるうかと思いつながら、口笛交じりに俺は部屋から離れていった。

どうしたらいいのだろうか？ 突然起きた、現在の状況に更識簪は呆然とした。目の前には秋二君が攫って来た名前も顔も知らない女の子。攫って来たというのは多少語弊があるけれど、今の状況を考えれば、その言い回しの方がしっくりくる。

でも、本当にどうしたらいいのだろうか？ 自分で言うものでもないが、私は社交性が低い。人見知りの私が初対面の人にどう話しかければいいかなんてわかるはずもない。

さらに付け加えて言えば、彼女は泣いている。

何故泣いているのか聞いたほうがいいのだろうか？

名前を先に聞くほうが無難かな？

それよりも何故秋二君は彼女をここに連れてきたのだろうかという疑問が浮かぶ。彼が『任せた』と言ったのだから、彼自身が何かするのためにここに連れてきたわけではないはずだ。となると私がどうにかしないといけない訳で……。

「……………」

「……………」
「……………」
「……………」

沈黙がこんなに辛いものだとは知らなかった。一人でいるときには感じられない息遣いや心音がやけに大きく感じる。

でも、挫けるわけにはいかない。秋二君が『任せた』と言ったんだ。頑張ってみよう。一步踏み出して、勇気を出して、手を伸ばすんだ。

「は、初めまして、私、更識簪って言います。あなたの名前は？」

「……鳳鈴音」

「ええっと、私でよかったですよ話を聞きますよ」

「……………」

初対面の人に相談しようなんて思わないよね、普通。でも、諦めないよ私。

相手が心を開いてくれないのなら、まずこちらから。

「リンちゃんは秋二君の知り合いなんですか？」

そう聞くと彼女は口を開かずに、ただ頷いた。

「そうなんですか。あの人は凄いですよね。努力を惜しまない人で、いつも自分に自信を持ってる。私とは大違い」

微動だにしない彼女は私の言葉に耳を傾けているのか、それとも無視しているのかはわからない。それでも話を続ける。

「私はいつも逃げてばかりいました。何かに言い訳して、悪いこととは他の誰かのせいにして、自分が傷つかないように生きてきました。それじゃいけない。もっと頑張らなきゃって思っても、辛いことから目を背けていたんです」

彼女の方は見ずに、天井を見上げながら話を続ける。聞いてなんかいないかもしれない。そう思っても不思議と舌が止まる事はなかった。

「そんな私に秋二君はこう言ってくれたんですよ。『逃げたっていいんじゃないかな。大人はよく立ち向かえて言うけど、逃げる

ことは悪いことじゃない。疲れたら立ち止まってみればいい。そうして見えるものもきつとあるはずだから。だから俺が大事だと思っるのは認めること。立ち向かった自分も、逃げてしまった自分も、成功した自分も、失敗した自分も、全部受け止めて忘れないこと。無駄なことなんて一つも無い。そう考えればどんな選択だって認められる』って。それを聞いて、私泣いちゃってね。あの時の秋二君の顔は面白かったな」

そう言い終えて、顔を恐る恐る下げてみる。そこにはさっきまでとは別人のような目をした彼女がいた。その目を見て、私のしたことは無駄ではなかったのだと胸が熱くなった。

「アンタは秋二と仲いいのね」

笑顔でそう聞くリンちゃんに、それよりもいい笑顔で「はい」と答えた。それに「そっか」と頷いた後、ゆっくりと話し始めた。

「あたし、約束したのよ。大事な、ホントに大事な約束。少なくともあたしにとっては大事な約束だった。でも、アイツにとってはどうでもいいようなことだったのかな？ 覚えてないならよかった。子供の頃の約束だから、覚えてないなら思い出させてやればいいだけだし。でも、アイツは覚えてたの。覚えてたくせに、何にもわかってなかった…」

ぼそぼそと言葉を繋ぐ彼女の目尻から雫が落ちる。それをごしごと袖で拭おうとしていたので、私はポケットからハンカチを取り出して、彼女に手渡した。彼女は「ありがとう」と鼻声で言うのとハンカチを顔に押し付けた。その間、私はリンちゃんの背中をさすっていた。

「だあーーーーー！！ もう止め！！」

そう叫び声を上げて鳳鈴音は飛び起きた。隣に居た更識は驚いたような顔でこちらを見ている。まあ、さっきまで泣いていた人間が

いきなり叫び出せば無理もない。

「ありがとね更識。お蔭ですつきりしたわ」

「簪でいいよ。更識だとお姉ちゃんと被っちゃうし。リンちゃん
のことはリンちゃんって呼んでいいかな？」

「うん、よろしくね簪」

そう言つとどちらからともなく右手を差し出した。

目の前の彼女は笑っている。私も目を真つ赤に腫らしてはいるだ
ろうが、心の底から笑っている。悩んでいたのが馬鹿らしくなっ
てきた。

「そうよ。一夏の馬鹿なんてぶつ飛ばしちゃえばいいのよ。叩き
のめして、地べたに這い蹲らせて」「ごめんなさい」って謝らせれば
いいのよ。どうしてこんな事を悩んでいたのよ」

あたしが大声で笑うのを、簪は呆然と見つめていた。

「ああ、でも、そうなるとやっぱり秋二に代表代わってもらわな
いと」

「呼んだか？」

「ひゃい!？」

「きゃ!？」

急に耳元で声があったのに驚いて変な声が出た。簪も同じだったら
しい。それが面白かったのか、秋二は腹を抱えて笑うのを必死に堪
えている。

飛び掛ろうとする前に秋二が一枚の紙を差し出した。その紙には
達筆で『辞める 織斑秋二』とだけ書いてあった。

「それを佐藤先生のところに持って行って、変更よろしくって言
えば代えてくれるらしい」

「準備がいいじゃん」

「どうやってリンに押し付けようかずっと考えていたからな。そ
ちが乗り気なら好都合だ。あ、それとこれはお土産」

土産と違って差し出したのは缶ジュースだった。その内のアップ
ルジュースを簪に、オレンジジュースを私に手渡すと、本人は残っ

た炭酸飲料を手にとった。

あたしは小気味いい音と共に缶を開けて中身を呷った。簪は大人しそうな見た目の通りにちびちびと少しずつ飲んでいるが、秋二はもう飲み干していた。三五缶とはいえ、一気に飲み干したこの男はケロリとしている。

秋二は飲み干した缶をゴミ箱に放り込んでから話し始めた。

「やつぱり女子のことは女子に任せるに限るね。簪もご苦労様。急なことで驚いたろ」

「驚いたよ、本当に。どうしたらいいか全然わからなかったし」

「それでも、リンがこうして笑っているのはお前のお蔭だぞ」

「そ、そうかな？」

何だかこの二人、見ているといるところろんなところがむずむずしてくる。そんな二人は置いてあたしは教務室へ向かうことにした。

「じゃあね、二人とも。また来るわ」

「またね、リンちゃん」

「またな、ドルバッキー」

「だから、ドルバッキーって言うなっつってんでしょ!!」

そんなあたしの顔は朝と同じ笑顔だった。

後日、『織斑一夏肅清委員会（仮）』がこの部屋で執り行われることとなった。委員長、鳳鈴音。副委員長、更識簪。書記、織斑秋二。議題は『如何にして織斑一夏を這い蹲らせるか』という何とも殺伐とした会議になったが、皆終始笑顔で、特に簪の満面の笑みは、委員長をして「あの子怖い」と言わせるほどだったという。

09・暴いておやりよドルバツキー

自分の限界を知る者こそ自由な者である。自分を自由だと妄想する者は、その妄想の奴隷である。

『リブツサ』

ついに一夏をこの手で叩きのめせるのだと実感すると、鳳鈴音は心が躍った。ピットの中で試合が始まるのを今か今かと待ちわびている。

ピットの中には、相変わらず皺の消えていないスーツを着た、担任の佐藤先生と、元クラス代表の秋二しかいない。簪は一応四組の代表であることから、この場にはいない。

「リン、楽しみなのはわかったから、少し落ち着け。とりあえず、昨日のおさらいしておくか？」

「そうね、ちょっと肩に力入りすぎてたかも。やるからには徹底的にね」

あたしがそう言うと彼は頷いてから、ゆったりと話し始めた。

「まずは、基本的な戦闘だが、衝撃砲は使わずに近接格闘のみだ。試しに一発撃ってやるのはいいが、ここは敢えて一夏の土俵で勝負する」

「それで最後は白式の零落白夜を真正面から叩き潰す」

『織斑一夏粛清委員会』で話し合った結果、機体の相性を駆使して”勝ち”にいくのではなく、小細工抜きで一夏を叩くことに決まった。

敢えて、刀一本しか持たない相手に衝撃砲を使わないのはそのためだ。そして、一夏の切り札とも言える単一仕様、零落白夜を使わせた上で、撃墜する。

この案は簪が考えたものである。『どうせなら、一瞬勝ちを見せ
てから、落とせばいいんじゃないかな?』と言って笑顔で微笑んで
いた。期待を持たせてそれを奪うというやり方に、あたしも秋二も
大いに賛成した。

「あんた等、ちょっと怖いって。特に秋二君は凄く鬼畜な顔して
る」

頭を掻きながら言う佐藤先生の言葉を聞いて、顔を上げてみると
先生の言う通りの顔をした秋二がいた。言われた本人は気にも留め
ていないのか、全く表情を変えない。

それを見た佐藤先生が深いため息を吐くと、ピットの中に、試合
の準備が整ったことを告げる連絡が入った。それを聞いたあたしは
意気揚々と相棒に乗り込む。

相棒の名は『甲龍』。中国の代表候補生になったあたしの専用機。
「頑張ってね、鈴ちゃん」

佐藤先生のエールを受け取る。

「一夏の方も何か隠し玉があるかもしれないんだ。気を付けるよ」
「当然! 油断も容赦も慈悲も同情も全部梱包して実家に送って
おいたわ!」

秋二の忠告は言われるまでもない。今回の試合はあたしが望んだ
もの。妥協も慢心もそこには存在しない。

地に這い蹲って謝らせてあげるわよ、一夏^{ほか}。

真っ直ぐ前を見据えて、あたしは空へ飛び出した。

ピットから飛び出て行ったリンを見つめながら、これから始まる
試合のことを想像して、織斑秋二は悦に浸っていた。佐藤先生がこ
ちらをチラチラと見ているようだが、気にしない。

アリーナで一夏とリンが向かい合う。俺はそれをピットに取り付けられたモニターで確認する。

『手加減なんてしないで本気で来いよ』

『…はっ』

一夏の台詞を鼻で笑うリン。凄くいい笑顔をしている。この間の泣き顔とは大違いだ。

それに対して一夏は無然としている。

『そうやって余裕でいられるのも今の内だぞ。その天狗の鼻へし折ってやるよ』

リンの態度を侮りと捉えている一夏に勝ちは無いかな。いや、価値がないのか？ まあそんなことはいい。

『結構な自信じゃない。相当、練習してきたの？』

『当たり前だ』

『土下座の』

『違いよ!!』

相変わらず漫才の上手い二人だ。俺もあんな相方が欲しいものだが、どっかにいないものかな？ 会長とかあの時の『妖怪袖ぶらぶら』（命名俺）とか有望そうなんだけど、どうだろう。

「ねー、秋二君？ もう少しで始まりそうだから戻ってきてくれる？」

そう言われてぼーっとしていた事に気が付く。モニターに目を向けると今にも始まりそうな様相を呈していた。

試合開始を告げると共に白式が吹き飛んだ。おそらく衝撃砲で吹き飛ばしたのだろう。

『何が起きたかわかんないって顔してるわね。これは衝撃砲って言うてね、頭悪いアンタにわかりやすく言うと、見えない弾丸ってところかな？ でも、安心しなさい。使うのはこれっきりだから』

『手加減のつもりか!？』

『手加減？ 何を勘違いしてるかわかんないけど、あたし言ったわよね。アンタを徹底的にぶっ潰すって、コテンパンに叩きのめし

て、地面に這い蹲らせてやるって。だから、態々アンタの土俵に立って、自信とか尊厳とか全部踏みじるって決めたの』

いい顔してるな本当に。隣の佐藤先生なんてかなり引いてるぞ。今これを見る生徒が何を考えてるかなんて、わからないが、大体が佐藤先生と同じ反応をしているんだろう。

これ以降リンが周りから白い目で見られるようになるのかと罪悪感が首をもたげたが、まあそんなことはいいか。

モニターの中ではリンが双天牙月とか言う大型の青龍刀二つで一夏を弄っていた。弄っているわけではないのだから、一夏が手も足も出ずに地面に叩きつけられているのを傍から見ていると、弄っているようにしか見えない。

『Stand up。まだまだ勝負はこれからよ』

一夏を追撃せずに悠然と待ち構える様子はまさに皇帝。このアリーナで、リンはまさしく王者だった。

『……そんな風に胸を張ったって、大きくなるわけじゃないぞ』
苦し紛れにリンが気にしている事を言っただけで挑発する。実力で劣る一夏がオルコットとともに試合が出来たのも相手が冷静さを欠いていたからである。

それを今回も実践しようというのだが、対策済みだ。

『ふーん、アンタがそんなこと言うんだ。お姉さんの身体にしか興味が無いくせに』

『なっ！？ そんな訳あるか！！』

『口を開けば『千冬姉』、二言目には『千冬姉』。一夏のピンク色の脳細胞の中は『千冬姉』のことで一杯だって秋二が言ってたわよ。違うの？』

『違うに決まってるだろ！！』

『そうなんだ。可哀想な千冬さん、大事な弟に嫌われてしまっ……』

そう言っただけで、ヨヨヨと泣き真似をする。自分達が仕込みを入れておいたとはいえ、なかなかの演技派だな。

『き、嫌いだななんて言つてねえだろ』

『じゃあ、秋二のいつてた通りなの？』

『いや、それは……』

『やっぱり嫌いなものね』

『うづうづ……お、俺は……千冬姉が大好きだー！ー！ー！ー！』

その言葉を聞いて俺はピットの中で大声を出して笑った。笑いきて、息が出来なくなるほど笑った。全校生徒の前で愛の告白は恥ずかしくすぎる。

俺が大声で笑っている中、観客席ではざわめきが収まらなかった。

目の前で悪人面した笑顔を振りまく自分の生徒を見ながら、佐藤詩織は天を仰いだ。

こんなのがウチのクラスの代表でいいんだろうか？ 実力は十分あるし、思慮分別もある。

だがしかし、今、目の前で高笑いをしている少年は人としてどうなのだろう。個人的には外見も性格も凄く好みなのだが、客観的に見るとあら不思議、悪者にしか見えない。

アリーナで戦っている彼女も、意地っ張りな可愛らしい少女だと思っていたが、公衆の面前で幼馴染を辱めて満足そうな顔をしている。

そういう間柄なのだろうという憶測を入れても、悪役だ。悪役にしか見えない。

モニターの中では二機のISが睨めっこをしていた。

『さつさと本気出しなさいよ。切り札があるんでしょ』

『うるせー！ 黙ってる！』

『出し惜しみして勝てると思ってるなら、構わないけど』

そう言った鈴ちゃんに対して、一夏君は雪片式型を下段に構える。

目の色も少し変わったように見える。

『謝るのはそっちの方だぞ、鈴』

『来なさい。受けて立ってあげる』

二人の間の空気が変わる。それを感じ取ったのか、生徒達のざわめきも収まっていく。

そして、数秒間の読み合いを経て白式が甲龍の懐に入り込んだ。

イクニッション・ブースト

瞬時加速という技術がある。ISの後部スラスタ翼からエネルギーを放出、その内部に一度取り込み、圧縮して放出する。その際に得られる慣性エネルギーを利用して爆発的に加速する。

それを用いて白式は甲龍の懐バイタルエリアに潜り込んだ。

これは一本取られたか？ そう思った次の瞬間に、その考えは浅はかだったと思ひ知らされる。

甲龍に乗った鳳鈴音が取った行動は回避でも防御でもなかった。

前進。高速で接近する白式に自ら近づき、零落白夜の間合いから逃げるのではなく、完全に接触するくらいの距離まで詰め寄る。そのまま零落白夜を持つ右手を掴み、逆に懐に入り込むと肘を強かに打ち込んだ。

打ち込まれた一夏君は堪らず、壁に打ち付けられた。

甲龍を駆る鳳鈴音は、変わらずに悠然と虚空に立つ。

頂心肘というのだろうか？ 漫画で読んだ程度の知識しかない私は曖昧に理解する。

王者は地面に落ちた小鳥を手招きする。それを見た勇者はもう一度剣を握り締める。

もう勝負は付いている。頼みの切り札ジョーカーも破られた挑戦者には何の手段も残ってはいない。それでも彼は剣を手に取り立ち上がる。

ちょうどその時にアリーナが轟音と砂煙に包まれた。

煙が晴れた時、そこには三機のISがいた。一つは白式。機体の損傷も激しく、恐らくシールドエネルギーも残り僅かだろう。もう一つは甲龍。ほぼ無傷で、シールドエネルギーも殆ど減ってはいな

いはずだ。最後の一つは見たこともないIS。昔アニメで見たロボットのような不均一な姿。人型の黒い肢体から伸びる二つの大きな腕がそれを更に増長させた。肌を全く晒さないような全身装甲で、頑強というよりも不気味さの方が目立った。

『佐藤先生、襲撃です！ ただちに生徒達に避難を！』

無線から聞こえてきた織斑先生の声にはつとずる。襲撃という非日常の言葉に焦りが生まれる。普段、生臭な分こんな時くらいはしつかりしないと。

まずは、目の前の彼を逃がさねばならない。世界で二人しかいないISを使える男性というんだから、今回の襲撃の目標が彼らであるかもしれないということは、想像に難くない。一夏君はアリーナの中だし、織斑先生がどうにかするだろう。

そう思っただけの姿を確認すると、優雅にお茶を飲んでいた。

「何してんの、アンタ？」

「先生もいります？」

「そんなの後でいいから、まずは逃げるよ」

「大丈夫ですよ。いや、寧ろここでないといけない」

逃げると言っても彼の態度は変わらない。私の顔から疑問が滲み出していたようで、彼は指を一本立てて、まるで講義を開くかのよう説明を始めた。

「まず、今回の襲撃の目的について考えて行きましょうか。織斑一夏の誘拐だとすれば、態々こんな人目につくところではずがない。混乱に乗じて私を攫いに来たのだとしても同じことです。どこの国、どこの企業であろうと世界を敵に回してまで、たったの一人や二人を捕まえようなんてしません。暗殺が目的だったとしても同じことです。更に言えば、そんなことをするより、刺客が生徒に成りすまして潜り込んだ方が手っ取り早いです。情報収集なんてのは論外です。態々貴重なISを一機失ってまで、戦闘して情報を集める意味はありません」

一度区切って、紅茶を一口啜ってから話を続ける。

「今回の襲撃は愉快犯による犯行です。今回の襲撃に関して得をする人はいませんから。そしてISを自らの欲望のために掃いて捨てられる人間は一人しかいません。ISのコアを自分の好きなときに、必要な分だけ使い捨てるなんてことが出来る人、篠ノ之束さんですよ」

「え？ でも彼女はISのコアはこれ以上作らないって…」

「誰かのために作ることはないでしょうね。でも今は違う。自分が知り合いにあげた玩具^{IS}がどんな風になっているかが、気になってしょうがないんでしょう。だから何も問題はありません」

そついい終えると彼は大きく伸びをした。

彼は飲み終えた空き缶を指先で回しながら、ピット内を見渡している。恐らくゴミ箱を探しているのだろうが、生憎ピットの中にゴミ箱はない。そもそもここは飲食禁止だ。注意してやるうかと思つたところに「そう言えば」と思い出したように秋二君が声を上げる。

「彼女が上げた玩具は全部で二つですから」

そつ咳くと彼は専用IS、呉葉を展開した。それとほぼ同時に巨大な砲台のような武器を展開し始める。

ピット内で何をと思う間もなく、ピットの中が揺れる。その直後に天井から、アリーナの中にいたISと同じ機体が現れた。

「こんにちは、死ね」

不吉な言葉を口にして秋二君は砲台のようなものを、正体不明ISに突きつけると、何の逡巡もなしに撃ち込んだ。号砲の音と共に敵ISが浮き上がる。彼はピット内にあつた近接用ブレードを引つ掴み、敵ISを持ち上げると、あつという間にピットの中から飛び出した。

私は慌てて外に出る。外に出た私は悪魔のような男がいるのを認識した。

呉葉に乗つた彼は、敵ISを掴んでアリーナのシールドに擦り付けていた。擦り付け、アサルトライフルやらガトリングガンやらを撃ち込みながら、高笑いする彼はまさしく悪魔のようだった。

擦り付け終わった敵ISの両腕を、近接用ブレードを使ってア
ーナの隔壁に釘付けにすると楽しそうに武装を展開した。

「AIMスフルオープンフルファイア
全武装展開、全弾発射」

武装を驚くほど速く展開したと思ったら、ものすごい火力が敵I
Sに降りかかった。

両腕にはアサルトライフル、その腰にはガトリングガンが唸りを
上げている。左肩にはミサイルポッドが乗っており、右肩には大砲
がくっ付いている。弾切れを起こすと両手に持っていたアサルトラ
イフルを戻し、代わりにハンドガンを展開した。しかし、それは使
わずに、砲撃を続ける。

一通り砲撃を終えるとそこにはISだったモノの残骸が残ってい
た。どう見ても壊しすぎだ。それを確認して、秋二君は武装を戻す。
しかし、ハンドガンは展開したままで、壊れたISに近づく。

彼はISの下までたどり着くと何の躊躇いもなく、その上に腰を
下ろした。あれだけ壊れていれば、まさかということにはならない
だろう。

そう思った矢先、彼の下のISが動きを見せる。それを秋二君に
知らせようと声を出す前に、彼のハンドガンが唸った。

「椅子が動くんじゃないよ」

そして、ISは完全に動かなくなった。

やっぱり悪魔だ、この子。それが鬼。絶対人類じゃない
って。

そう思った私の顔は人生で一番赤くなっていた。

佐藤詩織がほつたらかしてしまった生徒の誘導は、

山田麻耶が何とかした。また、織斑一夏も鳳鈴音も無事だった。よ
って今回の非常事態は、数人の生徒が軽傷を負ったというくらい
の小さな被害しかなかったが、佐藤先生は後日、織斑千冬にこつてり

怒られた。

10・ドラマチック生命体

喜劇で一番難しい役は愚か者の役であり、それを演ずる役者は愚か者ではない。

『ドン・キホーテ』

久方ぶりの帰宅だと織斑一夏は自覚する。IS学園から開放されて、羽を伸ばしている。

この間の試合のせいで、クラスメイトに白い目で見られたり、可哀想なものを見る目で見られたりして心が穏やかでなかったので、今日だけはISのことを忘れて、ゆっくりしよう。

あの試合のことで千冬姉から何も言われなかったのが、せめてもの救いだった。

それに何だかいつもより、千冬姉の態度が柔らかかったような気がした。

「久しぶりだなー。家に帰ってくるの」

「そうだな。とりあえずMP3プレーヤーだけは回収しないと」

「漫画とかゲームは？」

「いらないし、できない」

「そうだよなー」

これまでずっとIS学園で生活してきたが、千冬姉が必要最低限過ぎる荷物しか持ってきていかなかったため、今こうして回収に来ているのだが、正直言って嗜好品の類を持ち込んでも、それに割く時間がない。

家になると少し埃っぽい匂いがした。一月以上空けていたんだから、それも当然だろう。

秋二はさっさと自分の部屋に行ってしまった。俺も自分の荷物を

まとめることにしよう。

三十分足らずで俺達の回収作業は完了した。それだけ荷物が少ないということにため息が出る。

俺と違って秋二は終始笑顔だった。

「機嫌がいいみたいだな」

「そりゃ、そうだ。最近は音楽聴けてなかったからね」

秋二は音楽好きだ。洋楽邦楽問わず、クラシックからメタルまでいろんなジャンルの音楽を聴いている。

誰も知らないような曲を聴いてると思ったら、誰でも知っているような曲を知らなかったりという事が秋二にはよくある。

俺は子供みたくにはしゃぎながらイヤフォンをつける秋二を連れて家を出た。これから向かうのは中学時代の友達のところだ。隣を歩く秋二は俺の声が聞こえるように片方のイヤフォンを外している。

「弾の奴、元気にしてるかな。そーいや、秋二ってIS学園に行く時、説明してないんじゃないか？」

「ああ、いきなり連れてかれたからな。説明も何もしていない。

一夏の事が報道されたあたりで、なんとなく予想は付いたけど」

「そーなのか？」

「そうだよ」

秋二と話しながら、目的の場所に着いた。五反田食堂という看板の掲げられた暖簾を見ながら、その建物を回りこんで中に入る。

中に入ると俺の友達、五反田弾が待っていた。

「ひっさしぶりだな、一夏に秋二。まあ、とりあえず上がってけよ」

そう言う弾に付いて歩いていく。こうして三人でいるのも久しぶりだ。弾に案内されるまでもなく、慣れ親しんだ親友の部屋に上がりこむ。

この激動の数ヶ月を振り返ってみると随分大変だったものだ。

藍越学園の入試の会場を間違えたことから始まって、第との再会。

セシリアとの決闘。鈴とも再会して戦った。

そう思い返してみても、まだ秋二とは一度も戦ってないなと思いつつ。セシリアにも勝つてたし、やっぱり俺より強いんだろうな。

「秋二はやっぱすげえよな」

「何だ藪から棒に。気持ち悪いぞ」

「気持ち悪いとは何だよ。褒めてるんだぞ」

「お前に褒められても嬉しくねえよ」

「相変わらずだなお前ら。IS学園でもそんな感じだったのか？
いつもの様に素っ気無い態度で返す秋二にそれを傍から見ている弾。それはまさしく数ヶ月前の日常と同じだった。

「ああ、相変わらず一夏は節操なしだよ」

「節操なしって何だよ!？」

「違うのか？」

「あー、そうだよな。一夏は姉さん一筋だもんな。聞いてくれるか弾。こいつ、全校生徒の前で『俺は千冬姉が大好きだ!』って叫んだんだぜ。最高だよな全く」

「マジかよ!？ 元々そういう噂はあったけどよ」

「それは誤解だつて言ってるだろ!！」

あの噂のせいで最近では減ってきた周囲の目がまた増えたんだぞ。

「お兄!！ さつきからつつさいよ」

流石に騒ぎすぎたのか注意された。ドアを開けてところに立っていたのは弾の妹の五反田蘭。兄とは違い優等生の彼女は弾に対してきつく当たる事がよくあるが、きつと愛情の裏返しなんだらうと理解する。

「お邪魔してるよ」と言う秋二に続いて、俺も「久しぶり、邪魔してる」と声をかける。

「い、一夏さん!？ それに秋二さんも!？ ちょっとお兄、一

夏さんが来るんだつたら前もつて言っておいてつて言つたじゃん」

「……………言つたぞ俺は」

「なら、ちゃんとこつち見なさいつて」

詰め寄る蘭にたじろいで目を逸らす弾。俺らにも妹がいたらこんな感じだったんだろっか？

「蘭、それくらいにしておいてやってくれ。それよりもそろそろ昼時だ。一緒に食わないか？ 今なら一夏もおまけ付だ」

「ハッピーセットみたいに言っちなよ」

「ふん、秋二さんに感謝することですね。じゃあ、私は先に行ってます」

そう言う蘭は部屋から出て、階段を駆け下りて行った。転んだりしなきゃいいけど。

「俺らも行こうぜ」

そう言う秋二に続いて弾の部屋を後にした。

五反田食堂の方で昼飯を取ることにした俺達は四人でテーブルを囲んでいた。俺と蘭が並んで、その向かいに弾と秋二が座っている。「焼肉定食一つとラーメン一つ、それから揚げと餃子も一つずつ」

目の前では俺達用に用意してもらった昼飯に追加で注文している秋二の姿があった。

俺も弾も、もちろん蘭も用意されたものだけで十分だ。昔から大食いではあったが、ここ最近それが目に見えて加速しているような気がする。この間学食であったときも、カツ丼と天井と牛丼を並べていた記憶がある。

「何ともまあ、相変わらずだな」

「ここの味が恋しくなってるね」

「残さず食うってんなら構わねえが」

苦言を漏らしながら、この食堂の店主、五反田巖さんが注文の品を作り始める。

もうすでに秋二の手元にある食器は空になるうとしていた。

「で、どうなのよ？ IS学園ってのはさ。」

「どうなのって言われてもな。どうなんだ、秋二？」

俺がそう聞くと秋二はわざとらしく咳払いをすると説明し始めた。

「織斑一夏君はクラスの皆さんと分け隔てなく交流していて、非常に社交的です。七年振りにあった幼馴染とも良好な関係を築いており、他にも仲のよい女性はあるようです。少々折り合いをつけるのが苦手な面があり、意見の相違から不和が生じてしまうこともあります。持ち前の行動力で解決してしまいます。しかし、最近は少し環境に慣れてしまったのか、だらけているような点が見受けられます。って感じかな。以上織斑秋二講師による『よくわかる織斑一夏』のコーナーでした。というわけで、いただきます」

「どういうわけだお前……!!」

「間違っちゃいないだろう？ それと食事中に騒ぐな」

そう言いながらラーメンを啜り始める。正論なだけに反論できないし、秋二の言ってることが間違いというわけじゃないから余計に性質が悪い。更に、厨房では巖さんがお玉を振りかぶっていた。

「あの…、秋二さん？ 一夏さんって学園ではどんな感じなんですか？」

「まあ、蘭が知ってる通りだと思うよ。IS学園に行ったからって何かが変わる訳じゃないよ」

「そうですね…」

そう頷いてから、蘭は暫く俯いていたと思ったら、おずおずと顔を上げて、秋二に声をかけた。

「あの…、相談したいことがあるんですけど…、いいですか？」

蘭が相談するのは決まって秋二だ。それだけ懐かれているのか、弾は『俺よりも蘭の兄貴をやってるよ』とも言っていた。俺は未だに敬遠されがちだというのに。

「いいよ。俺が応えられる範囲でよければ、ならね」

それに「ありがとうございます」と頭を下げたから、蘭は切り出した。

「私、IS学園に入学しようと思うんです」

「なんだって!？」

「お兄は黙ってて」

秋二は考え込むように顎に手を添えながら、話し始めた。

「…正直に言っつて、お勧めはしない」

「私じゃ無理…ということですか？」

「無理と言っつんじゃない。寧ろ、蘭ならそこその操縦者になれると思うよ。自信を持ってここで相談してきたつてことは、適正試験の結果もよかつたんだらう？」

「はい、A判定を貰いました。でも、どうして？ どうして秋二さんはお勧めしないつて言っつんですか？」

「ふむ、理由はいろいろあるが、それは置いておこつ。質問に質問で返すものじゃないんだが、蘭はISがどんなものだと思っつてる？」

そう聞かれた蘭は顔を下げつて、数秒考え込むよつな仕草を見せた後、顔を上げて答える。

「ISは今この世界のあらゆる面で最も力のあるモノだと思っつす」

「そう思えるなら、一夏よりマシだね。ああ、文句は後で聞っつから今は黙っつてろ」

そう言われつてしまえば、口を噤むしかない。

「その通りISというものがこの世界に与える影響は大きい。ISの操縦者になるなら、ゆくゆくは国家代表かその候補生、軍属になるということも不思議じゃない」

「私が危険な目に遭つつことを心配してくれてるんですか？ 私は大丈夫です」

「危険…か。そうじゃない、そうじゃないんだよ蘭。人は痛みには耐えられる。それは自分だけのものでも自分だけは理解できるからでもISはそうじゃない。ISは操縦者の安全は保障する。だが、ISに対するものは違つ。ISの前では戦闘機も戦車も紙切れ同然だ。ISの前では命が軽くなる。俺はね蘭、君に人殺しになつてもらいたくはないんだよ」

その言葉を聞いて誰も声を出すことが出来なかった。蘭も、その兄の弾も、もちろん俺も。

不意に蘭の唇が震えたのが見えた。

「……………か？」

「……………」

「……………だめですか？」

「……………」

「一夏さんと、秋二さんと、一緒にいたいと、思うのは駄目、ですか？」

途切れ途切れに言う蘭の目には涙が滲んでいた。それに秋二は応えない。

「蓮さん、勘定お願いします」

苦笑いを浮かべながら秋二はお盆に食器を重ねて流しに持って行く。そのままレジで支払いをする合間に、弾と蘭の母親である蓮さんに何かを渡していた。

「悪かったな弾、今日は先に帰らせてもらうよ」

そう言っただけで秋二は俺を置いて帰っていった。残された俺達は蘭の分の食器も流しに出して、その後は弾の部屋でゲームやら漫画やらで時間を潰していた。

10・ドラマチック生命体（後書き）

ようやく十話目ですね。

ここまで読んでいただいた方には真に感謝いたします。

これからも誠心誠意まごころこめて執筆していききたいと思います。

11・ネイティブダンサー

人間はみな、発見の航海の途上にある探検者である。

『講演雑録』

週が明けた月曜日、放課後になるとすぐに織斑一夏が駆け寄ってきたとセシリア・オルコットは顔を赤らめた。

「なあセシリア、今日も訓練するんだよね？」

「い、一夏さん！？ え、ええ、そうですね。折角ですから、一緒に行きましょうか？」

「ああ、いいよ。それより今日は秋二の奴を誘ってみないか？」

「秋二さん、ですか？」

「今まで一度も一緒に訓練とかしたことなかっただろ。だから、誘ってみるのもいいんじゃないかなって思ったんだけど」

一夏さんの言葉を頭の中で反芻する。確かに彼とは一度もISの訓練をしていない。勤勉な彼のことだから、訓練を怠っているという事はないはずだ。クラスが違うことを気にしているのかもしれないが、鈴さんも一緒にやっているのだから気にする必要はないと思う。それに私も彼の事は気になっていた。

彼の動きを見たのはたったの三回。一度は訓練機による飛行訓練。二度目は私自身が対戦をした時。三度目は正体不明のISの襲撃を受けた時。物音に気付いて飛び出した私がつどり着いた時、秋二さんは正体不明のISを串刺しにしていたところだった。それから呆けたように彼を眺めていて、織斑先生に呼ばれるまで遠目から彼を見ていた。

その動きはすでに候補生となんら遜色ない動きで、機体の性能がスペック高いというだけでなく、本人の技術の高さが伺えた。

「そうですね、いいと思いますわ」

「そうか、じゃあ、セシリアが連れてきてくれないか」

「私が…、ですか？」

「俺も何度か誘ってみたんだけど、毎度毎度断られてばかりでさ。秋二の事だから、女の子の誘いなら断るわけはないと思うんだ」

「……………わかりました。上手くいくかどうかはわかりませんが、やって見せますわ」

「頼むよ」と言いながら手を振る一夏さんを見送って、私は隣のクラスへと乗り込んだ。

秋二からこの休みの内に弾の家に行っていた事についての話を聞いているときに、「失礼します」と言ってセシリアが二組に入ってきた事に鳳鈴音は素直に驚いた。

「どうしたのよセシリア、何かあったの？」

「いえ、今日の訓練に秋二さんも一緒にどうかと思いましたが」

秋二は顔を俯かせながら、数秒考え込むような仕草をした。

「悪いけど、今日は遠慮して…………、わかった。私が悪かったから泣くな」

断ろうとした秋二は涙目になったセシリアを見て、渋々承諾した。秋二の弱点は女の涙である。あたしの涙はもう見飽きたのか、ちよつとやさつとでは動じなくなったが、他の人の涙には滅法弱い。

それに気付いたのは、ちょうど三年前くらい。

それ以前はそうでもなかったようだけど、年をとってちよつと変わったのかもしれない。

「それでは行きましょうか」

「そうね。ほら、秋二も行くわよ」

「……………了解」

あたし達はセシリアに付いてアリーナへと向かった。

アリーナに着くとそこではすでに一夏と箒が模擬戦もどきをして
いた。打鉄の近接用ブレードと白式の雪片式型がぶつかって火花を
散らす。機体の性能は白式の方が上だが、近接戦闘ショートレンジにおいては箒が
上回っている。近接武器しか持っていない白式にとつてそれは致命
的で、今も追い詰められている。対する箒も近接格闘以外はまるで
駄目で、白式に射撃武器があれば、勝負は分からないだろう。

しかし、勝負にたればはない。いつものように白式が切り伏せ
られて、箒の勝ちだった。

負けて悔しがる一夏に箒が何か言っ手て手を差し伸べる。あたしは
そのいつものやり取りを見ずに、隣の秋二を盗み見た。秋二は欠伸
を噛み殺して二人を眺めているように見えた。

「おつ秋二、来てくれたんだな」

「まあ、仕方なくな」

ISを待機状態にして一夏が駆け寄ってくるのに秋二は素っ気無
く返事をする。

「それで、訓練って何するんだ？ さっきみたいな模擬戦なら勘
弁だぞ」

「そうは言っても戦闘を重ねる事は重要ですよ」

「じゃあ、今日も模擬戦をする事になるのか？」

「ああ、そのつもりだぞ。さっき一夏ともやったしな」

箒とセシリアの言葉を聞くと秋二は口元に手を当てながら考え込
む。

普段から秋二は模擬戦を好まない。何度か誘っても渋った理由は
それなのだろう。あたしがやろうと言っても「ヤダ」と子供っぽく
駄々をこねるだけで、結局一度もしたことがなかった。

何故模擬戦をやりたいがらないのかと聞いたことはある。しかし、
その度にはぐらかされるだけだった。

だから今回のセシリアの誘いは都合がよかった。このまま勢いに
任せて秋二と模擬戦が出来るかもしれない。秋二の噂はよく耳にし

ていたので、実力はいか程なのかと気になっていた。

「……………鬼ごっこをしようか」

俯いていた秋二がいきなりそんな事を言ったので、あたし達は誰も返事が出来なかった。

「ISの機動訓練にはもってこいの遊びなんだが、駄目かね？」

「そうなのか？」

そう疑問を口にする一夏に秋二は説明を始める。

「ああ、捕まえる方も逃げる方もいい練習になると思う。遊びだつて本気でやれば訓練になる。ルールは簡単で鬼が他の四人を捕まえたなら勝ち。そして、鬼に捕まったらそいつも鬼になる。他の四人は逃げ延びれば勝ち。な、単純だろ？」

「面白いですね。確かにISの機動訓練としては非常に優秀かもしれません」

秋二の話に頷いたのはセシリアだった。あたしもその通りだと思ふが、このままでは模擬戦が出来なくなってしまふと思うと、素直に頷けなかった。

「言い忘れていたが、武装の展開は禁止な。それ以外は何でもありだ」

「何でもと言うと何だ？」

「この間のリンみたいに切羽詰つたら逆にぶっ飛ばして構わないつて事だ」

その言葉に「なるほど」と頷く筈。この間と言うのはクラス対抗戦の時だろう。あの時は見事に決まつて私でも満足いった。まあ、見かけ倒しだけだ。

「あの時の技ですか。確かにあれは賞賛に値するものでしたわ」

「まあ、見た目だけだったけどな」

「そうなんですの？」

「まあね。格闘において一番大事な踏み込みがISだと出来ないから、どうやっても見かけ倒しになっちゃうのよね」

「この間の試合の事はもういいだろ！ さっさと始めようぜ」

そう叫ぶ一夏を皮切りにあたしたち五人の鬼ごっこが始まった。

初めの鬼は一夏だった。それを見ながら訓練機の打鉄に乗った篠ノ之箒は気合を入れなおす。

先の模擬戦では私が勝利を納めたが、次もそう上手くいくとは限らない。

私の実力はこの中で一番低いだろう。そうならば一番に一夏が狙ってくるのは私だ。

そうなった時、性能で劣る訓練機の打鉄では白式を振り切れないだろう。

私にも専用機があれば、そう思った事は一度や二度ではない。しかし、代表候補生でも企業のテストパイロットでもない私が手にするのは紛れも無く夢想だった。

私の思考は一夏の「始めるぞー」と言う気の抜けた声で妨げられる。今は目の前のことに集中しなければならない。

予想通りに一夏が最初に狙いを定めたのは私だった。それから逃げるように打鉄を動かすが、見る見るうちに距離が縮まっていく。

逃げる者と追う者では追う者の方が有利である。逃げる者はどうしたって相手から目を切らねばならぬのに対し、追う者は相手を常に視界に入れながら動く事が出来る。

元々の性能差。立場の不利。己の実力不足。それらの要素から私が追いつかれるのは必然だと理解した。

しかし、それは第三者の介入によって覆される。

「頭がお留守だぞ」

「はっ!? うああああああ」

もう駄目だと後ろを振り向いた瞬間の出来事だった。白式の後方から赤いISが接近してきたと思ったら、そのISはある事か白式に踵落しを食らわせていた。それを喰らった方は重力に逆らわず

に地面に墜落した。

さつきまで白式がいた場所に、それと似た形の赤いISが立っていた。秋二の専用機である呉葉。見たのはこれで二度目であるが、それに乗り込む秋二の姿は様になっていた。

「諦めるには少し早すぎやしないか？」

「そうだったな。礼を言うぞ秋二」

「どうって事ねえよ」

昔とは違う秋二。それにも少しずつ慣れてきた。寧ろ、どんなに変わっても秋二は秋二なのだから、態度を変えようとする必要はない。そう思えるようになったのは、ここ最近になってからだ。

「なにすんだよ！！おい、聞いているのか秋二！！」

「何でもありだと言ったはずだぞ。あの時例えに出したのがリンの試合だったってだけでな」

一夏が怒るのを涼しい顔で受け流す秋二。こちらへんは七年前とあまり変わってない。少し顔がにやけてしまう。

「ほら一夏、何時までそんな所で這い蹲いそげっているんだ？ まだ始まったばかりだぞ。hurry!いそげ hurry!いそげ hurry!いそげ!」

凄くいい笑顔で一夏を見下ろす秋二は手拍子をして待ち構える。それから、秋二に飛び掛っていった一夏はまた同じように地面に叩きつけられ、その後も標的を変えながら追いかけたが、結局一度も捕まえられなかった。

鈴には八極拳で吹き飛ばされ、セシリアには追いつく事も出来なかった。私も何度か狙われたが、逃げないで叩きのめすようにしたら捕まる事はなかった。

訓練を終えて、食堂で夕食を共にする事になった五人は、食事を取りながら『織斑一夏のIS機動における反省会』をする事になった。『クラス代表になったのにこの体たらくは何だ』という議題は、結局明確な答えが出ず、後日再開ということになったが、織斑一夏たつての希望で、取り止めになった。その代わり、篠ノ之

箒、セシリア・オルコット、鳳鈴音の三名による特訓が開かれる事になった。織斑秋二は「面倒だからパス」と言って断った。

自然は決して我々を欺かない。我々自身を欺くのは常に我々である。

『エミール』

それは朝のHRの最中の出来事であったと織斑秋二は記憶する。もうこの学園では恒例となりつつある、隣のクラスの叫び声を聞きながらため息を吐いた。

確認してみると他のクラスメイトも俺と同じような顔をしていた。今度はなんだろう？ また転校生がやってきたのか？

この時期に無理やり捻じ込んでくるのなら、国家に帰属する専用機持ちか、企業のテストパイロットの専用機持ちか。どちらにしろそれなりの実力者である事は想像できる。

未だに収まらない一組の騒ぎを無視して、佐藤先生が話を進めていく。話といつてもちよつとした確認事項や連絡事項だけで特に取り上げるようなものじゃない。

「ねー詩織ちゃん、一組で何が起こってるのか分かる？」

このずぼらな担任はいつの間にか、クラスの殆どから先生と呼ばれる事はなくなった。先生と呼ぶのは俺と他数名といったところか。ウチの担任はダルそうに頭を搔きながら「転校生が来てんだって。しかも二人」と答えた。

二人か、作為的なものを感じずにはいられないな。それとは別に、さつきから何か懐かしい匂いがする。昔嗅いだことのある、慣れ親しんだ匂い。

俺と同じ匂い。

気のせいだと自分に言い聞かせて前髪を掻き揚げた。目の前では相変わらずダルそうな顔をした佐藤先生がいる。

関係ない事だ。誰が転校して来ようと、そいつがどんな人間であろうと、関係ない。俺は俺だ。

思考していた頭に不思議と雑音は入り込んでこなかった。しかし、隣のクラスから聞こえた、人の頬を叩くような乾いた音はしっかりと耳に残っていた。

昼休みに食堂に行こうとしたところでリンに止められた。

「一夏のところ行くわよ」

「勝手に行ってる。俺は行かん」

「転校生について気にならないの？」

転校生という言葉に胸の奥で何かがざわめいた。それが顔に出てしまったのか、リンに追及されてしまった。

「やっぱり気になるって顔してるわね。ほら、行くよ」

言っても聞きはしないのだろうと思ったので、ため息を一つ吐いてからリンに付いて行った。

その途中、一人の少女とすれ違った。小柄で細身な少女。長い銀髪をから覗く眼の片方には眼帯がしてあった。真っ直ぐに伸びた背筋は無機物を思わせるようだった。

一目見て、すれ違った瞬間に今朝感じたモノがこの少女のせいであつたと確信した。

「貴様は、織斑秋二か？」

「……………その通りだ」

「そうか。だが、覚えておけ。あの男を仕留めるのはこの私だということな」

あの男というのは一夏の事だろう。あいつは俺を知っているのか？俺はあの少女を知らない。確かに見覚えはないが、彼女が纏っているこの匂いは忘れようがなかった。

それだけ言って少女は去っていった。俺の動悸は止まりそうになかった。

織斑一夏に連れられて行った屋上で、彼の友人達に囲まれながら自分がここにいていいのかとシャルル・デュノアは心配になった。

一夏は「気にするな」と言ってくれたけれど、今のこの状況を気にするなと言う方が無理がある。今日一日だけでわかった事であるが、環境のせいも相まって織斑一夏は多くの人から好意を抱かれているらしい。

今日の前でも熾烈な争いが繰り広げられていた。

イギリスの代表候補生であるセシリア・オルコット、ファースト幼馴染（この呼び方は正直使いたくない）の篠ノ之箒、セカンド幼馴染（同じく使いたくない）の鳳鈴音の三人が弁当を持ち寄って一夏に押し付けている。このあからさまな好意に一夏は気付かないというのだから驚きだ。

ふと気になって、この場にいながら皆の輪から一人外れて空を眺めている人に目を向けた。

この人も一夏の知り合いらしいが、ここに来て何も言わずに柵にもたれ掛かってずっとそのままだ。

長い綺麗な黒髪が風に舞う姿は美しかった。ここから憂いの混じった横顔がほんの少し見える。綺麗な人だと素直に思った。

彼女は何者なのだろうか？ そう思い立つと私は彼女の横に立っていた。

「何を見ているんですか？」

彼女のように空を見上げる。隣に立ってみると彼女は以外にも背が高く、そして凜々しかった。私はなるべく顔を見ないようにして声をかけた。隣に立ったからといって同じものが見えるわけではないが、そうしたい気分だった。

「何かを見ているんじゃないかって、自分がどこにいるのか考えていたんだ」

「貴女は今ここにいないじゃないですか」

「たまに自分が自分でなくなるような、そういう風に思ってしまう事があるんですよ」

そう口にする彼女の方を見てしまったのは無意識からだ。泣いているような、笑っているような、怒っているような、なんとも読み辛い顔。

彼女の言っている事は良く分からない。自分が自分でなくなるといふのは、自分に仮面をつけて、自分を隠すと言う事とは違っただろう。仮面をつけている自分と仮面を外した自分のどちらが、本当の自分なのかがわからなくなっているということだろうか？ それは何か違うような気がした。

私は黙って彼女の次の言葉を待った。

「……………」

「……………」

「……………」

「……………」

「あなたは自分が何者かわかりますか？ 名前でも、使命でも、役割でも、理由でも何でもいい」

「……………僕はデュノア、シャルル・デュノア。フランスの代表候補生だ」

彼女の言葉が良く分からなかった私は自分に与えられた役割を口にした。それを聞いた彼女は「そう」と言って満足そうに頷いた。たったそれだけの行為に、私はひどく動揺した。私はその動揺を隠すように彼女に聞き返していた。

「貴女は何者なんですか？」

聞いた後になってしまったと思うがもう遅い。怖くなって彼女の顔から目を背けた。

「私は……………、影。ドッペルゲンガー……………。私は私であって、私

は私でないモノ」

そう言って彼女は微笑んだ。見ないようにと目を背けていたのにもかかわらず、自然と顔が彼女の方を向いていた。

「よろしく、デュノアさん。お蔭で少し吹っ切れたよ」

彼女の笑顔は今の私には眩し過ぎた。そのせいで、差し出された右手を握り返す時に、彼女の眼を見る事が出来なかった。

「何してるんだ二人とも」

そう一夏に声を掛けられるまで、二人で並んで空を眺めていた。別に何かを見ていたわけじゃなくて、何も見ていなかっただけ。こんな風に落ち着いた時間を過ごすのは、母と一緒にいたとき以来かもしれない。

「一夏、邪魔」

「それはないだろ!？」

「うっさい、黙れ」

「何してたんだよ二人で」

「何もしてなかった」

「だったら別に……」

「うっさい、黙れ」

「……………」

二人はどういう関係なんだろう？ 一夏は親しげに話しているけど、一方の彼女は不機嫌そうに受け答えしている。

その疑問も次の一夏の発言で氷解した。

「ああ、シャルルにも紹介しておかないとな。こいつは双子の弟の織斑秋二だ」

フタゴノオトウトノオリムラシユウジ？ 双子の弟？ 織斑秋二？
ということはつまり、さっきまで私が綺麗な女の人だと思っていたこの人は、男!？

「え!？ いや!？ あの!？」

頭の中が真っ白になって、言葉が上手く出てこない。そもそも、

声ってどうやって出すものだったっけ？

「落ち着いて、ほら深呼吸」

目の前の彼女のような彼は優しく微笑んでいる。彼の言う通りに深呼吸をしたら何とか落ち着いた。

「改めてよろしくね。シャルロット・デュノアさん」

落ち着いたのも束の間、私の頭は完全に停止した。

「おい秋二、シャルルだぞ。人の名前間違えんなって」

「すまないね、デュノアさん。随分と可愛い顔をしているものだからついね。でも、これでお相手ってことで」

本名を言われた事と、私の勘違いが見破られていた事で、私の頭は沸騰しそうなくらいに熱くなった。

この学園生活に漸くオアシスが誕生したと織斑一夏は歓喜した。

男子禁制の女の園に単身放り込まれ、心の落ち着くはずの自室でさえ、女子の侵略を免れなかった。相部屋が筈であった事は唯一の救いではあったが、それでもいろんな意味で落ち着かなかった。

しかし、今は違う！！ 男がいる。俺の目の前に男がいる。秋二みたいに俺の心をわかった上で踏みじめるような悪魔ではなく、俺と一緒に笑い、一緒に泣き、そして一緒に風呂にも入れる男どもがいる。これほど嬉しい事はない。

「シャルル、お前は俺の救世主だ」

「いきなり何を言ってるの？」

「今まで、男一人で大変だったんだよ。今日一日だけでシャルルもわかったら」

「まあ…、うん。でも………、秋二がいたんじゃないの？」

「秋二はその…、駄目だ。俺を助ける事より、貶める事に力を入れるような奴だあいつは。そのせいで俺が何度苦汁を舐めてきたことか」

秋二によつて俺はシスコンだの、ホモだの、バイだの、不能だの、あることない事言いふらされて、何度俺が迷惑をこうむつた事か。

まあ、凄い奴なんだけどさ。

「でも、秋二つてどうしてるの？」

シャルルのその言葉で疑問が浮かんだ。シャルルの言つたとおり、秋二はどうしているのだろうか？俺はシャルルと相部屋になると言ふ事で、筈といた部屋から退散した。

この部屋に秋二が来るような事は聞いてないし、もう一つベットが入るようなスペースはない。

「前と一緒になら更識さんと一緒の部屋なんだろうな」

「あれ？一夏と同じ部屋じゃなかったの？」

「ああ、どういうわけか同じ部屋じゃなかったんだよな」

シャルルに視線を向けるとシャルルは俯いてなにやらぶつぶつと独り言を言っている。何だか難しい事を考えているようなので、そつとしておこう。

それにしても今朝のラウラとか言ふ女は一体なんだったんだろう。出会い頭にいきなり引つ叩いてくる奴があるか。

それに因縁つけてきやがって、俺とお前は初対面だろうが。なんなんだ一体。千冬姉は何か知っているようだったから、今度聞いてみるか？

いや、駄目だ。千冬姉を今度は俺が守るつて誓つたんだ。千冬姉を巻き込むわけにはいかない。

なににせよ強くならないと。皆を守るためにはもつと強く、筈よりも、鈴よりも、セシリアよりも、実力のわからないシャルルやラウラよりもだ。そして、秋二よりも。

明日も早いんだから、今日はもう寝よう。シャルルにもそう言つて、部屋の電灯を消した。

シャルル・デュノアの登場により、部屋割りの変更になるだろうと予想した更識簪は、ルームメイトに日頃の感謝を込めて

送別会（部屋）を開いたが、結果として織斑秋二の異動はなかった。そのことに簪は照れていたが、嬉しさが顔の端々から滲み出ていた。

”できない”というのは許される。だが、”しようしない”のは断じて許されぬ。

『ブランド』

今日の授業は一組と合同でやるらしいと織斑秋二は記憶する。そして、今は学校の端の男子用の更衣室にいる。教室から離れていて不便ではあるが、喧騒から逃れられるのはよかった。

ISスーツに着替えている途中に、二つの人影が更衣室に入ってきた。

一人は不肖の兄、織斑一夏。もう一人は話題沸騰中の三人目の男性IS操縦者だと言う転校生、シャルル・デュノア。息を切らせながら呼吸を整える二人が俺に気付く。

「秋二も来てたのか」

「合同授業なんだから当然だろう」

そう言って、入ってきた二人とすれ違うように更衣室を出ようとする。一夏に止められた。

「待って」

「めんどい」

「いや、ほら、シャルルもいるしさ」

「男の着替えには興味がないし、女の着替えを覗くほど落ちぶれちゃいない」

振り返ってシャルル・デュノアを確認する。

細い肩。くびれた腰。丸みを帯びた下腹部に、全体的に薄い肉付き。顔付きもどちらかと言えば女性のように見える。

はつきり言ってしまうえば、シャルル・デュノアは男ではないだろ

う。その理由を考えても、考えられる事が多すぎて、憶測の域を出ない。

一夏は男として接しているようだが、俺は遠慮しておこう。

「遅れないように気をつけろよ」

一応、注意だけはして今度こそ更衣室を後にした。去り際に一夏がまた騒いでいたが、まあそんな事はいい。

「あ、待つて秋二」

一夏達を置いて先にグラウンドに向かっていると、デュノアが駆けてきた。

「どうしたんだ、デュノア？」

「秋二と話したいことがあって。それと、デュノアって呼ばないでもらえると嬉しいな」

「わかったよシャルロット。私の事は好きに呼んでもらっていい」

「ぼ、僕の名前はシャルルだってば」

顔を赤くして俯く彼女はどこからどう見ても、恥ずかしがる乙女のようなだった。

悪いがシャルルと呼んでやるつもりは一生ない。

それより、話したいことがあると言っていたが、何の事だろうか？

「悪い悪い。それで話したいことって？」

そう聞きながら歩調を少し遅くする。時間はまだ余裕があるから何も問題はない。

「あのね、昨日の事なんだけど……………」

聞き辛いことなのか段々と尻すぼみに声が小さくなる。俺は促す事も聞き返すこともせず、ただ彼女の言葉を待った。

「……………人が生きるうえで、人を騙す事って、仕方がない事かな？」

それを俺に聞くということは、彼女は性別を偽っている事を気にしているのだろう。気にするなと言う方が無理か。

彼女は祈願するかのようには俺を仰ぎ見る。そんなに期待しないで

いただきたい。

「どうだろうね。その答えは人によってまちまちだから、どうとも言える。私の個人的な意見でよければ話そうか？」

そう聞くとただ頷いた。

「騙す事の是非については置いておくけど、仕方ないって事はな
いと思う。仕方ないって思う事は、即ち諦めだろう？ どうしよう
もない、仕方がないということは確かにある。それでも私は意志だ
けは持つていたい。出来ない事は許せるが、しよつとしない事を認
める事はできない。人を騙して、それを悪いと思うなら、それを変
える意志を。人を傷付けて、心が痛むなら、それを治す意志を。悪
を憎み、正義を成そうとするなら、それを成す意志を。だから君は
君の好きなようにすればいい。私は君の意志とその選択を祝福しよ
う」

そう言い終えて、俺は立ち止まっていたデュノアを振り返る。呆
けたような、気の抜けた顔。寧ろ、その気の張っていない顔が彼女
の顔ほんものなのだろう。昨日もこんな顔をしていたような気がする。

「ほら、行くぞ」

そう言つと彼女は花のように微笑んだ。向日葵のような笑顔だ。
足早に駆け寄ってくる彼女を待つて、再び並んで歩き出した。少
し話し込んでしまったため、歩調を速めた。

「ねえ」という彼女の声に反応して横を向くと、そこには悪戯な
笑みをした小悪魔がいた。

「好きに呼んでいいって言ったよね？」

「言ったね」

「じゃあ、『お姉ちゃん』って呼んでもいいかな？」

そう言う彼女はとてもいい笑顔をしていた。相方候補の三人目決
定かな？

だが俺としてもここで退くつもりはない。意地でもシャルルとは
呼ばない。

「好きにすればいいよ、シャルロット」

俺がそう返せばあからさまに不機嫌な顔をしていた。笑顔しか出来ない奴かと思っていたが、予想以上に表情は豊からしい。

噴出しそうになるのは堪えた。しかし、口角が釣りあがるのは隠しきれなかったようで、デュノアは不機嫌そうなままで文句を言う。

「改めてよろしくねお姉ちゃん」

「ああ、よろしくなシャルロット」

二人で並んでグラウンドに向かう。なかなか愉快的気分だったと自覚する。

グラウンドについて一夏以外の生徒が揃っているのを見て、一夏を置いてきた事を思い出したが、そんな事はどうでもいい。

遅れてきた一夏が織斑先生に叩かれているのを見て、篠ノ之箒は呆れてものも言えなくなった。

同じ境遇の秋二もデュノアも遅れずに来ているというのに。いくらなんでも「着替えに手間取りました」と言うのは言い訳にもならないだろう。

「では、本日から格闘及び射撃を含む実戦訓練を開始する」

「はい!!!」

「今日は戦闘を実演してもらおう。風！ オルコット!」

「はい」

「はい」

「専用機持ちならすぐに始められるだろう。前に出る」

織斑先生に呼ばれて二人が前に出る。

二人とも自信満々といった所だ。私だって専用機があれば、という思いを頭を振って振り払う。それをクラスメイトに見られて声を掛けられたが、それには「なんでもない」と答えた。

「それで、相手はどちらに？ わたくしは鈴さんとの勝負でも構いませんが」

「へー、近接戦闘では素人以下の代表候補生がよく言うじゃない」
「言いましたわね？ その減らず口、私が縫って差し上げましょ
うかしら」

「驚いた。イギリスのお嬢様が裁縫なんて特技を持っていたとは
知らなかったわ」

まさに一触即発といった感じた。しかし、それは知らない人から
見た感想であって、よく共に訓練をしていた私達はそれがただの戯
れで、お互いに尊敬し合っている事を知っている。

「静まれバカども。対戦相手が来たぞ」

織斑先生のその言葉を聞いて、変な音がしているのが聞こえた。
その音源には一機のISがあった。

「ど、どいてくださいっ！」

そう悲鳴を上げながら落下してくるのは我がクラスの副担任であ
る山田先生。

落下地点には秋二がいた。このままではぶつかってしまうという
のに、当の本人は動きもしない。

周りが騒ぎ出したのによっと気が付いたのか、上空を見上げた秋
二はISを展開させて、いつかの猟銃を山田先生の乗るISに向け
て構える。

「Freeze」
しっくいな

秋二のその一言でISはピタリと動きを止めた。

「大丈夫ですか？」

「それはこっちの台詞です。しっかりしてください」

そう文句を言いながらISを待機状態に戻すと一つのネックレス
になった。紅葉を象ったネックレスが秋二のISの待機状態なのか
と今更ながら気が付いた。

「さて、さっさと始めるぞ。準備はいいな」

「えっと、二対一で…？」

「いや、さすがにそれは…」

二対一という状況に乗り気ではない二人。専用機持ちとしての自

信から、それでは話にならないのではないかと考えているのだろう。私もそれには同意見だ。

二人の実力はそれなりに理解しているし、二人に対する山田先生はラファール・リヴアイヴという訓練機を使用している。

機体の性能差に、数的不利。いかな実力者でもこれを覆すのは容易な事ではない。

「安心しろ。二人まとめてかかっても彼女は上手く捌ききるさ。

だが、不満だというなら…、秋二！ お前も参加しろ」

「お断りします」

「ヤレ」

「嫌です」

織斑先生は聞き分けのない秋二おとしいに出席簿を振り下ろすが、それは虚しく空を斬った。そのことに織斑先生は憮然とした表情を見せたが、出席簿を納めて秋二に耳打ちした。

何を言ったのかは全く想像もつかない。

「了解しました」

秋二に言う事を聞かせるような呪文でもあるのだろうか？

返事をした秋二はまたISを展開して、山田先生に並ぶ。

「よろしく願いますね秋二君」

「お任せします」

初めて組む事になった両人は挨拶をし合っている。

これで四機のISが上空に待機していることになった。その四機が織斑先生の合図で動き出す。

正確に言うと動き出したのは三機だけであった。

セシリアのブルー・ティアーズはビットを四方に飛ばし、鈴の甲龍は開始と同時に山田先生のラファール・リヴアイヴに突っ込んだ。山田先生はそれに対して後方に退きながらアサルトライフルで射撃をする。それと同時にビットへの警戒も怠らず、両後方からのビットの射撃を完璧に回避する。

そして秋二の呉葉は身動き一つしていなかった。

「ちよつと秋二！！ 馬鹿にしてんの！！」

「よそ見している暇があるならご自由にどうぞ」

「アイツム力つく！！」

言葉を荒げている鈴ではあるが、目の前の山田先生を相手にするので精一杯らしい。同じくセシリアもそうだ。隙を見て秋二に攻撃しようとしているのはわかるのだが、それを尽く邪魔されている。

実質二対一。それでも圧しているのは山田先生だった。

セシリアと鈴の連携はお世辞にも良いとは言えない。その連携の隙を突く山田先生の技術に感服した。

「隙だらけだぞドルバツキー」

「は？」

間抜けな声と共にグラウンドに爆音が響いた。

それは今まで山のように身動き一つしなかつた秋二が鈴を撃ち抜いた音だった。呉葉はバズーカのようなものを持っている。所謂、無反動砲という奴だろう。

その直撃を受けた鈴は重力に引かれて落ちていった。

「え？ 秋二さんが何故？」

「私が一度でも何もしいなんて言つたかい？ 言つてないよな？ 言つてないだろう？ 言つてないはずだ？ ということでこれでお仕舞い」

秋二の手にはバズーカからライフルに持ち替えられていた。そして、そのライフルがセシリアの脳天を難なく撃ち抜いた。

彼女もまた鈴と同じように落ちていった。

「お疲れ様でした、山田先生」

「いえいえ、こちらこそありがとうございました」

「私なんていてもいなくても変わらなかつたでしょう」

「そんな事はありませんよ。お蔭で戦いやすかつたですよ」

「二人とも、さつさと降りてきてくれ」

空中で褒めあう二人に頭を抱えながら、織斑先生はそう指示した。その後漸く実践訓練が始まった。

シャルル・デュノアが織斑秋二の事を姉と呼び、逆に秋二がデュノアの事をシャルロットと呼ぶのを見た周囲の人間は決まって呆けたような顔をしていた。しかし、本人達が何も言わないため、周りの人間は首を捻るだけだった。

この世の中で成功するには、力づくでも、死ぬまで剣を腕より離さないことだ。

『断片』

放課後になってシャルルと一緒にグラウンドにいた。そこでシャルルからアサルトライフルを借りて射撃の練習をしながら、織斑一夏は天を仰いだ。

こんなに銃を撃つのが大変だとは思わなかった。秋二なんて片手でアサルトライフルを扱っていたから簡単なのかもしれないと心のどこかで思っていたが、そんな事はなかった。

ISが反動を制御してくれているとシャルルは言うが、反動でまともに狙いも定められない。

「初めは誰もそんなものだと思うよ。寧ろ、初めてにしてはいい方だと思うよ」

「そうか？ 秋二はあんなに上手くやってたろ」

セシリアの時もそうだったし、今日の実演でも全く隙を見せなかった。秋二の話を出した途端シャルルの顔が面白いように歪む。

「ああ、お姉ちゃんって凄いやね。落ち着いてるし、品があるっていうか」

シャルルは秋二のことを何故か『お姉ちゃん』と呼ぶ。何時までも名前を呼んで貰えないことに対する一種の抵抗なのかもしれない。

「なあ、シャルル。わかってると思うが秋二は男だぞ」

「僕のお姉ちゃんがそんなわけないじゃん」

シャルルは笑顔でそう答える。

シャルルはこんな事を言う人じゃなかったというのに。秋二はこ

んなところでも俺を苦しめるのか。まあ、冗談だけど。

とりあえず、シャルルから借りたアサルトライフルを返す。

「もういいの?」

「ああ、とりあえず今回はこんなもんでいいかな。ありがとな。

お蔭でなんとなくだけど、射撃武器の特性がわかった気がするし」

「こんな事でよければ、いつでも力になるよ。これからどうしようか?」

「そうだな、一回休憩を挟んでから試合しないか?」

「僕と?」

「ああ」

「わかったよ。じゃあ、休憩しようか」

俺がISを待機状態に戻すとシャルルも同じように待機状態に戻した。

アリーナの別の場所ではセシリアと鈴が試合をしている。今日の実演の反省会をしていたはずだったが、いつの間にか二人は本気で戦っていた。

背後で試合、というよりも喧嘩をしていたセシリアと鈴を見ながら俺達そこから立ち去ろうとした。それを目の前に現れた少女に止められた。そこに立っていたのはラウラ・ボーデヴィツヒ。そいつは真っ直ぐに俺を睨みつけてくる。

「織斑一夏」

彼女は目の前の俺から視線を外す事はない。

「……何だよ?」

「貴様も専用機持ちなのだろう?……? ならば、話が早い」

「?」

「私と戦え」

「嫌だね。戦う理由がねえよ」

「貴様になくても、私にはある」

さつきから一体なんなんだこいつは。いきなり現れて、戦えだつて? ふざけるんじゃない。こんな奴に付き合っている暇はない。

シャルルの手を取ってラウラの横を通り抜けようとした瞬間、ラウラはISを展開して襲い掛かってきた。

咄嗟に白式を展開して、雪片式型で防御する。

「いきなり何しやがる!!」

「『私と戦え』と言ったはずだろう？ 貴様が戦いたくないというのなら……、こうするまでだ」

そう叫んだラウラは二本のワイヤーのようなものを展開すると、今試合をしているセシリア達の所へ突っ込んだ。

何を!? という疑問は口から出る事はなかった。それだけ素早く、ラウラはそのワイヤーで二人を縛り上げた。試合に集中していたという事を考えても、鮮やかな手際だった。

状況を把握したのか、シャルルはすでにISを展開している。

「何をしてるの!？」

「見ればわかるだろう。ほら、さっさとかかって来い。このままではこいつらは死ぬぞ」

ワイヤーを更にきつく縛り上げる。それと共に二人の表情も苦痛に歪む。それを見た俺は、次の瞬間ラウラに飛び掛かろうとした。

しかし、それと同時にワイヤーが切れたのを見て、俺は前につんのめってそれを堪えた。

何故切れたのかはわからない。シャルルでもないし、俺でもない。動けない二人ということは絶対無い。

ラウラも何が起きたのかわからない様子だった。あいつはアリーナの中をぐるりと見渡して苦虫を噛み潰したような顔になった。

「興が削がれた。首を洗って待っている、織斑一夏」

そう言うラウラは去っていった。その背にセシリアと鈴の二人が文句を言うが、何も聞いていないようだった。

俺とシャルルは顔を見合わせて苦笑いをしていた。

WA2000を片付けて、アリーナから逃げるように走りながら織斑秋二はため息を吐いた。出すぎた真似はしていない筈だが、興味本位で後をつけると碌な事がない。あのワイヤーブレードを撃ち抜いた後、ラウラ・ボーデヴィツヒと目が逢った。

彼女のことを気になったとはいえ、近づくのは面倒だと確信する。なんせ、一夏と勝負するためにオルコットとリンを巻き込むような奴だ。

しかし、この匂いが気になってしまっしょうがないのは事実だ。ドイツの軍人だという彼女は一体何者なのか。今の状況では聞いたところでまともな回答は得られない。

今のところはほとぼりが冷めるまで静観ということでもいいだろう。ここまで来れば大丈夫だろうと足を止めた時に、全身に悪寒が奔った。

奴がいる。確認はしていないが、確信した。ラウラ・ボーデヴィツヒが背後に迫っている。俺はもう一度駆け出した。

人ごみを掻き分けながら校内を走る。周囲の視線も気にせず走り抜ける。向かうは自室。そこまで行けば彼女も付いてはこれないだろう。

自室までノンストップで駆け抜けたのは流石に疲れた。鍵を掛ける事も忘れない。

部屋に入るとそこには簪がいた。

「どうしたの秋二君。汗だけでも…」

「おつかない人に追われていてね。急いで逃げてきたところなんだよ」

汗を拭きながらおどけて見せたが、簪は良く分からないといった表情だ。

喉が渴いたので、お茶でも飲もうと冷蔵庫からペットボトルを取り出した瞬間、ノックの音が聞こえてきた。

嘘だろ？ 部屋まで追いかけてくるのか？ とりあえず応対しよ

うとしてる簪の口を押さえつける。

「！！ ちよ、しゅ、しゅうじ…く、ん？」

何も言わずに口の前に人差し指を立てる。それを見た簪は壊れた玩具みたいに何度も大きく頷いた。

また、ノックの音がする。それには物音一つ立てずにやり過ぎ。それから五分くらいは規則的にノックの音が部屋の中に響いていた。五分経って流石に諦めたのかノックが止んだ。どうにかやり過ぎただろうか。

やっと逃げ延びたかと思ったのも束の間、今度はノックではなく声が聞こえてきた。

「織斑秋二。ここにいるのだろう？ いるのなら返事をしろ。三秒以内に返事をしない場合、この扉を蹴破る」

本気なんだろうな、彼女。嘘をつくのが得意そうではない人だと思うから、間違いないく実行するだろう。扉を壊されるわけにはいかないで、渋々返事をする。

「……………何の用だ？」

「何故、私の邪魔をした」

「何の事だ？」

「とぼけるな！ 先のアリーナでの一件に決まっている。私の目を誤魔化せると思うなよ」

「…あそこで騒ぎを起こされると困るんだよ。お前の我が侂のせいでアリーナが使用禁止にでもなったら困るからな」

「そうか、それは悪かったな。だが、次に私の邪魔をしてみろ、ただでは済まさんぞ」

「そうかい」

言いたい事だけ言ってボーデヴィツヒは帰っていった。素直に謝ったのは予想外だったが、その他は予想通りといったところか。俺と一夏に対する態度の違いは何故だろう。誘拐事件のせいで一夏に憎悪を抱いているのなら、俺もその対象のはずだ。

やはり気になる。ラウラ・ボーデヴィツヒとは何者なのか？

「ねえ秋二君。今のつて…」

「一組に来た転校生らしい。ドイツの代表候補生で一夏を目の敵にしている」

「大丈夫なの？」

「俺は問題ないらしい。何故かは知らないけど」

心配そうな顔をする簪の頭を撫でてやる。簪は気持ち良さそうに目を細めている。

初めやってしまったのは癖だ。蘭とかリンとかを相手にしているついでに頭を軽く叩いてしまうのだが、それを簪にもしてしまった。なにやら落ち込んでいるようだったので、励ましてやるつもりでやったら、予想以上に元気を出してくれた。

満更でもない様子の簪を見ているとつい何度もやってしまうのは悪い癖だと思う。少しずつ修正していこう。

食事を取っている最中でもはらわたが煮えくり返るようだったとセシリア・オルコットは自覚する。

「何なんですかあの女！！ 学年別トーナメントでは覚えてなさい！！」

「落ち着け、オルコット。急いで事は仕損じるぞ」

今日はいつものメンバーに加え、秋二さんと更識さんも一緒にいる。秋二さんがステーキとお好み焼きと鯖の味噌煮を並べるといふ相変わらずなメニューに手を付けながら忠告する。この突拍子もない秋二さんの食事はこの学園の名物になっている。

「言われなくともわかっておりますわ。それよりも秋二さん、貴方だって私の敵なんですよ」

「それは大変だな」

そう人事のように彼は言う。彼の態度は傲慢ではない。寧ろ、冷静に自分のことを分析しているのだろう。

「ふふふ、遂に秋二と戦えるって訳ね。腕が鳴るわ」

「俺も秋二と戦ってみたかったんだよな。それと………更識さんと
も」

一夏さんと鈴さんが思い思いの言葉を口にする。

一夏さんの言葉に対して、更識さんは親の敵でも見るかのような目で睨みつけていた。その目力に一夏さんは動揺しているようだった。

隣に座る秋二さんに対しては愛らしい笑顔を見せるというのに。こつも態度が違うのは何故だろう。彼女は一夏さんに何かされたのだろうか？

「おい、一夏。お前は更識に何をしたんだ？」

「何もしてねえって」

篤さんがそう小声で話しかけるのに、一夏さんも同じく小声で返す。

「お姉ちゃん、これとこれ交換しない？」

「いいよシャルロット。ほら、こぼさないで」

お好み焼きの切れ端とパスタを交換している秋二さんとシャルルさん。同姓だから気兼ねなくそういうことが出来るのだろう。

しかし、この二人は一体どうしたのだろうか？ 一夏さんから少しだけ話には聞いていたのだけれど、目の前で起きると更に不審に感じる。知っての通り秋二さんは男性の方であるし、シャルルさんも同じく男性の方で、断じてシャルロットではない。

それについて二人とも何も言わないので、何もわからない。昔馴染みだという事もないようだ。

IS^{（イ）}学園に来てから、私には友人が増えた。第一印象はどう美化しても良いものとは言えなかったが、今こつして他愛無い事で笑い合える友がいる事にただ感謝する。

「私、負けませんから」

不意に零れた言葉。それは私の偽らざる本音。ISでも恋愛でも負けません。

いつの間にか”負けてはいけない”から”負けたくない”に変わっていた私の望み。それを悪い事だとは思えなかった。

「あたしだつて負けるつもりなんてないわよ」

「当然だな」

私の隣には友であり、好敵手ライバルでもある人たちがいる。IS学園に来て良かった。その言葉が口に出る事はなかったが、顔にははつきりと映し出されていた。

後日、織斑一夏が相談事があつて織斑秋二の下を訪れた時、彼と相部屋である更識簪と出くわして、出会い頭に「近寄らないで、スケベ魔人！！」と言われて彼は大きなショックを受けた。この出来事は秋二の差し金であるのだが、あくまで彼は織斑一夏が起こしてきた事実を簪に告げたに過ぎず、結局のところ自分のせいであるという自覚を持つ事はなかった。

14 - S e c r e t | o f | m y | h e a r t (後書き)

誤字脱字は見つけ次第修正していきます。

15・リライト

誰に打ち明けたらいいのでしょうか？ 誰に訴えたらいいのでしょうか？ 誰と一緒に喜んだらいいのでしょうか？ 人間は誰かをしっかりと愛していなければなりません。

『三人姉妹』

校舎内を全力で駆け抜けながら、織斑秋二は辟易した。前方から押し寄せる人の波を窓から飛び降りてやり過ごし、昨日と同様に自室まで走り通した。

何故二日続けてこんなに走らなければならないのか。昨日と同じように簷は部屋の中にいた。

「えっと、また追われてるの？」

「今日は別件。追われてた事は確かだけど…」

冷蔵庫からペットボトルを取り出して一気に飲み干す。飲み干したペットボトルをゴミ箱に投げ捨ててから、簷と向かい合う。

「頼みがあるんだ」

「え、何？」

「今度のトーナメントで俺と組んで欲しい」

俺が今日追われていた理由もそのことに起因する。付け加えるなら、『優勝者は織斑一夏と交際できる』なんて噂があちこちで広まっていたせいで、俺が「もう組んでる」と言っても聞きもしなかった。

元々は個人戦だったトーナメントだが、急遽タッグトーナメントに変更になった。不幸な事に、佐藤先生が柄にもなく忘れずに連絡をしてくれた為、教室からここまで走ってこなければならなかった。リンの奴は「一夏と組む」と言っていたが、一夏の事だからシャ

ルロットと組んでいる事だろう。

「え！？ 私なんて…、駄目だよ。専用機だって出来てないし…」

簪の専用機が出来てない事は知っている。その理由が俺達のISのせいだという事も。

白式と呉葉を製造した事になって、倉持技研はその解析や開発に躍りになって、本来開発していた簪の専用機になるはずだった。「打鉄式」の開発が凍結されていると言う。

この話は『妖怪袖ぶらぶら』改め、布仏本音女子から聞いたものだ。聞くところによれば、七割方完成していて、残りの三割を一人で完成させようとしているらしい。しかし、開発は進まず、未だに完成には至っていない。

俯いている簪の前に一つのメモリを差し出す。

「こいつを使え。呉葉のデータをありったけ詰めておいた」

「え？ …でも」

「倉持技研で開発されたISのデータを倉持技研のISに使うっていうんだから、何も問題はない。…それとも気にしてるのは、一人で完成させたいって思ってる事か？」

「…うん」

簪が姉である更識楯無に対抗心を持っているのも布仏から聞いた。会長は自分のISを自分一人で開発したらしい。それに対抗して、簪も自力で努力をしている。

そのことは悪くない。それでも俺は彼女に話しておきたい事がある。

「更識楯無についてどう思う？」

その問いに簪は俯いただけで何も言わない。俺は簪に背を向けて顔を見ないようにして話を続けた。

「俺はね、寂しい人だなと思ったよ。確かに皆から尊敬されていて、人気も高い。でも、ふとした時にあの人の隣には誰もいないんだ。孤高と言えば聞こえはいいけど、それは孤独と同じ事。どんな

人にだつて欠点はある。姉さん、織斑千冬だつて私生活はずばらだしね」

息を吸って呼吸を整えてから「気になったら寮長室に行つて見るといい。あれは人の住む部屋ではないよ」と続ける。

簪の反応は見ないようにして、もう一度口を開いた。

「話を戻すよ。どんな人にも欠点はある。それでも誰にも頼らずに、頼れずに生きてきた人は寂しいと思わないか？ 何でも出来たんじゃないくて、何でもしなければいけなかったんだつたら、完璧でなければいけなかったんだつたら、その人はどんなに寂しい人だろう。辛い時は人に頼れなんて俺は言わない。でも、頼れる人がいる事もその人の力だと思う。誰かの手を借りた事を恥に思う事はないはずだよ」

そう言つて、もう一度メモリを差し出す。

そして今度は簪の目を見つめて「俺と組んで欲しい」と言った。

それに対し簪は目尻の涙を零さないように笑みをつくと「私の方こそ、お願いします」と言った。

「お姉ちゃんのこと、寂しそうな人なんて言ったの秋二君だけだと思つよ」

「そう？ 簪はどう思っているんだ？」

そう尋ねると簪はもう一度大きく笑つた。

「私の自慢のお姉ちゃん」

その顔を眺めながら、俺は簪の頭を撫でていた。

一夏にペアを組もうと言いに行つたら、一夏はすでにシャルルと組んでいた。そのことに鳳鈴音は憤慨した。

箒とセシリアと違い、クラスが違う事から普段一夏と接する時間は少ない。だから、今回のタッグトーナメントで一夏を独占してやるうと考えていたが、それを横から掠め取られてしまった。

秋二は放課と共に窓から飛び降りていったからここにはいない。中学の頃もよく屋上から飛び降りたりしていた秋二だ。このくらいの高さなら大したものでもないのだろう。

事ある毎にあたしの事を猫だの、ドルバツキーだの言うが、アイツの方がよっぽど猫みたいじゃないか。

それよりも今はタッグトーナメントの相手だ。ルームメイトのテナ・ハミルトンを誘おうか。いや、このトーナメントは負ける訳にはいかない。何と言っても『優勝者は一夏と交際できる』なんて噂が広まっているのだ。これは是が非でも勝ちにいかねばなるまい。アイツがいた。セシリア・オルコットがいるじゃないか。いろいろと気に食わないところはあるが、優秀なIS操縦者である事は間違いない。アイツもあたしと同じ境遇のはずだ。一時休戦ということ、セシリアを誘う事にする。あの、ラウラ・ボーデヴィツヒとか言う女の事も許しておくつもりはない。

「鈴さん。ここは一時休戦ということを手を組み合わせよう」

「あたしもアンタと同意見よ。この試合、意地でも負ける訳にはいかないわ」

セシリアを見つけて声をかけたら、向こうの方から誘いをかけてきた。

試合までまだ時間はある。それまでに連携をしっかりとっておけば、このトーナメントあたし達の勝利よ！

「今からでも特訓を始めましょう。絶対に優勝しますわよ」

「当然よ。秋二にも、一夏にも、箒にも、シャルルにも、簪にも、そんでもってあのラウラとか言ういけ好かない奴にも絶対負けれないわよ」

今回ばかりは負ける訳にはいかないのだ。あたし達は二人並んで意気揚々とアリーナへ向かうことにした。

シャルルと向かい合って座る織斑一夏は動揺していた。シャルルにシャンプーを渡してやろうとシャワー室に入ったら、そこにはシャルルによく似た女の子がいた。

そして今シャルルはジャージ姿で目の前に居る。

シャルルは性別を偽って入学していたらしい。それには込み入った事情があるらしいが、俺が首を突っ込んでいいものか。

シャルルは俯いたままで何も話してはくれない。シャルルが話したくないと言うのなら聞かない方がいいのだろうか？

秋二なら何とかしてくれるかもしれない。そう思った俺は白式の個人間秘匿通信を使って、秋二に連絡を取る。

「秋二、聞こえてるか？」

「何だ？」

「相談したい事があるから部屋まで来てくれないか？」

「ここじゃ駄目なのか？」

「ああ、出来れば直接会って話したい」

「わかった、すぐ行く」

秋二の承諾を聞いて個人間秘匿通信を切る。

それから数分経つと、ノックの音が聞こえた。秋二が来たのだろう。すぐにドアを開けて秋二を中に入れる。部屋の奥にいるシャルルに気が付くと秋二は何か察したようだ。

「シャルルは嘘をつくのは止めたのか？」

「今になってそう呼ぶんだ。………嘘をつくのを止めたんじゃないよ、ただ一夏にばれただけだよ」

俯いていた顔を緩慢な動きで上げながらシャルルはそう答える。

「なるほど、スケベ魔人に覗かれたのか。災難だったな」

「スケベ魔人って何だよ！ 更識さんにも同じこと言われたぞ！？」

「人が着替える時にノックもせずに入ったり、どさくさに紛れ

て押し倒しているんなところ触ったり、興味ない振りして女性の胸を盗み見たりしてただろ」

「そんな事……」

事実であるから否定できないのが歯痒い。それを見ていたシャルルが少し微笑むのが見えた。

「で、相談したい事ってのはこれか？」

そう言っただけはシャルルを見つめる。すると、またシャルルは俯いてしまう。

「騙しててごめんね一夏。僕…、違うね。私はシャルルじゃなくて、シャルロット・デュノア。秋二はもう気付いてたみたいだけど……」

「まあな。一目でわかったよ」

「そっか。私はあの人の命令でこの学園にやってきたの。男性のIS操縦者としてね」

「どうしてだ？ それにあの人って言うのは？」

頭に浮かんだ疑問が口から出る。軽率だったかと思うが、それは顔に出さないようにした。

「私の父親はデュノア社の代表だから。デュノア社は今、IS開発で他国に遅れを取ってる。それを取り戻すためにIS学園でデータを集めるよう指示されていたの」

「実の父親がそんな事したっていうのか！？ 自分の娘をなんだと思っっているんだぞいつは！！」

自分の娘を道具か何かのように使うのを俺は許せなかった。

俺達の両親も幼い俺達を捨てて蒸発してしまうような人間だった。だから、俺は自分の都合で子供を振り回す大人が大嫌いだった。秋二もきつとそうなんだろう。

「でもこれでお仕舞い。二人にばれちゃったから、もうここにはいられない」

そう言っただけで立ち上がるシャルロットの前に立ち塞がる。

「一夏？」

「そんな親の都合にシャルルが付き合う必要なんてないじゃねえか！ 秋二だってそう思うだろ？」

「そうだね。IS学園にいる以上、身分は保証されるはずだったと思う」

「でも…」

「シャルルはここにいていいんだ！ 俺達の親も俺達を捨てて蒸発するような奴だった。そんな奴らの言いなりになんてならなくていいだろ！」

「一夏はやさしいね」

そう微笑むとシャルル…、じゃなくてシャルロットだったか。シャルロットは微笑んで頷いた。

彼女を守りたい。そう思うのは当然の事だった。俺はシャルロットの友達なんだ。性別を偽っていたことだって、親の命令でしかない。

さつきから秋二は俯いたままで何か考えているようなそぶりを見せている。それに気付いたシャルロットが声をかける。

「秋二どうしたの？」

「いや、気になる事があるんだが、判断材料が少なすぎてまるでわからないだけだ。まあ、シャルロットが学生として過ごす分には親がここに介入してくる事はないはずだよ」

秋二のその言葉に胸を撫で下ろす。シャルロットが無事に過ごせるように安心した。それでも、根本的な解決にはなっていない。

「秋二、シャルロットの為に俺達が出来る事ってないか？ 俺にできることならなんだってするぞ」

「何もないよ。強いて言うならシャルロットの友人で居続けければそれでいい」

「それじゃ根本的な解決にならないじゃないか！？」

俺が本気で聞いているのに、秋二はやる気なさ気のため息を吐いてから、俺を睨みつけてきた。俺はその目に怯えてしまった。

「一夏、お前は勘違いしているようだが、子供でしかない俺達に

出来る事なんて高が知れてる。お前は何でも出来る正義の味方なのか？ 自分に何が出来て、何が出来ないのかくらい把握しておけ。俺はお前のヒーローごっこに付き合う心算はないぞ。お前はシャルロット友達だろ。だったら、友達で居さえすればいい。助けてやるうなんて、助けなくちゃいけないなんて考えは捨てるよ。お前が思う以上にシャルロットは強いぞ」

秋二の言葉に俺は何も返す事が出来なかった。

いい終えた秋二はベットから腰を上げると背を向けて去って行く。秋二はドアの手前で振り向いて「お休み」と言って部屋から出て行った。

俺はシャルル、もといシャルロットに声を掛けられるまで、そこで呆然と座り込んでいた。

シャルル・デュノア改めシャルロット・デュノアの名前をどう呼べばいいのか悩んでいた織斑一夏は「シャルって呼んで」と本人に言われて悩みから開放された。一方の織斑秋二は相変わらずシャルロットと呼び続けていた。しかし、シャルロットはお姉ちゃんと呼ぶのは止めた。本人曰く「予想以上に恥ずかしかった。私の根負け」と述べていた。

16 - ハルジオン

嘘とは何か。それは変装した真実にすぎない。

『ドン・ファン』

秋二君と本音の二人と一緒に整備室にいる更識簪は今までの自分の至らなさを恥じた。目の前で汗を流しながらISを弄り回す本音の手際は私とは比べ物にならないくらい堂に入っていた。その隣で秋二君はノートパソコンを叩いて、呉葉のOSを打鉄式式のOSに変換する作業をしている。

「どう、しゅーちゃん？」

「OSの方は流用になるが問題はない。完成してからも、随時更新していけばいいだろうし……。そっちはどうだ？」

「ちよつとめんどいね。呉葉のデータだと今までの武装が使えなくなっちゃうかも」

「そうか……」

秋二君はノートパソコンを叩く手を止めてこちらに目を向ける。

「簪、ものは提案なんだけど、打鉄式式変えてみないか？」

「……変えるって？」

「本音が今までの武装が使えないかもって言ってただろ？ だから使えるように改造すればいいんじゃないかなと思ってね」

秋二君の台詞に私は目を丸くした。そんな私を置き去りにして二人は大いに盛り上がる。

「いいねー。どうせなら別のISにしちゃう？」

「できるのか？」

「できるよー。基礎はできてるからそれをゴチャゴチャっとまとめちゃえば完成だよ。かんちゃんはどう思う？」

置いてけぼりにされたかと思っただけなら急に話を振られた。そんな急に聞かれても付いていけないというか。

「え？」

「『え？』じゃなくて。かんちゃんのISなんだからどうしたいかはかんちゃん次第だよ」

私のIS。その言葉に胸が熱くなる。今までは開発過程を知らされるだけだったが、今まさに前の前で作られている。私の友人二人の手によってだ。

「そっだぞ簪。そんな所で突っ立ってないでこっち来いって」

そう言っただけで秋二君は私を膝の上において、またパソコンを叩き始めた。

「ちょ、ちょっと…、しゅ、秋二君!？」

「ほら、ちゃんと見ろって。これがお前のISになるんだぞ」

そう秋二君が指差すパソコンの画面に視線を落とす。そこにはOSのデータが羅列してあり、その横に打鉄式式の参考スペックが表示されている。私はそれをボーッと見つめていた。

「……………作りたい」

私の口から無意識に声が出ていた。

「……………IS、作りたい。私達で…、作りたい」

もしかしたら、少し泣いていたかもしれない。それを見た秋二君は笑顔を見せて私の頭を撫でてくれた。初めての時は驚いたけど、今では気に入ってしまったている。

ISを弄っていた本音が不機嫌そうな顔でこっちを見ている。なんだろう、寒気がしてきた。

「かんちゃんずるい」

手元にあったスパナを手にとって本音が飛び込んでくる。

そのまま本音は秋二君の胸に着地した。本音は秋二君の胸に頬を擦り付けている。

「えへへー」

本音がだらしない顔をしているのを見て私はむっとして本音を秋

二君から引き離れた。本音は口を尖らせて睨んでいる。それを見ていた秋二君は呆れたように諸手を上げていた。

整備室で最愛の妹が年頃の女の子のようにはしゃいでいるのを見て、更識楯無は満面の笑みを浮かべていた。

「お嬢様。あまり顔を出しすぎると見つかってしまいますよ」隣に立っている布仏本音の姉の布仏虚が眼鏡を掛けなおしながらそう注意する。私に向かって冷静な振りをしているが、内心虚だつて興奮しているはずだ。

「そんなつれない事言つて。虚だつて気になるでしょ」

「まあ、そうですね」

「何が気になるんですか？」

「!?!」

「!?!」

背後から聞こえた声に私達は驚いて振り向くと、そこには織斑秋二が立っていた。

「……………秋二君はなんでここに居るのかしら？」

平静を装つて応えるが、声の震えは隠し切れなかった。何時からばれていたのかしら？ かくれんぼは得意なはずだったけど、それももう昔話になるのだろうか。

「今日はもうお開きにして帰ろうと思つたら、いい匂いがしたんで釣られてふらふらつと来てしまいました」

彼はそう言つて微笑むと、缶に入った紅茶を私達に手渡した。

「……………何時の間に？」

「途中で飲もうと思つてたんですけど、整備室の中つて飲食禁止だったんですね。それで残つてたんです」

彼は缶を小手先で弄んだ後で缶を開けた。私は彼が開けるのを見てそれに倣い、虚は私が開けるのを見てそれに倣った。

「貴女とは初対面でしたね。私は織斑一夏の弟、織斑秋二と申します」

「布仏本音の姉、布仏虚です。ご丁寧にどうも」

どちらからともなく握手をし合う二人を眺めながら、私は紅茶の入ったスチール缶を傾けた。既製品のやけに甘いミルクティーが喉を通っていく。不味くはないけど虚の淹れてくれた紅茶の方が美味しい。何と言っても虚の紅茶は世界一だからね。

「それで、二人揃って何をしていたんです？」

その台詞に私達は揃って目を背けた。妹の様子が気になって、と言えれば楽なのだが、正直に言うのは恥ずかしい。彼の事だからとつくに気付いていたのだろっけけれど、これは一種の抵抗だ。この男に弱みは見せたくない。

「話したくないならいいんですが、そのままじゃいつまで経っても簪と疎遠なままですよ」

「うっうっ……」

呆れたように言う彼は私に呆れているような目を向ける。その視線を扇子を開く事で遮断した。

秋二君のお蔭でかんちゃんは見違えるほど明るくなった。今までの人を寄せ付けないような態度が一転、自分から周りに気を配れるようにまでなった。

私に対する感情も変化したのか、この間廊下ですれ違った時にはいつもの様に逃げたりせず、平静なように見えた。今までは私の顔を見る度に逃げ出していた事もあったのに。

それでも逆に私が逃げていては縮まる距離も縮まらない。秋二君のお蔭でかんちゃんは変わった。もちろんいい方向に。でも私はかんちゃんに否定されるのが怖いのだ。

かんちゃんの前で演じていた『完璧なお姉ちゃん』の役。その理想像が崩れてしまう事を私は恐れていた。

「ねえ、会長。昔話を一つしまししょうか」

その台詞の意図が読めず私は呆けて彼の顔を見ていた。

「あるところに一人の少年が居ました。その少年は生まれつき身体が弱くて、いつも友達を楽しそうに遊んでいるのを横で眺めていました。身体の弱い自分が一緒に混じってしまえば、皆に迷惑をかけるかもしれない。そう考えた少年はいつしかゲームにのめり込む様になりました。ゲームの中で少年は何にでもなれました。世界を救うヒーローにも、魔王を打ち倒す勇者にも、愛する者のために戦う戦士にも、逆に世界を滅ぼす悪役にだってなれました。その少年はゲームの中の主人公のようになりたいと思うようになりました。主人公達のように勇気を出して、少年は友達に『仲間に入れて欲しい』と頼みました。それを聞いた友達は少年の手を取って走り出しました。友達の輪の中で、息を切らせながら見上げた空はこの世で一番綺麗に見えたそうです」

言い終えると彼は手に持っていたスチール缶を呷った。紅茶を飲み干した彼はもう一度口を開いた。

「勇気を出してくださいよ会長。ゲームの中の主人公のように」「ま、まだ待って!! まだ、こ、心の準備が……………」

ニンマリ微笑む秋二君と対照的に私は大いにうろたえた。それを隣の虚が口を押さえて笑うのを堪えながら見ている。

「お、お嬢様が…、そんなに…、ふふ、取り乱すなんて、ふふふふふ……………」

「虚、笑わないで! 私にとっては重大な事なの!!」

そのやり取りを見ていた秋二君の「やっぱり会長は可愛いですね」と言う一言で私の思考は停止した。

そして、気付いた時には自分の部屋に戻ってきていた。何かあったのかを虚に聞いてみたけれど、彼女は「教えません、ふふふ」と微笑むだけで何も答えてくれない。

私は何か重大な失態を犯してしまったのではないのだろうか？

私の頭の中は不安で一杯になった。

秋二の後姿を見つけると篠ノ之箒は駆け出していた。

「秋二！」

「…どうした？」

「時間は空いているか？」

「ああ」

その返事を聞いてホッと息を吐く。

「私と試合をして欲しい。ISではなく剣道でだ」

「…俺も一夏と同じで中学でやってないぞ」

「構わないんだ」

「そうか、わかった」

気乗りはしていないようだが、何とか了承は得た。そのことに私は一安心する。

秋二は昔、道場で一番有望視されていた。子供でありながら、それよりも数段大きな相手にも引けを取らなかった。同年代の中では一番の実力者であっただろう。七年経って衰えているかもしれないが、それでも秋二は衰えていない筈だという漠然とした確信があった。

格技場で秋二の構えを見て、私の確信に覆い被っていたもやが跡形もなく晴れていった。秋二は衰えてなどいない。寧ろ、更に洗練されているような気さえする。

構えは子供の頃とは違うが、より秋二という人間に合った形だった。まるで別人。そう思わずにはいられなかった。

少し悲しくなったが、それ以上に楽しみになった。

「始めるぞ」

短くそう言うと秋二は頷いた。

勝負は一本勝負。

お互いすり足で近づきながら、間合いを探る。ちょうど竹刀の先端が触れた辺りで秋二の足が止まった。

どうした？　と思うよりも先に私の身体は動いていた。

一步踏み込んでからの面。ほぼ垂直に振り下ろされたそれは虚しく空を切る。考えるよりも先に踏み出した足を下げ、秋二の小手を防ぐ。予想以上に差し込まれて、私はたたらを踏んで後退する。

まさか、避けられるとは思っていなかった。防がれたり斬り返されたりは予想していたが、私の踏み込みを予測して後退したのだから。

その思考を遮るように竹刀が襲い掛かってくる。小振りで揺さぶってくるような連撃を力任せに弾き返す。そのまま、逆襲をかけようかと思つたが、身体の方が先にそれを制止する。見れば、秋二は構えも崩してはおらず、無闇に突っ込まなかったのは正解だったかもしれない。

お互いに踏み込めずに時間だけが過ぎていく。一夏とやった時には感じられる事のなかった時間。空間の中で自分達だけが取り残されているようなそんな感覚。

先に動きを見せたのは秋二だった。ほぼ水平に構えていた竹刀を地面に触れてしまうくらいに下げた。そして、右足を前に出して半身になる。そうすると自然と身体は前のめりになり、感じる圧力も増した。

すり足で間合いを調整する秋二を動きを止めて迎え撃つ。おそらく、次の一撃に秋二は全霊を込めてくる筈だ。ならば、それに応じるまで。

次の瞬間、秋二が取つた行動は凡そ剣道と呼べるものではなかった。床に頭が付くほど上体を下げての特攻。まるで獣のようだった。

退けば負ける。そう思ったのは長年の勘だ。私はそれに従つて前が出る。下から振り上げられる一撃を横から弾く事でないすとそのまま横薙ぎに竹刀を振るつた。それが秋二の右腕に当たつて乾いた音を立てる。

「…俺の負けか」

そう言って秋二は竹刀を納めた。もう少ししていたかったが、一本勝負という約束だったから仕方がない。

「私も驚いた。何が『俺も一夏と同じで中学でやってないぞ』だ。

一夏とは全然違うじゃないか」

「一夏ともやってたのか？」

「ああ、話にもならなかったがな」

そう言っただけのときの事を思い出す。ISを教えるに欲しかった一夏に、まずは身体からと言ってここで打ち合ったのが最初だったか。一夏があまりにも不甲斐ないものでISの訓練そっこのけで叩きのめしていたような気がする。結局、最後まで私に一太刀も浴びせる事はなかったがな。

そう思うと秋二は十分だ。さっきの打ち合いも一歩違えば私の方が負けていただろう。

「ありかとう秋二。お蔭でいい気分転換になった」

「どういたしまして。トーナメント頑張れよ」

そう言っただけ秋二は私の肩を叩いた。

『トーナメントで優勝したら私と付き合ってもらおう』と一夏に言っってしまったものの、未だにパートナーも決まっていない。このままでは良く分からない誰かと組まされてしまう。だからと言って、他に誘う人間に宛がある訳ではないのでどうしようもない。

一夏はシャルルと組んでいるし、秋二は更識と、リンはセシリアと組んでいる。交友関係が広いわけではないから、私にとっては先が思いやられる。

ため息を吐いてしまいそうになるのをグツと堪えて秋二と並んで格技場を後にした。

結果としてラウラ・ボーデヴィツヒと組む事になる篠ノ之箒だが、優勝するためには仕方ないと受け入れた。やはり、チームワークはまるでなっていないが、実力のある代表候補生と組めた事を羨む声がちらほら聞こえた。他にも「専用機持ちが組むのはず

るくない？」「という意見が多く見受けられたが、本人達は全く気にしていないようである。曰く「勝つために手段は選んでられないのよ」「との事。

16 - ハルジオン（後書き）

ルビとかもつと振ったほうがいいですかね？

紙上に書かれた思想は、砂上に残った歩行者の足跡に過ぎない。歩行者のたどった道は見える。だが、歩行者がその途上で何を見たかを知るには、自分の目を用いなければならない。

『読書について』

眼前に悠然と存在^{たつ}するその姿に更識簪は目頭が熱くなった。

白銀の装甲は僅かな日の光を浴びて鋭く輝く。それと対照的にフレーム部分は深い赤色で、秋二君の呉葉を思わせるようだった。全体的に装甲は少なめだが、その代わりに後背部には大型のスラストー翼が六基取り付けられていた。攻撃は最大の防御と言わんばかりの暴れ馬だ。

私に乗りこなす事ができるだろうか？

否、乗りこなすのだ。乗りこなさなくてはならない。そして何より私が乗りこなしたいのだ。

恐る恐るISに触れると、ISの鼓動が聞こえてくるかのような錯覚を覚えた。それは私の心音であったのだろうが、私は自分のISの心に触れているように感じた。

夢にまで見た専用機に触れているという実感に私は恍惚としていた。白雪のように綺麗な装甲を撫でながらISの周りをぐるりと回る。嘗め回すように執拗に。まるで動物が自分の領域^{テリトリー}にマーキングをするかのよう。

そして一周回って、またISの正面に立つと私は剥き出しになっていたISのコアにそっと接吻^{くちづけ}した。

「わーお、かんちゃん大胆」

背後にいた本音の声にはっとした。私は今、何をしていたのだろう。それを思い出して顔が真っ赤に染まる。

振り返っては本音の思う壺だと思い、視線をISに向けたまま大きく咳払いをした。

「そういえばまだこのISの名前を聞いてませんでしたね。何て言うんですか」

やけに余所余所しい口調になってしまったのは自覚している。背後からも笑いを堪えるような声が漏れていて、私は余計に恥ずかしくなった。

「打鉄式改め、『白金』でどうだ？」

「良いんじゃないかな」。即興で決めたにしては

「決めてなかったの？」

私の台詞に秋二君は「ああ」と短く答えてから「忘れてた」と繋げる。彼はきつちりしている様で意外と抜けているところがある。そういつた彼の素の部分を見ると何だか嬉しく思ってしまう。

「白金か……、良いんじゃないかな」

「…そっか」

私がそう言うと彼がそう言う。

私の頭の中では微笑むような顔を彼はしている。その想像は大方当たっているはずだ。なんとなくそんな確信があった。

秋二君との付き合いはまだ半年にも達していないというのに、随分と解った気になっていいるものだと自嘲する。

その直後、私の膝裏に衝撃が奔る。

「~~~~!?!?」

「私の前でいちゃらぶ禁止!! しゅーちんもでれでれしない!!」
堪らず膝をつくと目の前のISに激突した。結構痛い。それよりも本音の台詞は一体何なんだ。

「い、いちゃいちゃなんて……、その……、してないってば!!」

「かんちゃん顔まつかー」

勢い良く振り向いてから私のことを指差す本音の言葉を否定する。否定するのに頭の中でちよっと時間が掛かったりなんてしてない。多少ともったけど、そんな事はない。ない筈だ。ないと思う。

それを秋二君は呆れながら見ていた。

整備室から場所を変えて自室に戻ってきた織斑秋二はいつの間に関自分は色男になったのだらうかと疑問に思った。

ラブコメは一夏の守備範囲だったはずだ。いつの間にそれが摩り替わったのだらうか。いや、今も一夏は壮絶なラブコメを展開しているはずだから摩り替わってはいないのか。だとしても状況は変わらない。

目の前で簪と本音がじゃれ合っているのを見て天を仰いだ。しかし、室内に空はなく、白い天井が広がっているだけである。とりあえず、この部屋に集まった目的を二人に思い出してもらおう。

「なあ二人とも、作戦会議そろそろ始めないか？」

俺がそう聞くとベットの上でじゃれ合っていた二人は同時に頷いた。

作戦会議というのは、もちろんこの度開催されるタッグマッチトーナメントのである。まずはお互いにISの情報を確認することから始める。

「呉葉の性能は知ってるの通り、白式と並んで既存のISでもトップクラスだ。それに白式と比べて呉葉は燃費がいいから戦術の幅は広がる。近接用の武装がないのは欠点ではあるが、それを補える武装は十二分にある。モシン・ナガン、ドラグノフ、ウルサーWA2000、デグチャレフ、カールグスタフ、RPG-7、GAU-8アヴェンジャー、88mm高射砲、レミントンM870、ピースメーカー、コンテNDER。既存の重火器をIS用にモデルチェンジしたこの武装だけでも十分に闘えるのに加え、まだいくつか武装が残

「つてるしね」

「白金の方は確認するまでもないと思うけど一応しておくね。守りより攻めに基点を置いたISで、機動性に特化した戦闘を主にする。武装は近・中・遠のどこでも戦える万能型だね。オールドランダー近接用の超振動雑刀『舞風』と超振動脇差『秋風』。中距離だとシヨットガンの『ホトギス不如帰』があるし、遠距離になると荷電粒子砲の『タケミカツチ建御雷』と独立稼働型誘導ミサイルポッド『くふう颯風』があるから汎用性は高いと思うよ。何にしても私が使いこなさないとだけだ」

専用機持ちが組めば凡その相手には苦戦しないだろうが、問題は同じ専用機持ち達だ。一夏の白式にシャルロットのラファール・リヴァイヴのカスタム機、リンの甲龍とオルコットのブルー・ティアーズ。それからボーデヴィツヒの黒いISもある。更に言えば、箒も専用機持ちではないが注意すべきだろう。性能で勝る白式相手に訓練機で打ち勝てる実力を持っている。それは軽く見れるものではないだろう。

「一番の問題はリンとオルコットのペアになるだろうな」

「そうだねー。気合十分？ 殺る気満々って言うのかな？ そんな感じだったよ」

「まあ、代表候補生同士のペアだからね。デュノアさんとドイツの子はどうなの？」

「二人に関しては良く分からない。弱いはずはないだろう。シャルロットはラファールの性質から考えて万能型かな。一夏の相性は悪くないと思うよ。ボーデヴィツヒは何か隠し玉があるか見ていはずだ。一対多の状況でも動じていないようだったから、それだけ実力があると思っておいた方がいいだろうね」

「渴いた口の中を緑茶で潤す。分析しようにも情報がたりないのが辛いところだ。その点リン・オルコットペアは強敵であるが彼女達の対策は立てられそうだ。」

「情報が殆ど丸解りになっているリン達と戦う際の作戦を決めておこうか」

俺がそう言うと二人はまた無言で頷いた。

「近・中戦特化の甲龍と中・遠戦特化のブルー・ティアーズの相性は良いように見えて、実は結構悪い。BT兵器は味方と連携が取り辛いし、リンが接敵していれば撃てない。味方フレンドリーファイアに当てるなんて御免だろうからね。だからあいつらは一対一に分断してくるかもしれない。実力のある二人だから、付け焼刃の連携なんてしてくるよりもずっと厄介だ」

「そうだねー。しゅーちゃんに負けたり、まーやに負けたりして、人気は低いけど実力で言えば一番だからねー」

本音が人気と言うのは人望という意味での人気ではなく、この度のトーナメントの裏で行われている『優勝するペアはどのペアか？』という賭けの人気の事である。金を賭けるのは駄目と言う事で食券を賭けているようだが、結局変わってないのではないかと思わずにいられない。

一番人気は一夏・シャルロットペアで俺達は二番手。次いでリン・オルコットペアだ。ボーデヴィツヒはまだペアを組んでいないそうなので投票されていないらしいが、人気は高いようだ。

「でも、こつちだつて連携が完璧にできるって訳じゃないんだよ。試合まで時間はないし……………」

簪の言つとおりそれは俺達も同じ事。しかし、それは真つ向勝負に限る事でもある。

「奇策を使うんだよ。…取って置きだな」

その言葉に本音は目を輝かせ、逆に簪は首を捻っている。

「奇策ってなにー？」

「白金の拡張領域パスロット入れて貰いたい物がある」

そう言つて俺は持っていたノートパソコンの画面を二人に向けて。そこに映っているのは一枚の写真。

「？……………これって、コンテナ？」

「整備室に置いてあったグラウンド整備用の土が入ってるコンテナだね。でも…、これをどうするの？」

「ああ、それはな……………」
二人が首を傾げているのを見た俺は満足そうに指を立てながら説明を始めた。

「あら一夏さん、御機嫌よう」

シャルと特訓をしていた織斑一夏はセシリアの声で動きを止めた。
「セシリアか。なんか用か？」

「いえ、特に何か用があったわけではないのですが、調子はどうですか？ この間は何か落ち込んでいたようでしたけれど……………」
セシリアの台詞に心臓が引き攣った。この間と言うのは、おそらく秋二にシャルのことを相談した時の事だろう。秋二の言葉の意味を考えてみたけれど、何もわからなかった。

『俺はお前のヒーローごっこに付き合う心算はないぞ』

秋二の台詞が頭に浮かんできて頭痛がした。それが顔にも出てしまったのか、二人は心配そうに声を掛けてくる。

「大丈夫一夏？」

「一夏さん、大丈夫ですか？」

二人に大丈夫だよと言おうとしたところで、また秋二の言葉が聞こえてくる。

『お前は何でも出来る正義の味方なのか？』

わかんねえよ！ 一体何が言いたいって言うんだよ！！

「シャル、悪いんだけど今日はこのくらいにしておこう」

とりあえず一人になりたかった。心配そうに声を掛ける二人の声を無視してアリーナを後にした。

秋二とはいつでも一緒だった。遊びに行くときも学校に行くときも道場に行くときも。

秋二は生まれつき身体が弱かった。千冬姉からも言われていたし、

俺は秋二のお兄ちゃんだから俺が守ってやらないといけないと思っ
ていたんだ。

後ろを付いて来るだけだった秋二が変わったのは小学二年生の頃
だった。

俺が気付いた時には秋二はもういなかった。何処に行ったのかと
考えるより先に走った。走って走って、近所の公園で子供達と一緒に
なって遊んでいる秋二がいた。暫くボーっとみていたが、秋二が
倒れたのを見て、俺は何も聞かずに秋二と遊んでいた子供達に掴み
かかった。

こいつらだって秋二の身体が弱い事知ってるはずなのに、どうし
てこんな無茶させたんだ。そんな事を言いながら思い切り殴った気
がする。いや違うか、殴ろうと思ったけど殴れなかったんだ。それ
よりも先に秋二に蹴っ飛ばされたんだった。

そこからはあまり覚えていない。けれど、それが一番最初に秋二
と喧嘩をした記憶だ。

それ以来俺の後ろに付いて来るだけだった織斑秋二はいなくなっ
た。俺はそれが無性に悲しかったのを覚えている。

別にその喧嘩以降、疎遠になっていた訳ではない。暫くしてから
仲直りはしたし、いままでも仲のいい双子で通ってきた。

でもこの間見た秋二は、何か別人のように見えた。以前、篤は秋
二のことを『随分と変わった』と言っていた。

俺の知らない内に秋二が変わっていつてる。その事に俺は心底恐
怖した。

一卵性の双子児が同じ遺伝子を持つというのは有名な話だ。一卵
性双子児である俺と秋二はいつまでも変わらず一緒にいられると
思っていた。それなのに秋二だけが俺を置いていってしまう。そん
な感じがして俺は肩を抱えて蹲った。

「織斑一夏、お前にはその卑屈な姿がお似合いだな」

唐突に聞こえた声に顔を振り上げる。目の前にはいつかの眼帯姿
のドイツ人がいた。

「…何の用だ？」

「なに、お前の滑稽な姿を見て晒ってやろうと思ったただけだ。感謝するがいい」

「誰がッ！！」

思い切り叫んで目の前のラウラを睨みつける。それに対して何も感じていないようにラウラは晒った。

ぶん殴ってやる。そう思うのと身体が動くのはほぼ同時だった。しかし、俺の拳は空を掴み、逆に組み伏せられてしまった。うつ伏せに地面に押し付けられ、両腕を背中に拘束される。

「無様だな織斑一夏。自分の怒りでさえもまともに表現する事もできず、こうして私に押さえ付けられている。どんな気分だ？」

歯を食いしばってその言葉を見無視する。歯を食いしばったのは声が出ないようにするためではない。自分の非力を恨んでいただけのことである。悔しくて身体のおちこちが小刻みに震える。

この位置からではラウラの顔は見えない。しかし、どんな眼をしているかは想像できる。顔色一つ変えていないのだろう。相変わらず冷めた目で俺を見下しているのだろう。

不意に上体に掛かる重力が減った。何を？　と思って見上げるとラウラが仁王立ちをして見下ろしていた。

「私は織斑秋二を知っている」

そう一言だけ言うと言を返して去って行った。

ラウラの行動に疑問は尽きないが、それよりもただ悔しかった。

「……………俺は……………無力だ」

その呟きは曇りかかった鈍色の空に溶けていった。

そのまま天気は雨になり、土砂降りになっても織斑一夏はそこにいた。制服がびしょ濡れになり、指先がふやけて白くなり始めた頃、クラスメイトに引っ張られて校内に連れ込まれた。彼女は放心状態の一夏を織斑千冬に預けて、逃げるように去って行った。一夏は千冬に叩き起こされて漸く正気に戻った。

人生を危険にさらせ。

『悦ばしき知識』

発表されたトーナメント表を見ながら織斑千冬は辟易した。トーナメント表はA・B・C・Dの四つのブロックに分かれていて、AブロックとBブロックの勝者、Cブロック・Dブロックの勝者が準決勝を行い、その勝者が決勝、敗者は三位決定戦を行う事になっている。

そのAブロックの初戦はあろう事か我が弟同士の対決となっていた。鳳・オルコットペアはBブロック、ボーデヴィツヒ・篠ノ之ペアはDブロックだ。

ここ最近、二人の間には不穏な空気が流れている。何が原因かは知らないが、ここまで嫌な空気になるのは初めてのことだろう。

秋二の方はいつもと変わらないように見える。元々一夏と積極的に関わらなかつたというのもあるが、避けているという事はなかつた。

一方一夏は完全に秋二を避けている。今までは自分から声を掛けに行くのが常だったが、今では秋二の姿を見ると逃げ出すようになった。

『何かあったのか?』と聞くと『さあ?』と秋二はしらばっくれ何とも言わない。

二人の間には何があったのか? 考えても何もわからない。自分の弟の事だというのに何もできない自分が腹立たしい。

「あの…、織斑先生? ……そろそろ試合が始まりますよ」

山田先生の声にはっとして、アリーナに目を向ける。山田先生の

横で相変わらさずだらしのない服装でニヤニヤ笑っている佐藤先生には拳骨をお見舞いしてやった。蹲って頭を抱える彼女には目もくれず、アリーナで睨みあう二人の弟を見つめる。

いや、睨み合っただけではないのか。一方的に一夏が睨んでいるだけだ。対して秋二は涼しい顔をしてそこにいる。

一夏のペアのデュノアは心配そうに一夏を見つめていて、秋二のペアの更識は最近完成した専用機に身を包み、目を閉じていた。表情を変えないで唐突に一夏が声を出した。

『秋二、話がある』

『後にしろ』

『……………あの言葉の意味はなんなんだ？』

後にしろと言う秋二の言葉を無視して一夏は続ける。『あの言葉』とは何の事だ？

『……………言葉通りの意味だ』

『ッ！！ わからないから聞いてんだろ！！！！』

語気を荒げる一夏に対して秋二は初めて感情を露にした。その感情は侮蔑。いつもの呆れが混じりながらもたしなめる様な表情とは違う。完全な嫌悪。秋二がそんな表情を一夏に見せるとは思わなかった。

『自分で考えるよ一夏^{バカ}』

その台詞に対して食って掛かろうとした一夏をアナウンスが遮る。

『まもなく、Aブロック第一戦を開始いたします』

そのアナウンスに一夏は渋々声を抑えた。

『5』

カウントダウンと共に会場の空気も変わっていく。

『4』

心配そうな表情を見せていたデュノアは頭を振って気持ちを切り替えた。

『3』

お互いが武装を展開し、臨戦態勢となる。

『2』

目を閉じていた更識がようやく目を開いた。

『1』

一夏の腕に力が籠る。秋二は笑っている。

『試合開始!!』

その合図と共に一夏の白式はイグニッション・ブースト瞬時加速で秋二の呉葉に襲い掛かる。手には既に零落白夜が煌々と輝いている。

奇襲と呼ぶにはあまりにもお粗末な特攻。それを秋二は逃げようとしてもしない。虚を突かれたとは到底思えない。だが、一夏は秋二を今にも切りかかろうとしている。

態と当たるつもりか？ そう思った直後その考えは覆される。

『うおおおおおおお!!!!』

一夏が零落白夜を振り下ろした時、秋二は白式の背後にいた。その動きを私は理解できなかった。

なぜなら、呉葉が白式を透り抜けた様にしか見えなかったからだ。秋二は展開していたショットガンで一夏を吹き飛ばす。あの距離で後頭部に直撃したのなら、確実に絶対防御は発動しているだろう。

『ぐあああ!』

『一夏!?!』

追撃を加えようと後退する一夏を秋二は追う。

『一夏は追わせない!!』

それはデュノアが牽制をして抑えるが、苦し紛れに撃ったショットガンが白式のシールドエネルギーをまた削った。

そのデュノアも更識の専用機、白金の荷電粒子砲に晒されている。一対一分断する気かと思っただが、その直後の秋二の行動で違っていると理解した。

呉葉は白式に背を向けるとデュノアのラファールに瞬時加速を繰り出した。手にはショットガンの代わりに大砲を持っている。

それに対するデュノアの対応は迅速だった。しかし、それが仇となった。

瞬時加速で背後に迫る呉葉にショットガンで牽制しながら後退する。そこに白金が瞬時加速で迫ってくる。堪らずデュノアはショットガンで防御体制をとったが、更識の持つ薙刀は易々とそれを切り裂き装甲に傷をつけた。

そこで下がるべきだったと考えるのは私が傍観者だからだろう。この二人を相手に背を見せたくない、見せられないと対戦者なら考えてしまうのだろう。

ラファールは白金に食い付いた。近接用のナイフで薙刀を防ぐとすぐさま高速切替ラビット・スイッチで新しいショットガンに切り替え迎撃。怯んだ隙にまた白金に飛び掛る。

それに顔をしかめながらも何とか防ぐ更識の技術もなかなかのものだが、如何せんデュノアの高速切替に苦戦しているように見える。その顔が不意に変わった。苦痛に歪んでいた顔は、飛び切りの笑顔に変わっていた。

直後、二機の横合いから号砲が鳴り響いた。号砲と共に撃ち出された砲弾は、上手いようにラファールだけを撃ち抜いて、ラファールはそのまま一夏のいる方へと跳んでいった。

『くっ！』

その号砲の下にはアハト・アハト88ミリの砲台を抱えた呉葉が立っていた。その下に更識は向かって行くと何も言わずに手を合わせた。ガシャンという金属質な冷たい音からは想像出来ないほどの信頼感が二人の間にはあった。

「凄いですね二人とも」

「そーねー、一試合目からコレだもの、この後の試合なんて退屈になっちゃうじゃんコレ」

そう言うのは山田先生と佐藤先生。それには少し同感だが、ほんの少し違和感があるのも事実。

秋二の顔が気になるのだ。どこか物足りないような顔をしているように見える。その表情は一夏に向けられている。

この試合が始まってから、秋二と更識の声は聞こえない。個人間プライベート

ト・チャンネル

秘匿通信を使っているのかもしれないが、やけに連携が取れている。それに対して一夏とデュノアは滅茶苦茶だ。まず一夏が突っ込んだのが原因だが、お蔭でまともに連携も取れずに落とされてしまった。まだ具現維持限界にはなっていないが、二機共に満身創痍といった状況だ。逆に秋二達は二機共にほぼ無傷。この状況を見れば勝敗はもう決したと見て構わないだろう。

しかし、秋二の表情は変わらない。相変わらず侮蔑を孕んだ顔をしている。遠目からで確信は持てないが、震えているようにも見える。

どうしたのか？ ふと秋二の顔を見ると表情が一転していた。今度は怒りだ。怒りを露にして秋二は叫んだ。

『ふざけるのもいい加減にしろ！！ 貴様はいつまで腑抜けているつもりだ！』

秋二の言葉に誰も二の句が言えなくなった。

秋二さんの怒声を聞いてセシリア・オルコツトは心底驚いた。

普段から落ち着いていて、声を荒げる事なんてないと思っていた。その彼が目の前で大声で一夏さんを怒鳴っている。

隣の鈴さんもポカーンとしている。彼女も秋二さんのこんな姿を見るのは初めてなのだろう。

『立てよ』

『……何なんだよ』

『立てと言っている！！』

『ふざけんなはこっちの台詞だろうが！！ 何言ってるのかわかんねえよ！！』

『今の貴様は織斑一夏に相応しくない。だからこうして張り上げたくもない声を出しているんだ』

『お前に俺の何がわかるんだよ！！』

『織斑一夏の事は良く知っている。少なくとも、今のお前よりはな。俺は言ったな。お前はシャルロットの友でさえいれればいいと。今のお前はどうか！ただ自分の我が侭にシャルロットを付き合わせているだけじゃないか！！もう一度言っぞ。ふざけるのもいい加減にしる』

その言葉で一夏さんの目の色が変わった。あくまで比喻でしかないが、私にはそのように見えた。その表情に秋二さんは満足気に頷いた。

『何だかよくわかんねえけど…、とりあえずぶっ飛ばす』

『それでいい。簪、秋風を貸してくれ』

『うん、わかったよ』

更識さんは笑顔で短い刀を手渡す。それを見た一夏さんは何か思い至ったのかシャルルさんに声をかける。

『シャル、俺一人でやらせてくれないか？』

『一夏……、わかったよ』

頷いてシャルルさんは下がり、更識さんは言われるまでもなく下がっていた。

空中では二機のISが睨みを利かせている。白と赤の二機。

先に動いたのは白い方だった。全速力で何の駆け引きもなしに真正面からの特攻。このままでは最初の二の舞だと思っただけれどそうはならなかった。

赤い方は雪片式型を短刀で受け止める。おそらく避けようと思えば簡単に避けられたはず。しかし、彼はそれをしなかった。

秋二さんは雪片を受け止めると一夏さんの頭部目掛けて回し蹴りを繰り返した。目の前しか見ていなかった一夏さんにその蹴りはクリンヒットした。

怯んでいる一夏さんに秋二さんは追撃をかける。上下左右前後あらゆる方向からの三次元的な攻勢を一夏さんは何とか防いでいる。

「秋二の奴、手加減してるわね」

鈴さんの言葉に私は頷いた。

「攻撃する際に一拍おいてるように見えますね。秋二さんの目的はなんなんでしょうか？」

「多分あれよ。ここの所一夏、変だったでしょ。それが気に食わないんだと思う」

「気に食わない……………、ですか」

私の疑問に胸を張りながら鈴さんは続ける。

「そ、アイツはね、大嫌いなモノが三つあるんだって。一つは納豆。もう一つは話の通じない奴。最後の一つは腑抜けた織斑一夏なんだってさ。よくわかんないけど、『アイツなりに努力した結果なら、失敗しても呆れてから助言してやるけど、端からやる気のないアイツなら俺は多分許せない』って言ってたね」

「許せない…、ですか。彼らしいと言えばそうかもしれませんがね」
アリーナで続いている攻防に意識を向ける。

相変わらず一夏さんは防戦一方だ。このままでは一夏さんには万に一つも勝ちはない。そう思うのも束の間、次第に攻撃の手が緩んでいった。そして遂に秋二さんは短刀を下ろした。

漸く彼の攻勢が止んだ事に一夏さんは大きく息を吐いた。そして秋二さんはそれを見て口角を吊り上げた。

『ホツとしたな。ホツとしただろう。なあ、ホツとしたらお前』
秋二さんはそう言つて一夏さんを指差したかと思うと、次の瞬間には一夏さんの頭上に秋二さんがいた。

『！？』

『その安堵が、お前の敗因だ』

まるで鏡合わせの様に一夏さんの頭上にいた秋二さんの手には短刀が握られていて、その短刀は一夏さんの首筋に当てられていた。そして、訳もわからないうちに秋二さんがその短刀を引くとブザーの音と共にアナウンスが入った。

『織斑一夏、具現維持限界。戦闘続行不可により脱落です』

『残念だったな一夏』

『やっぱ…、秋二はすげえよな……………』

そう言っで一夏さんは重力に引かれてゆっくり落ちていった。そのときの一夏さんは笑っているように見えた。変わらずに佇む秋二さんは笑っていた。

織斑一夏が落とされた事で、元々ないようなものだった勝ちの目が完全に途絶えてしまったシャルロット・デュノアは、それでも一矢報いようと奮闘するが、結局、白金の建御雷タケミカヅチによって撃墜された。

試合終了後、一番人気であった一夏・シャルロットペアが敗北してしまった事によって多くの学生が悲しみに暮れていた。

18 - 魔法鏡（後書き）

戦闘描写は大変ですね。精進いたします。

英雄とは自分のことができることをした人である。ところが、凡人はそれができることをしないで、できもしないことを望んでばかりいる。

『魅せられたる魂』

敗戦してしまった織斑一夏はアリーナで次の試合の開始を今か今かと待ち侘びていた。

アリーナには四機のISが向かい合っている。一機は俺の弟である織斑秋二の呉葉。その隣に秋二のペアであり、日本の代表候補生でもある更識簪の白金。その二機の向かい側にはイギリスの代表候補生であるセシリア・オルコットのブルー・ティアーズと中国の代表候補生である鳳鈴音の甲龍が並んでいる。

今まさに、準決勝第一戦が始まるうとしているのである。この試合は俺にとって楽しみで楽しみでしようがないのだが、俺の望みと反してアリーナの中で四人は楽しげに話をしている。

まだ試合開始まで五分程度の時間があるので仕方ないと言えば仕方ない。俺も試合が始まるまで気楽に行く事にする。

「なあシャル、この試合どっちが勝つと思う？」

「ふえっ!？」

可笑しな声を上げたシャルの方を見ると、口元にクリームを付けて驚いた顔をしていた。だらしないなと思ったが、口元に付いているクリームを指先で拭き取ってそのまま口に運ぶ。途端にシャルが赤い顔をして俯いたが、やっぱりだらしなかつたか。

それは置いておいてもう一度シャルに聞いてみる。

「いや、この試合さ。どっちが勝つかなんて」

「あ…、ああああ、試合ね、試合。正直どっちが勝つかはわから

ないかな」

「だよな」

タオルで顔を拭きながら言うシャルの言葉に同意する。四人の内三人が代表候補生で、秋二は一度セシリアを倒している。正直言っただんな試合になるかも想像付かない。だからこそ楽しみなんだけど。

手元に置いてあったスポーツドリンクを飲んでから、今度は別の質問を試みる。

「シャルはどっちに勝って欲しい？」

「どっちに勝って欲しい……、か。僕としては秋二達かな」

「その心は」

「僕達に勝ったんだから優勝してもらわないとね」

シャルはそう言いながら悪戯な笑みを浮かべる。正体がばれてからシャルはこういう表情をよくするようになった。

試合後に秋二に聞いた話だと、こっちの方が素の顔らしい。

『試合開始一分前となりました。選手は配置についてください』

アナウンスと共に会場に張り詰めた空気が広がっていく。いよいよ待ちに待った試合が始まるのか。そう思うと心が躍る。

観客も優勝候補同士の試合とあって、大いに盛り上がっている。

「いよいよか」

「そうだね」

シャルと頷きあつてアリーナに目を向ける。そこにはすでに武器を構えた四機のISが毅然と佇んでいた。秋二の手にはスナイパーライフルのWA2000、更識さんの手にはショットガンホットキスの不如帰セシリアはスターライトmk?を構え、鈴は双天牙月を持っている。さっきまでの和やかな雰囲気が一転、張り詰めた弓の弦のような空気に変わっている。

『5』

その光景を俺とシャルは固唾を呑んで見つめる。

『4』

鈴が今にも飛び掛ろうと身体を前のめりにする。

『3』

セシリアがライフルを構え直す。

『2』

更識さんは定位置より少し下がってショットガンを持ち上げる。

『1』

秋二はスナイパーライフルを構えて口角を吊り上げた。

『試合開始!!』

試合が始まると同時に秋二達が取った行動に俺達も観客も、そして戦っているセシリアと鈴も理解できなかった。

ただ垂直に下へ。

それが秋二達の取った行動。攻撃でも回避でもなく、ただ移動しただけ。何の障害物もないこの空間アリーナでその行動は無意味なように見えた。

呆気に取られた二人もすぐに冷静になって二人を狙い撃つ。しかし、その射撃が二人に届く事はなかった。

そう届く事はなかったのだ。

この会場にいる全ての人間が呆気に取られていた事だろうと思う。なぜなら、障害物のないはずのこの空間に、城が一つ築き上げられていたからだ。

ただコンテナを積み上げただけの壁。後方に壁を背にして三方にコンテナを二基ずつ重ねただけの無骨な要塞。そこに二機のISがすっぱりと納まっていた。

コンテナの影に隠れながら秋二はセシリアを狙い撃つ。それを回避して反撃するが、頭を引っ込めるだけの動作でそれを防ぐ。あのコンテナは特殊なのかセシリアのビームも鈴の衝撃砲も利いていないようだ。

ISの戦闘に障害物を持ち込むという誰も思いつかなかったであろう、この暴拳に対して鈴は文句を吐き出した。

『ちよつと秋二。卑怯でしょそれは!!』

『ははははは！！』

秋二は大声で笑うだけで何も応えない。その間にも狙撃は続けているのだから対したものだと感じる。

その態度に堪忍袋の緒が切れたのか、鈴はその要塞に突っ込んでいった。

『ぶった切つてやるわよ！！』

意気勇む鈴の突撃も虚しく、更識さんのショットガンに迎撃された。

セシリアも秋二の狙撃に苦戦しているようで何度か喰らっている。

『いつまでもやられっ放しの私ではありませんわよ』

そう言つてセシリアはBT兵器を飛ばす。丁度から空きになっている上空から狙い撃とうということだろう。

そう簡単にいくか？ 秋二の事だ、そんなあからさまな弱点に何も対策していないはずはない。

しかし、予想に反してブルー・ティアーズのビットは悠々と秋二達の頭上に陣取った。

『もらいましたわ！』

そう高らかに宣言するセシリアに対して、秋二が取った行動は手を振り下ろしただけだった。その動きに併せて更識さんはいつの間にか持ち替えていた荷電粒子砲を撃つ。

出鼻を挫かれたセシリアは苦もなく回避するが、それと同時に要塞の上空でBT兵器が爆発した。

それを撃ち抜いたであろう秋二の手にはリボルバーが握られていた。

「シングル・アクション・アーミー!? あんな骨董品アンティークを使つてるの!？」

隣でシャルが鼻息を荒くして身を乗り出している。なんでそんなに興奮してるんだ？

「お、おい…、落ち着けて………」

「だって、コルト・シングル・アクション・アーミーだよ!!」

それをIS用に作り直してるなんて話、聞いたことないよ。ずるいずるい！！ 僕にもよこせ！！」

周りの注目を一身に担いながら、シャルは秋二の方を向いて怒鳴り散らす。シャルはもしかしてミリヲタなのか？ 二年前までは母親と二人で楽隠居してたつて聞いたんだけどな。聞き間違いだったかな？

騒いでるシャルを放って置いて、試合に集中する。

さっきの攻防から察するに、秋二達はセシリアの弱点に気付いているようだ。セシリアはBT兵器とISの機動を同時にこなす事ができない。そこを突いて、まずは本体に荷電粒子砲を撃ち込む事で回避を余儀なくさせ、動けなくなったビットを秋二が撃ち抜いたのだろう。

しかし、なぜ態々リボルバーに持ち替えたんだろう？ 狙撃ならスナイパーライフルの方がいい筈なんだけど。

『ブルー・ティアーズは六基あるんだったか？ 奇遇だな。ピースメーカーの装弾数も丁度六発なんだ』

『くっ、それなら！！』

セシリアは残りの五基全部を飛ばしてきた。確かに数で攻めればリボルバーでは対応しきれないけれど、リボルバーしか使わないなんて秋二は言っていない。あの授業の時のように裏を掛かれるんじゃないかと思っただが、秋二は武装を換えようとはしていない。

リボルバーでミサイルの一基を撃ち落す。その後すぐに撃鉄ハンマーを手動で発射準備位置まで移動させ、引金トリガーを引いた。もう一基のミサイルタイプも撃ち落したが、他の三基のビットは着実に近づいている。しかし、それとは裏腹にセシリアの顔は晴れない。秋二の射撃が正確なのと隙が少ないのが原因であろう。

このままなら全基が撃ち落される。これは予想でもなんでもない事実だった。

更識さんは荷電粒子砲やショットガンで二人の動きを封じ込めている。その隙に秋二がまた一基落とした。これで残りは二基。

ここに来てセシリアの動きが止まった。それに気付いた更識さんはショットガンで牽制するが、それを避けようともしなかった。その間にビットが要塞の上空に近づく。

確かにセシリアはB T兵器と機動の同時運行ができない。しかし、動かなければ精密機械並みに精度の高い操作ができるのも事実。そして今セシリアは回避を捨てて攻めに出た。

その行動に秋二の顔が歪む。

更識さんも荷電粒子砲で沈めようとセシリアに構えるが、それと同時に鈴が突撃を仕掛けてきてその対処に追われる。

そして遂に上空から青い雫が降り注いだ。降り注ぐ二本の光線。その内の一本は爆風と共に降り注ぎ、もう一本は完全に秋二のISを捉えていた。

その直後、蜂の巣を突付いたかのように鉄の檻から二機のISが飛び出した。その背後でB T兵器の最後の一基が爆散していた。六基のB T兵器を全て撃ち落とした秋二はリボルバーの弾倉を外して排莖する。弾倉から六発分の空莖莖が重力に引かれて落ちる。

『漸く出てきたわね、こっからが本番よ!!』

鈴はそう言いながら秋二を指差して、仕切り直そうとするが、それをそれを気にも掛けず弾倉に一発ずつ弾を込めていく秋二の姿に業を煮やしたのか、秋二に向かって衝撃砲を放った。

それを秋二は悠々とかわして見せた。弾を込め終わると弾倉を銃身に戻した。

『どうしたんだ？ 顔を真っ赤にして』

『アンタの!! せいぞろい!! しょうが!!!!』

『……………俺達の墨俣城がそんなに気に食わなかったのか?』

『何が一夜城よ!! いいわ、あたしをコケにしたこと、後悔させてやるんだから』

『鈴ちゃん、ちよつと怖い』

『まあ、落ち着いてくださいいな鈴さん』

『むう、なんだかご機嫌ね、セシリア』

戦闘中だというのに四人で談笑している。さっきまで白熱した攻防を繰り広げていたと思っただらこれだ。

隣のシャルなんて恍惚とした表情で秋二のリボルバーを見つめている。

何だかどつと疲れが出たような気がする。ため息を一つ吐いてから顔を上げる。

『そうですねよ。鈴さんの言うとおりが機嫌ですわ。あの秋二さんの思い通りにならなかったのですから、私としては大きな一歩です』

セシリアは秋二を墨侯城から引きずり出した事にたいそうご満悦な様子。BT兵器を全部失った事は気にしていないようだ。

『こっからが本番、なんだよなドルバッキー？』

『ぶっ潰す！！！！』

渾名で呼ばれた鈴は秋二に向かって飛び掛る。それを秋二はひらりひらりと避けていく。

セシリアはビームライフルで更識さんに牽制を掛け、更識さんは射線上に鈴が入るように立ち回っている。お蔭でセシリアは顔をしかめている。

『逃げんな！！』

『猫將軍は無理難題を仰る』

秋二は逃げながらリボルバーで鈴を撃つが、鈴は弾丸を斬って直進する。頭に血が上っているせいで鈴は気付いていないが、凄い事してるぞお前。客席なんて拍手喝采だぞ。

鈴がそのまま秋二に斬りかかるが、秋二は難なくかわしてから、蹴りを入れて距離を置く。

それを双天牙月の腹で受け止めると鈴は笑い始めた。何が起こったのかと注視していると、唐突に双天牙月を消した。

そして、足を大きく開き、独特な構えを取る。

『ふ…、ふふふ…、ふふふふ…、ふふふふ…。我が八極に二の打ち要らず。李氏八極拳始祖、李書文の名の下に、鳳鈴音いざ参る！！』

さつきよりも速い速度で秋二の懐に入り込む。そこからの動きは質実剛健で隙がなく、秋二の反撃も後退も許さず、鈴の間合いで戦う事を余儀なくされた。

秋二の顔に焦りが混じり始める。もうすでに近接向きでないリボルバーは戻して徒手空拳になっている。

『……素手の方が強いじゃないか』

『あら？ いつになく弱気じゃない。槍だつたらあたしもっと強いよ』

取っ組み合いながら鈴は自慢するがそれは自惚れではなく、純然たる事実なんだろう。今の攻防も秋二だから耐えられているのであって、俺だつたら数十秒と持たずに叩き伏せられている事だろう。

秋二が鈴より射程リーチの長い足を使って反撃するが、それをギリギリのところまで引き付けながら回避するとそのまま秋二の背後を取った。そのまま秋二に背を合わせるようにして思い切り叩き付けた。

貼山つぎやま靠かかだつたかな。格ゲーとかでも有名なアレ。防御もできずに吹き飛ばされた秋二は地面に叩きつけられるかと思つたが、寸前のところで一回転し地面を踏みしめた。

何とか体制を崩さずにいた秋二を見て、鈴は追撃を思いとどまる。あのまま、地面に倒れこんでいたらマウントを取られて、ボコボコにされていたのだろう。人事ながら、人事とは思えないのでぞつとした。あそこにいるのが俺じゃなくてよかった。素直にそう思つた。そこから二人は膠着状態になった。鈴は秋二が隙を見せるのを身を乗り出して待ち、秋二は新たな武装を展開して無言の牽制を行っている。

秋二の手には猟銃のような拳銃が握られている。何なんだろうかと思うと隣のシャルがまた騒ぎ出した。

「コンテンダー！？ そんなのまであるの!？」

またシャルが目を輝かせて秋二の手元にある拳銃に目を向けた。正直この子は放っておこう。俺の手に負えない。

セシリアと更識さんはどうしているのかと目を向けてみると、更

識さんの防戦一方だった。不思議に思つてよく見てみると、白金の機動がおかしい事に気が付いた。回避する時の反応が遅かったり、移動中に急に減速したりしていた。更識さんの顔を見る限り意図してやっている事ではなさそうだ。

『どうしたんですの、更識さん？ 調子が悪いみたいですが、手加減はいたしませんわ！』

更識さんはセシリアのビームライフルを回避しようとしたが、また動きが止まってしまう。それでも少ない装甲部分で防御する辺りは流石だが、このままではジリ貧だ。

顔をしかめながら更識さんはもう一度コンテナの影に逃げ込んだ。その間に何発か喰らってしまったようだが、致命的な直撃は間逃れている。

『隠れていても勝てませんわよ？』

『わかっているよ。私は勝つためにここにいるんだから！』

そう言うつと更識さんは新しい武装を展開した。遠目からはただのミサイルポッドにしか見えないが、あれが逆転に繋がる武装なのだろうか？

総数四十二のミサイルが発射される。それは一直線にセシリアに向かつて行つたかと思うと、四方八方に散らばった。

その内の一つにセシリアは狙いを定めるが、そのミサイルはその光線を避けてセシリアに向かつていった。

この動きを俺は知っている。あれは確か秋二とセシリアが戦った時、秋二の猟銃から放たれた弾丸は秋二の思うままに動いてセシリアを追い立てていた。

その動きと今のミサイルの動きは同じものだった。そしてそうこうしている内にセシリアの眼前にまでミサイルは迫っていた。

堪らずセシリアは全速で後退する。ミサイルという名の猟犬は一つ一つ違う軌道で標的^{セシリア}を追う。

『逃がさない！』

流石にあれだけの数を一度に操作するのは難しいのか、ミサイル

同士がぶつかって数を減らしていくが、それでも相当数のミサイルがセシリアに迫っていた。

そして猟犬の一体が喰らい付くと、続けざまに爆風という花が咲いた。

『はあ……、はあ……、勝ちも勝ちだよ、オルコットさん』

『……そうですね。私も……、まだまだ未熟、ですわ』

『セシリア・オルコット、具現維持限界。シミュレーション・ダウン戦闘続行不可により脱落です』

青い鳥の撃墜と共にアナウンスが告げられる。

しかし、秋二と鈴の二人はそのアナウンスも聞こえていないかのように集中していた。

長い沈黙。

一時は盛り上がった客席も、その異様な雰囲気を感じたのか静まり返る。

更識さんもコンテナの影で静観している。

その拮抗を破ったのは秋二の方からだった。真正面から何の小細工もなしの瞬時加速イグニッション・ブーストによる特攻。秋二らしくないと思ったが、何か考えがあるのだろうか？

当然のように鈴は自分の得意な間合いに、態々飛び込んでくれた事に口角を吊り上げた。

鈴が繰り出した牽制の突きを秋二は避けようとしなかった。そのまま突っ込んで、拳銃を鈴の脳天に突きつける。

『うっそ!?!』

『大当たりだJack pot!』

たった一発の銃弾が勝敗を決した。

『鳳鈴音、具現維持限界。戦闘続行不可により脱落です。鳳・オルコットペアの両者共に戦闘不能となりましたので、織斑・更識ペアの勝利です』

秋二と更識さんの勝利を告げるアナウンスと同時にアリーナは今日一番の歓声に包まれた。

試合終了と共に駆け出したシャルロット・デュノアを追いかけていった織斑一夏は、織斑秋二の前で目を輝かせて「銃を見せて欲しい」と強請るデュノアを見て犬のようだと思った。その横では鳳鈴音が秋二にぶら下がっていて、何だか拗ねた猫のように見えた。犬に強請られ、猫に拗ねられた秋二は困り果てた表情をゼシリア・オルコットに向けるが、オルコットは「お似合いですわよ」と微笑むだけで何もしようとしなかった。一夏は自分のところに飛び火してくる前にそそくさと逃げ出した。頼みの更識簪もISSの整備のために抜けていて、秋二は面倒臭気に天を仰いだ。

20 - 魔弾く Der Freischütz

誰も学ばない、誰も知ろうとしない、誰も教えない。 孤独
に耐えることを。

『曙光』

「ごめんね…、白金……、直らなかつた」

待機室で呆然と本音の言葉を聞きながら、更識簪は無言で頷いた。何となく予想はついていたのだ。準決勝の途中から途端に動かなくなつた白金。まだ出来たばかりで不調は予想できたが、あと一試合だけ持つてほしかつたというのが私の本音だ。

「しょうがないさ。本音はよくやつたよ」

そう言いながら秋二君が本音の頭を叩くと、少しだけ元気を出したように見える。

秋二君の右手は魔法の右手だ。触っていると何だか幸せな気持ちになる。

「…どうしたら良いのかな？」

ポツリと出た疑問。その疑問は予想外のところから返答が来た。

「その質問には私が答えよう」

そう言つて待機室の入り口に立っていたのは織斑先生だった。少し顔がやつれている様に見えるが、どうかしたのだろうか？

「…………… 決勝戦は秋二とボーデヴィツヒの二人でやる事になった。更識同様のトラブルが篠ノ之の方でも起きたのでな。不満は残るだろうが…、理解してくれ」

織斑先生の言葉に私は拍子抜けしてしまつた。私の戦いはここで終わってしまったのかと肩の荷が下りたようで、秋二君と一緒に戦えないことに憤りを感じるような、変な気分。

それ以上何も言わずに織斑先生が立ち去るのを見送ってから秋二君が話し始めた。

「……本音、ボーデヴィツヒの映像出せるか？」

「…うん、わかった」

「簷もボケツとすんな。試合が始まるまでにウサギちゃんの弱点見つけ出してもらおうぞ」

「え？ あ、うん」

秋二君に乱暴に頭を撫でられたら、変な気分もどこかに消えてしまった。私に出来る事はまだある。それなら私は秋二君の期待にこえて見せよう。

本音が秋二君のノートパソコンを操作してC・Dブロックの準決勝を映し出す。

そこではある一機のISが縦横無人に駆け巡っていた。そして、その一機は他の三機を一方的に叩き落していた。仲間ごと攻撃をして勝利した、その一機こそ決勝で戦う事になるラウラ・ボーデヴィツヒの専用機、シュバルツエア・レーゲンだ。

「おい、これじゃ何もわからないんだが……」

秋二君がそう言うのも無理はないと思う。圧倒的な実力があるのはわかったけれど、これじゃ何も対策がたてられない。

「…んにゃ？ この試合なら良さそうかも」

そう言うって本音が表示した画面には、打鉄とレーゲンが一騎打ちを繰り広げていた。先の準決勝の試合では余裕綽々といったボーデヴィツヒさんだったが、今は手をこまねいている様に見える。

訓練機で専用機と同等に戦っているこの人は何者だろうと気になったが、今はボーデヴィツヒさんの動きに注目する。

一定の距離を保ちつつ、時折近接用のレーザー手刀で接近戦を仕掛けるが、それでも切り崩せていない様子だ。

しかし、その接戦の結末はあつけない幕切れだった。

数秒だけ膠着状態になったかと思うと、レーゲンの放ったレールカノンを回避できずにそのまま打鉄は撃墜。元々シールドエネルギー

「も減らされていたのか、その一撃で勝敗が決した。おかしい。何かおかしい。何となくおかしい。」

「本音、今のシーンもう一度」

「はいな」

本音は元気よく返事をするともう一度さっきのシーンに巻き戻した。

直撃する寸前の彼女の顔は何か信じられない事が起きたような顔をしている。

今までは危なげなく避けていた攻撃が直撃したこと。そしてその時の彼女の表情。ポーデヴィツヒさんが何かを仕掛けたことは間違いない。問題はそれが何か。それを私は見極めなくてはならない。

「もう一度」

もう一度同じシーンまで巻き戻して再生する。

今までは完璧に軌道を読んで回避していたのに、その一回だけは回避すら出来ていなかった。

隙を突いたと見るにはあまりにも不自然だ。まるで動きが止まってしまったかのよう。

動きが止まった？ そうだ。彼女の動きは白金が機動不良アクシデントを起した時と似た感じだった。

これが偶発的なものじゃなくて、作為的なものなのだとしたら？
そこで一つの仮説が生まれた。確証はもてないが、この一連の攻防には、それで説明が付けられる。

「動きを止めるんだ……。どういう仕組みなのかわからないけど、あのISは相手の動きを停止させているんだ」

「動きを……止める？」

「そう……どの程度の拘束力があるのかわからないけど、この瞬間に打鉄は完全に止まっている。その直前に二機が睨めっこしてたよね。その時に使ったんだと思う」

高速戦闘中は使っていないかった。おそらく使えなかったのだろう。見えない何かに捕まると動きを止められてしまう。しかし、その

何かのスピードはそれほど速くなく、高速戦闘中には使えない。

「つまり、俺は八チドリみたく飛び回ってないといけないわけか。面倒だな」

「うん…、でも、これはあくまで仮説だから……」

そう俯くと頭の上に優しく手が乗せられた。乗せられた手の感触に頬が緩んだ。

「十分だ。……そろそろ行つて来るよ」

その声に顔を上げると、いまにも待機室から去っていく背中が見えた。自動ドアが閉じてしまう前にその背中に声を掛ける。

「頑張つてね、秋二君！」

秋二君はそれに片手を上げて応じるとすぐにドアが閉まって見えなくなつてしまった。

「えいっ！」

いつか感じた事のある膝裏への衝撃で、私は前のめりに倒れた。犯人を睨みつけるが、知らん振りをしている。

私だつていつまでもやられっ放しでない事を教えてやる。そう思つて私は本音に飛び掛つた。

ワンオフ・アビリティ

単一仕様の猟銃を展開しながら、織斑秋二は思考する。

簪の言うようにボーデヴィツヒのISがこちらの動きを止めるものだったとして、対策が要る。動き回っていれば良いと言っていたが、それでは駄目かもしれないとも言っていた。ならば動きを止められた時の対策をしなければならぬ。

この魔弾なら動きを止められても反撃できるはずだ。しかし、問題は止められてからでは遅いという事と展開に時間が掛かるという点がある。

初めから魔弾を使うのではおそらく攻めきれない。

展開したままぶら下げておけば良いか？ それでは足りない。動

きを止められたと気付いてからでは遅すぎる。

動きを止められたと気付いた時にはもうすでに魔弾を撃ち終えている。そんな状況でなければならぬ。

俺の頭の中に一つの考えが浮かんだ。

試合が始まる前に撃てばいいんだ。

そう思い至ると地面に魔弾を撃ち込んだ。後は猟銃を戻さずに腰に掛けて置けばいい。

あくまで保険ではあるが、ないよりはマシだろう。

向かい側のピットから飛び出してきた影を目で追う。

ラウラ・ボーデヴィツヒ。ドイツの代表候補生にして特殊部隊の隊長を務める実力者。事ある毎に一夏に食いかかっていた。

それと一夏から聞いた話によれば、俺の事を知っていると云っていたらしい。俺は彼女に付いて何も知らない。覚えている事といえば、気まずそうな顔で睨み付けてきた事とその後、部屋まで追いかけられた事と。俺と同じ匂いがあることだ。

目を閉じて一度大きく息を吐いて頭を切り替える。

あいつが何者かは関係ない。俺は俺で織斑一夏とは違う。

目を見開くとアリーナで睨まれた時と同じ顔をしていた。しかし、俺と目が逢うと、すぐにそれを掻き消していつものような尊大な物言いで話しかけてきた。

「……………織斑秋二か。織斑一夏を叩きのめす事が出来なかったのは些か物足りないが、貴様で憂さ晴らしにはさせてもらおう」

こいつが一夏に何らかの恨みを抱いている事は周知の事実であるが、こいつの態度は気に入らない。こいつは俺の顔を一夏の顔と重ねて見ている。はつきり言ってしまうえば俺を見ていない。

「……………気に入らないな」

ぼそりと呟いただけの言葉は彼女の耳には届いていなかったらし

い。

『試合を開始しますので両者は配置について下さい』

アナウンスと共に位置に着いて、ボーデヴィツヒと向かい合う。彼女が構えているのはレールカノン。対して俺が持っているのはモシン・ナガンとドラグノフ。

相変わらず彼女の目は俺を映していない。

俺の歯が軋む音がした。意識してはいなかったが、どうやら俺はいらついているようだ。深呼吸をしても、歯軋りは止まらなかった。

『5』

アナウンスのカウントダウンと共に、耳障りだった歓声が落ち着いていく。

『4』

ボーデヴィツヒはレールカノンを持ち直す。

『3』

俺も二丁のライフルを構え直し、集中する。

『2』

カウントダウンで俺の頭は冷静になっていった。

『1』

けれども、苛立ちは一向に治まる気配がなかった。

『試合開始』

アナウンスと共に二機のISが動き出した。ボーデヴィツヒのシユバルツェア・レーゲンがレールカノンで牽制を仕掛けてくるが、難なくかわしてドラグノフで反撃。反撃する際は、動きながらの射撃をしなければいけないため精度は下がる。

もう一度レールカノンを撃った後、イグニッション・ブースト瞬時加速で接近しようとしてくるが、それをモシン・ナガンで牽制し、押し留める。

「なかなかやるようだな」

意外そうにそう言う彼女の言葉にまた苛立ちが高まった。返事をする余裕は十分にあったが、そうしてやる義理もない。

二つのライフルを戻してアヴェンジャーを展開して弾幕を張る。

これも移動しながら撃っているため、精度もへったくれもないが、レーゲンの動きを制限するには十分だった。

デグチャレフに切り替えて、弾幕の切れ目から飛び出してきたレーゲンを狙い撃ちにするが、^{ロボット}瞬時加速で回避された。

その場を移動しながら再装填する。ボーデヴィツヒはワイヤーブレードに切り替えて追ってくる。

迫り来るワイヤーを無視して本体を^{レーゲン}狙撃するが、それは装甲部分で弾かれる。その間にワイヤーの射程圏内にまで接近される。ボーデヴィツヒの口元が三日月を形作る。

ここで俺は瞬時加速でレーゲんに体当たりを食らわせる。それと同時にレミントンに持ち替えて、怯んでいるボーデヴィツヒに散弾をぶつけてやる。

深追いはせずに後退してWA2000を展開して様子を見る。もちろん低速ながら移動は怠らない。

「くっ…、織斑一夏の弟の割りには、よくやる」
駄目だ。もう我慢ならん。これ以上侮辱されながら戦闘するなんて俺には無理だ。簪の忠告を破ってISの動きを止める。

「舐めるなよボーデヴィツヒ！ 俺を見るよ。俺とよく似た誰かじゃなくて、俺を見る！ 他の男のことなんて考えんな。俺だけを見るよラウラ・ボーデヴィツヒ！！」

WA2000は戻して、ピースメーカーを展開する。

「それが出来ないっていうなら……、お前の視線を釘付けにする！ 俺以外のことを考えられなくなるまでメチャメチャにしてやるよ！！」

もう一度瞬時加速で接近し、レーゲンの右側から一発撃ち込む。そのままアリーナの壁まで突っ込み、反転して慣性を殺さずにもう一度擬似的な瞬時加速を行う。

飛行と言うよりは跳躍であると言った方が正しいだろうが、これによって瞬時加速の勢いを殺さない高速戦闘が可能になる。

ボーデヴィツヒの大層驚いた顔に、残りの五発を撃ち込んで^{シリンダー}弾倉

から薬莢を打ち捨てる。

何度目になるか数えるのも忘れた壁の感触を踏みしめながら、一発ずつ再装填する。

「死ぬ気か貴様!？」

「こつでもしないとお姫様が振り向いてくれないモンでね」

激昂するお姫様に軽口で応えながら引金を引き、壁を使って反転する。

漸く俺を見たなボーデヴィツヒ。それで良い。口角が釣り上がるのが自分でも理解できた。

射撃で減速してしまったスピードは呉葉の性能で何とか維持できているが、それでもまだ足りない。ならばもう一度アクセルを踏み切るまで。

もう一度瞬時加速を繰り返すとボーデヴィツヒの顔が何か信じられないものでも見るかのように変わった。

コンテンドーを展開し、ボーデヴィツヒのすぐ横を瞬時加速で通り過ぎる時に、動くことの出来ない彼女の頭部を狙い撃つ。

コンテンドーから放たれた弾丸は絶対防御を発動させる。

彼女の横を通り過ぎたと思ったらもう目の前に壁が来ている。それに慌てる事無く反転して速度を維持する。

コンテンドーの銃身を真ん中で折って薬莢を引きずり出す。威力は高いが単発式なので連射は出来ない。弾丸を詰め込んでから銃身を起こして装填完了。

再装填するまでにアリーナを一、二往復しなければいけないくらいの速度になってきた。いいね。いい速さだ。世界が狭くなったような錯覚すら覚える。

それでもまだまだ速く。もっと速く。

絶頂まではまだ遠い。

そろそろ三桁近くにはなったのではないかと思う、壁を踏みしめる感覚と同時にもう一度瞬時加速を実行した。

彼女の丁度正面からの突撃。風を置き去りにして、光にさえ手を

かけているような感覚。^{イメージ}

そのままの勢いで俺は彼女を抱きしめた。

抱きしめ、組み伏し、怯えているウサギさんに凶器「コンテナイ」を突き付ける。

「捕まえた」

彼女の耳元でそつと呟いて俺は引金に指をかけた。

背後まで迫ってきている敗北という二文字をラウラ・ボーデヴィツヒは信じられなかった。と言うよりも寧ろ認めたくなかったと言った方が適当か。

私は勝たなければならぬ存在だ。私に負けは許されない。勝つために産み落とされ、勝利をする事が私の価値であり存在意義であった。

教官の名誉に泥を塗った織斑一夏への恨みも晴らせず、こんなところで負けるのか？

否、お前に敗北はありえない。

誰も答える者などいなかった問い。その問いに突如答えた何か。その何かに私の体が包まれていく。

泥の中に足を踏み入れるような不快感と毛布に包まれるような安心感が混在するなんとも言えない感覚。それと同時に圧倒的な力を見に纏うような感覚を感じる。

もつこのままこの身を預けてしまおうか。

そう思って目を閉じようとした時、霞んでいく視界にある男の顔が映った。

その男からはさつきまでの悪魔のようにも見えた笑みは消えうせ、怒りを、激昂した表情を私に向けるだけだった。

「ふざけるなよラウラ・ボーデヴィツヒ！！ 俺はお前と戦いた

いんだ！ それなのに貴様は！ そんな自分の意志でも力でもない醜悪な紛い物に！ 全てを放棄して逃げ出すのか！！」

逃げる？ 私が？ そんなはずはない。

あの男は怒声を張り上げ続ける。

「俺を見るよボーデヴィツヒ。俺とお前は同じだ。自分の中に自分の価値も存在意義も見出せず、誰かに与えられた役割ロールを演じる事しか出来なかつた人形だ。だが！ だからこそ俺は自分の意志を貫きたい。自分が自分であるためにだ！ 俺と戦え！ 他の誰でもないラウラ・ボーデヴィツヒの力と意志で！！」

私の力と意志？ そんなのも私には。

「俺を見るといったぞ！！！！」

その言葉にびくりと身体を跳ね上げた。そのぼやけた視線の先には真っ直ぐに私だけを見つめている織斑秋二がいた。

あの男は私を求めている。それなのに私は何だ？ 訳の分からぬモノに頼り、自らの力で、自らの意志で戦う事を放棄していたではないか。

あの男に言われるまでもない。

「私は私だ！ 消える幻影！！ 私は貴様の依り代ではない！！！！」

身体に纏わりついてた泥が元に戻っていく。私の相棒、シュバルツエア・レーゲン。

お前と共に生きて来たというのに、肝心の私がお前を信用しないのでは意味がないな。そんな自分を嘲笑する。

自分の全てをこの男にぶつける。私の意志で戦うのだ。

私は眼帯を取り、私が出来損ないである事の証、金色に変色した左目、ヴォーダン・オージェ越界の瞳が露になる。

それを見た織斑秋二は笑みを見せる。

「いい目だ。そういう目を見たかったんだ俺は」

そう言つとコルト・シングル・アクション・アーミーを構える。

それに対し私はレーザー手刀を展開する。

あの男が行ったIS機動。それと同じことをしなければ、同じ土俵にすら上げてもらえない。初めはただの気狂いだと思ったが、あの男は完全にその動きをこなして見せた。

私は何の迷いもなく瞬時加速イケニッション・ブーストを繰り出した。それから数瞬と遅れずに織斑秋二も瞬時加速を行う。

向かってきた銃弾を手刀で叩き落とし、赤いISとすれ違う。そして壁の目の前で反転し、勢いを殺さず跳躍する。通常の機動からは逸脱した動き。それなのに私と相棒レイゲンの心は昂っていた。

数回の交錯を経て、また瞬時加速で速度を上げる。あの時は付いて行く事さえ不可能だった織斑秋二の世界にいる。

触れる事もままならなかった赤い機体に今は手が届く。レーザー手刀も何度か当てている。

それでも私達は速度を落とさない。もつと速くだ。もう一度、瞬時加速で速度を上げる。相棒の至る所で軋む音がするが、その悲鳴でさえ今は心地いい。

おそらく観客は私達が何をしているのかもわかっていないはずだ。しかし、それで構わない。この世界に私と織斑秋二がいるという事実だけが全てだった。

笑っている。私もあの男も。楽しくてしょうがないのだ。

何度目になるかわからなくなった瞬時加速をしながら、私達は笑っていた。

しかし、この試合勝つのは私だ。この楽しい時間が終わってしまうのは寂しいが、私のシールドエネルギーは少ない。ならば、ここで勝負を決めに行く。

どんなに速度が上がろうが、その速度と同等の速度を持っているのなら、停止している事と何も変わらない。

停止結界AICで織斑秋二のIS、呉葉の動きを止める。その動きを完全に捕らえた事を確認してから減速する。

「捕まえた！」

思わず口角が釣りあがる。それに観念したのか織斑秋二は目を閉

じた。

「…………まさかあれほど動き回っている時に捕まるとは思っていなかった」

試合の開始直後から停止する事を殆どしなかった彼の事だ、停止結界の事はばれていたのだろう。しかし、今こうして捕らえられていることが重要だ。

レールカノンを展開してよく狙いを定める。動かない的に当てるのなど他愛もない。

「…私の勝ちだな」

「いいや…、俺の勝ちだ」

私が勝利を確信している横で、あの男は笑みを零す。

次の瞬間、相棒のハイパーセンサーが警告を鳴らした。
アラート

後方より接近する物体。ただちに回避行動を。

そう思った時にはもう遅かった。私の後頭部に一つの鉛球が飛来してきた。

『ラウラ・ボーデヴィツヒ、具現維持限界。戦闘続行不可により

優勝は、織斑・更識ペアとなります』

彼の勝利、そして、私の敗北を告げるアナウンスと共に会場が歓喜に包まれる。

ああ、そうだった。この男は魔弾の射手だった。

でもいつの間にか？ 停止してから撃つ事は出来ないし、その前に撃った素振りもなかった。腰に掛けていたのは展開に掛かる時間を短縮するため。そう思っていた。

私の視線の先ではマスケット銃をバトンのように回している織斑秋二の姿が見える。

「俺の弾頭は、唯の一つの例外も許しはしない」

そう宣言する彼の姿に私は敗北した。しかし、負けたというのに気分は悪くない。寧ろ清々しい。長年の憑き物が取れたような気分

だ。

「……悪くないものだな。負けというのも……」

地面に仰向けに倒れて空を見上げる。空はこんなにも綺麗なものであったのか。

ふと日差しが遮られたと思うと、織斑秋二が手を差し伸べていた。その手を取って立ち上がると再びアリーナに歓声が響き渡った。

織斑秋二は優勝できた事を更識簪、布仏本音らと喜び合っ
つて、周りの祝福を受けながら、あることを思い出した。ラウラ・
ボーデヴィツヒ打倒に繋がったあの試合を行っていたのは誰だろう
かと知りたかった秋二はあらゆる手段を用いてその人物が三組のク
ラス代表でスペインの代表候補生のレベッカ・フェランディエーレ
だと知り、後日御礼に行こうと思ったが、それは予想外の形で頓挫
する事と相成った。

20 - 魔弾くDer Freischützく (後書き)

過去最長になりましたが、いろいろと原作とは違う感じでかけました。

VTシステムさんは今泣いているんだ(笑)

21・シフト

我々がある人間を憎む場合、我々はただ彼の姿を借りて、我々の内部にある何者かを憎んでいるのである。

自分自身の中になんか、我々を興奮させはしないものだ。

『デミアン』

久方ぶりに聞いたノックの音と共に誰かが部屋の中に押し入ってきたのを見て、織斑秋二は思考が停止した。

ヘッドフォンから流れてくる音楽を聴きながら闖入者に目を向ける。入り口のところで蹴躓いたのか彼女は床に突っ伏して倒れている。

その姿には見覚えがある。俺の記憶より少々間抜けではあるが、先のトーナメントでラウラを相手に健闘していた、レベッカ・フェランディエーレであろう。

ヘッドフォンを首に掛けて彼女に歩み寄る。

「…大丈夫か？」

そう声を掛けると勢いよく飛び上がると、ドアに頭をぶつけてまた蹲った。ため息を付きそうになるのを堪えて彼女が起き上がるのを待つ。しかし、一向に起き上がる気配がない。

ただ立って待っているのも退屈だから、インスタントの紅茶でも淹れて待っていていよう。一度キッチンに引っ込んで棚からティーカップを二つ取り出す。その中にインスタントの粉を掬って入れ、そこに湯を注ぎ込んだ。

部屋の寝室兼リビングにあるテーブルにそれを置いて、入り口を確認する。そこにはまだ蹲ったままの彼女がいた。

ため息は付くまいとしていたのだが、不意に口からこぼれていっ

た。

もう一度、彼女のところに歩み寄って声を掛ける。

「……………大丈夫か？」

二の舞になるかと危惧したが、そんな事はなく彼女は立ち上がった。

「あ！？ は、はい！ 大丈夫れす！！」

盛大に囁んだ事からか、今までの醜態を思い出してかはわからないが、彼女の顔はあつという間に真っ赤になっていく。

「とりあえず、お茶を淹れたんで飲んでいって貰えませんか？」

フェランディエーレさん」

「私のこと御存知なんですか！？」

「ええ…、貴女の試合を拝見させてもらいました。お蔭様で何とか優勝できましたから……………」

そう言ってテーブルの脇にある椅子に腰掛けて、彼女にも座るように促す。彼女は恐る恐るといった感じで席に着く。

「あああ……………、あの…、初めまして。私、スペインの代表候補生のレベツカ・フェランディエーレと申しますでございます」

「こちらこそ初めまして。織斑秋二と申します。どうぞ、安物ですが落ち着きますよ」

カップを持ち上げて紅茶を啜ってみせてから、彼女にも勧める。

おずおずと彼女はカップに手を付けてゆっくりと紅茶を飲み込んだ。

少しだけ顔の緊張が解れたように見える。それでもまだ緊張しているのかブロンドの髪を弄ったり、身体を揺すったり、落ち着けない様子が伺える。

ポーンとその顔を眺めていると、彼女の翡翠色の目と視線がぶつかった。

目が逢った瞬間に彼女は顔を背ける。

この仕草と同じものを俺は日常的に見ているような気がする。箒がそうであったり、リンがそうであったり、セシリアもそうだ。彼女達が一夏を前にした時もこんな顔をしていたと記憶する。

それより以前にも何度か見てきた表情。

俺は気を切り替えるつもりで紅茶の残りを呷った。

空になったカップをソーサーに乗せ、再び視線を上げると彼女の顔が別人のように真剣な表情になっていた。

テーブルに身を乗り出して顔を近づけてくる。それから目を逸らさずに真っ直ぐ見据える。

「私を……………、お嫁さんにしてください!!!」

「……………三年待て。…したら考えてやる」

彼女の台詞に面食らってしまったが、織斑秋二らしく振舞えたはずだ。こんな事でうるたえる様な人間ではないはずだ。

しかし、彼女の表情は一体何なんだ？ 今は俺の返事を聞いてニコニコ笑っている。

「…何なんだアンタ？」

「ふふふ、思った通りの人でよかったよ。私はね、貴方のファン一号つてところかな。それと話したい事もあったし」

そう言うてにっこりと微笑む姿は会長によく似ていた。なるほど、彼女はそういう人種か。折角の休日だというのに疲れてきた。

学園の中庭で篠ノ之箒を漸く見つけたラウラ・ボーデヴィツヒは彼女の隣に腰掛けた。

隣に座り込んだ私に訝しげな表情を隠そうともしない彼女は真っ直ぐな人間なのかもしれない。しかし、根本的な部分で歪んでいるような、そんな気がした。

だから私はここに来たのだ。私程度の説法が何処まで通用するかはわからない。それでもやってみたい。そんな想いが私の心の奥底にあった。

「篠ノ之箒だな。まずは謝罪をしなければいかんだろうな。……すまなかった。私の我が侬に巻き込んで申し訳なかった」

私がそう口にするるとこの女は鳩が豆鉄砲を食らったような顔をする。私が謝る事がそんなに不思議か。まあ、今までの態度からしたら無理もないという所かもしれないな。

「秋二の差し金か？」

「いいや、ただ私の未熟を思い知っただけだ。駄々を捏ねるだけなら餓鬼でも出来る。私がしていたのはそれと同じだと気付いただけだ」

気付く切欠を与えてくれたのは確かに秋二である。彼は大佐の言っていた通りの優れた人間だった。努力を惜しまず、驕らず、思慮深く、洞察力も高い。十分に尊敬に値する人格である。

秋二と戦って以来、私は変わったと思う。織斑教官、いや、織斑先生からも「いい顔をするようになった」と褒められた。滅多に人を褒める事のないあの人が褒めるくらい、私の言動は浅はかだったのかと思わずにはいられない。

「まあ、詫びという訳ではないのだが…、貴様が望むならばISの訓練に付き合っただけでもいい」

「不要だ。生憎と訓練する相手に事欠いてはいない」

「……貴様は、『私にも専用機があれば……』などという世迷い事を考えているのではないか？」

「っ！？」

予想通りの反応。

この女が織斑一夏に好意を抱いているのは周知の事実であるが、その周りの専用機持ち達も拳って織斑一夏に執心のようである。専用機がないというだけで他の女共に一歩先を越されているという事実。

近接格闘でのセンスもあるし、プライド自尊心も高い。だからこそ未熟。

この女は私に似ている。気になってしまった理由はそれなのだろう。

「チャンスが向こうから舞い降りてくるなどと考えている今のま

までは、専用機など不可能だ。例え手に入れることがあったとしても、今のままでは何も変わりはない」

齒を噛み締めながら、私の言葉に反論しようとしもない。出来ないのだから。

周りの人間への劣等感と捨てる事の出来ない自尊心。その板挟みにあつて蹲っているのだ、こいつは。

「貴様は弱い。今はまだ、だ。だから私が鍛えてやる。自分の実力を認めろ。それを認め、覆そうと足掻くならば、それは恥ではない。それを認めず、駄々を捏ねるのなら、それは恥だ。強くなりた」と、勝ちたいと思うならばこの手を取れ、篠ノ之箒。」

俯いていた篠ノ之が顔を上げる。迷いの消えた戦士の眼をしている。彼女は私の手を無言で掴むとそのまま頭を下げた。

「私はッ！！ 強くなりたいたッッ！！！」

その声を聞いて私は満足した。

「いい返事だ新兵、^{ルキ}その思いを忘れるな。その意志だけが、我々の成長するための原動力だ」

未熟な我が身であるが、なかなかの説法はこなせただろうか？

私だってまだまだ強くなる。成らねばならぬ。秋二と肩を並べられるようになるまで、私は強くなつて見せよう。

織斑秋二とのお茶会を終えたレベッカ・フェランディエ

ーレは帰り際に「また遊びに来るよ」言つて去つて行った。秋二は面倒な知り合いが増えたと頂垂れた。

22・キミドリ

言葉は自由、行為は沈黙、従順は盲目。

『ヴァレンシユタイン』

買い物に出かけると一夏に誘われて付いて来たは良いものの背後から感じる不躰なまでの視線に織斑秋二は呆れて何も言えなくなつた。

隣にいる簪も気付いているようで何か言いたげな視線を向けてくる。そして何故か付いて来たラウラも気付いているようだ。だが何も言わない。しかし、一夏とシャルロットは気付いていないようだ。

なんでこんな面子で買い物に出かける事になったのだろうか？
事の発端は今日の朝の事になる。

ノックもせずに部屋に入ってきた一夏に物理的制裁加えるところからその日の朝は始まった。

すでに簪は着替え終わっていたので、一夏の特殊技能ラッキースケベが発動する事はなかったが、もう少し分別を身につけて貰いたいものだ。

とりあえず、一夏を床に正座させ、俺は椅子に座る。テーブルの上には紅茶が二つ置いてあり、その中に一夏の分はない。招かれざる客に出す紅茶はないのだ。

「それで？ お前の言い分を聞こう」

「いや、ノックもせずに入ったのは不躰だつたって反省してるからさ……、椅子に座らせてくれよ」

「悪いな一夏、この椅子は二人用なんだ。ほら、足が痺れない内に用件だけ言つて帰るといい」

簪の淹れた紅茶を飲みながら一夏にそう促す。渋々といった表情

で一夏は話し始めた。

「いや、そろそろ、篝の誕生日だろ？ プレゼントでも買いに行こうと思ってるさ。秋二も一緒に行こうぜ」

「……よく覚えてるもんだな」

「普通忘れないだろ」

「……そうかい」

「こういうところが織斑一夏らしいところなのかもしれないな。」

さて、どうしようか？ 今日は何か予定があるわけでもない。折角だし簪も誘っていいこうか。

「わかったよ。簪はどうする？」

「そうだね、秋二君が行くって言うなら行こうかな」

それを聞いた一夏の顔が引き攣ったように見える。もう足が駄目になってしまったのか？ 不甲斐ない奴め。

「あ……ああ、わかったよ。じゃあ、昼飯食った後に校門のところで集合しよう」

「りょーかい」

校門だと人目に付くだらうと思ったが、面白そうなので指摘しない事にする。

とりあえず用件を済ませた一夏は、足をふらつかせながら部屋を出て行った。それを俺達は手を振りながら笑顔で見送った。

昼食を食べ終わって、簪と二人で校門で待っていたところに現れたのは一夏ではなく、シャルロットとラウラだった。

シャルロットの方は一夏が誘ったのだらうと推測できるが、ラウラの方はどうだろう。

「一夏はどうした？ それと当然のように馴染んでいるラウラはどういうことだ？」

「一夏はトイレに行ってるって。ラウラは………、さあ？」

シャルロットは首を傾げるだけで要領を得ない。シャルロットの隣で仁王立ちするラウラに声を掛けるても「うむ！」と満足気に頷

くだけで何も答えない。

どういふ状況だこれは？

一夏が到着してもその疑問は闇の中だった。

空を仰げばそこには青い世界が広がっていた。

そして今は五人で固まって歩いている。一夏とシャルロットを先頭にして、その後ろに簪とラウラ、最後尾を俺が歩いている。

その更に後ろの電柱に隠れているのは篝とオルコットとリンか。頭も尻も隠さずに、気配さえも隠さない彼女達はそれで隠れているつもりらしい。少し楽しみが増えたな。

今日の献立^{いじめかた}を考えて、微笑みながら四人の後を追うことにする。

ショッピングモール【レゾナンス】にまで辿り着いた更識簪はそこに集まる人の群れにげっそりした。

元々人と触れ合う機会も少なく、人込みが嫌いな私にとってその光景は目を逸らしたいものだった。こんな事なら部屋に引きこもっていた方がよかったかと思ってしまうが、欲しい物もあつたし、折角の秋二君からの誘いだから、無碍にするのもどうかと思う私がい。ラウラちゃんもいるしね。

後ろではなく、隣に並ぶように歩いている彼に目を向ける。彼は嬉しそうに笑みを零している。おそらく狙上の獲物をどう調理しようか考えているのだろう。

ちらりと振り返ると数人の人影が自動販売機の影に飛び込むのが見えた。それでも隠れ切れていないのだが、彼女達はばれてないつもりらしい。

「とりあえず、ここら辺で分かれるか」

「え？ 一緒に行かないのか？」

「ああ、欲しい本あるしプレゼントにも目星はついてるしな」

「秋二君も本買うの？」

私の今日の目的も本だったりする。それよりもプレゼントの目星というのはなんだろうか？

「ああ、簪もいくか？」

「あ、うん。ラウラちゃんはどうするの？」

「私も付いて行こう」

彼女の返事を聞いて私達は二人を置き去りにしようとしたが、秋二君の背中にスケベ魔人が抱きついた。

「待ってって！ それじゃ今日一緒に来た意味がないだろ！？」

引き止められた秋二君は一瞬渋い顔をするが、すぐに掻き消して笑顔を見せる。あの顔は悪巧みをしているときの顔だ。その顔に本音の顔がダブって見えるが気にしないことにする。

「そうだな。今日の目的を忘れていたよ。いやー楽しみだ」

彼が楽しみなのはスケベ魔人と背後に忍び寄っている（つもり）彼女達の苛め方なんだろう。

「それじゃ、何処行くの、一夏」

「そうだな……、とりあえず女性用のアクセサリを売ってるところに行こうと思うけど」

「うん、わかった。じゃあ、行こうか」

スケベ魔人の手を取って先陣を切るのは先日まで男だったシャルロットさんだ。別に去勢したとかそういう意味ではなくて、性別を偽って入学していたのを、先日になって訂正したというだけだ。

もともとバレバレだったのだが、そのことは言わないでやるのが淑女の嗜みなのだ。

彼女の態度を見るにスケベ魔人の毒牙に掛かったのは明らかだ。なんとも嘆かわしい。

秋二君から彼が彼女になった事の顛末は聞いた。スケベ魔人の特殊能力により、シャワー中に覗かれたらしい。相変わらず女性の敵だ。モゲロ。

「ボケツとしてるな、行くぞ」

ポンポンと軽く頭を叩かれてはつとする。もうスケベ魔人とシャルロットさんは先に行っているが、秋二君とラウラちゃんは私の目の前で待つてくれていたようだ。

彼の言葉に応じて足を上げる。しかし、決して急いだりはしない。逸れた^{はぐ}たつていいじゃないか。寧ろ、好都合なくらいだ。

そうして私はスケベ魔人から一定の距離をとりながら彼に付いて行く事にした。

女物のアクセサリーを扱う店の前でスケベ魔人が買い物を終えるのを秋二君とラウラちゃんと一緒に雑談しながら待つ。

彼女と仲良くなったのはついこの間の事である。

調整し直した白金で訓練をしていたときに、彼女の方から離しかけてきたことが切欠。

私はあの試合で彼女のことを知っていたが、彼女の方から声を掛けてくるとは予想していなかった。それに彼女の表情も張り詰めた氷のような顔から一転して、柔らかな粉雪のように変わっているような気がした。

秋二君との一戦が切欠なのだろう。あくまで推測であるが、私は確信めいた物を感じていた。

それから二人でISの訓練をして、いろんなことを話し合った。そこで気付いた事であるが、彼女はとても可愛い。容姿云々もあるが、それ以上に言動の節々のあどけなさも、たまらない。

基本的に彼女は無知な子供のようであった。それに漬け込んで有ること無いこと吹き込んだ奴には、追って制裁を加える事にしよう。今回彼女を呼んだのは、実のところ私だったりする。そのことはラウラちゃんに口止めをしてある。秋二君の意表をつくことが出来て私は満足だった。

「どうした？」

「ふふふ、なんでもない」

「……………まあいい。そうだとしたら、お前に聞きたいことがあった

んだ」

「何だ秋二？ 答えられることなら何でも答えてやるぞ」

「…ラウラは俺のことを知っているそうだが、どのくらいまで知っているんだ？」

思案顔をして俯いてから、すぐに顔を上げて彼女は答えた。

「…大佐から聞いたのだ。織斑秋二は優秀な男である……、とな。会って確かめるまでは半信半疑だったが、すぐにわかったさ。初めは本当に織斑一夏と同じ遺伝子を持っているのかと思ったよ」

「……………大佐つてのは、……………シュヴァインシュタイガー大佐の事か？」

言い淀む彼の表情を伺うと、何だか神妙な表情をしていた。それにしてもドイツの大佐と何の接点があるのだろうか？

「その通りだ。しかし、いつ知り合ったのだ？ 私が知る限りでは接点などなさそうなものだったが……」

「…三年前に、ちよつとね」

そう言って口を濁すのは秋二君には珍しい。話したくない事なのだろうと察して私はその話を打ち切る。そのまま話を続けようとするラウラちゃんの口を塞いで別の話を振る。

「むー！ むー！！ むー！！！」

じたばたするラウラちゃんがちよつと可愛いと思つたのは内緒だ。

「それで！ 秋二君は何買うつつもりなの？」

「…本と棊だな」

「……………プレゼントの事だよ？」

「失敬な。プレゼントの事だとも」

誕生日プレゼントに本か。私だったら嬉しいけれど、篝さんはどうなんだろう？ 本を読むよりは身体を動かしてそうないメージがあるけれど。

「ふむ、本か。なかなかいいかも知れんな。私の見かけによれば、あの新兵は少々教養が足りていないように思うぞ」

いつの間にか私の腕の中から抜け出していたウサギさんは、した

り顔でそう口にする。

教養が足りてないのは貴女も一緒だよという言葉は飲み込んで、店の中で品物を眺めるスケベ魔人を伺う。

あのスケベ魔人にファッションセンスがあるのかは知らないし、目が利くかもわからないが、何となく店員かシャルロットさんに決めて貰っていきそうな気がする。それでも篤さんは喜ぶんだろうな。

そんな事を考えていると包装をもらった小箱を持って二人が出てきた。思い返せば、あのスケベ魔人は女連れで別の女への貢物プレゼントを買いに来ていたのか。

私の中で織斑スケベまじん一夏の評価がまた下がった。この先も上がることはないんじゃないだろうか。

「意外と早かったな。もう少し考えたってよかったぞ」

「ああ、俺アクセサリーとかよくわかんないから店員さんにも選んでもらったんだよ。シャルのじゃないって説明するのに一番時間が掛かったよ」

やはりと思うと同時に私の中での評価がまた下がる。女性用のアクセサリーを女性と一緒に買いに来たら、当然二人は恋仲だと勘違いするだろう。そんな事もわからないほどスケベ魔人は愚鈍なのか。隣のシャルロットさんも顔を膨らませている。

「ああ…、そうか…、お前がそれで良いんだったらそれで良いんだが……。じゃあ、本屋行くぞ」

煮え切らない表情で秋二君が先頭を進む。その隣に私は何も言わずに並んで歩き出した。秋二君を挟んで反対側にはラウラちゃんがいた。

「おい、秋二。プレゼントはどうするんだよ」

スケベ魔人に声を掛けられた秋二君は振り向きもせず「今から買いに行くんだよ」と言うだけで、立ち止まりもしなかった。

「おお！！ 新巻出てる！！」

「あ！ この人、新しい小説出してたんだ」

目の前で狂喜乱舞する二人の少年少女の姿を見てシャルロット・デュノアは驚愕した。

あの二人がこんなに興奮するのなんて初めて見る。瞬く間に二人の腕に本の塔が築き上げられ、その様子を見た店員が買い物籠を二人に手渡すまで、そう時間は掛からなかった。

「ほう、最近の書店はいろんな本が置いてあるのだな」

新しくルームメイトになった彼女も、興味津々といった感じでふらふらと本の森へ迷い込んでいった。

一夏と私は店の前で呆気に取られている。

「……………秋二ってこんなに本好きだったの？」

「……………俺が知りうる限りではここまでじゃなかったはずだ。…もしかしたら、最近は忙しくて本読んでなかったからかもしれない」
欲求不満が開放されるとこんな風になるのか。

さっきまで篝の誕生日プレゼントを選んでいた事で疲れていた私は近くのベンチに腰掛けた。その隣に一夏が続く。

当然のように隣に座る一夏にドキリとってしまった。

「悪いなシャル。今日は付き合ってもらって」

「いいよ一夏、気にしないで」

そう言いながらさっき買って貰ったブレスレットを撫でる。篝のついでというのが気に食わないが、今は一夏からプレゼントが貰えたという事実だけが重要だ。セシリアや鈴を出し抜いてやったのは幸先がいい。それに今は一夏を独占できてるし。

「ただいま。いやー、買った勝った」

「…早くない？」

そう思った矢先に陽気な声が聞こえてくる。

陽気な声に顔を上げるとホクホク顔の秋二がいた。さっきまでバベルの塔の建設に勤んでいたと記憶しているのだが、もうすでに買い物を終えてここにいる。

「早くはないさ。目ぼしい物は総浚いにしたからね。箒のプレゼントもちゃんとある」

そう言っただけは三冊の本を手を取った。

「それが？」

「ああ、良さそうなものをいくつか選んで、後はこれ」

彼の手には銀色の金属の板が握られている。その端には赤い紐が括りつけられている。

私が不思議そうに眺めていたのを察してか、秋二はその紐の部分だけを手にとってぶら下げる。

そうしてやっとその金属の板が本の棗である事がわかった。

棗には紅葉や銀杏イチヨウなどの木の葉をあしらった紋様が刻まれていた。派手さはないが、無駄を良しとしない秋二らしいと言える一品かもしれない。

「なかなか良いだろう？」

「へー、良いんじゃないか」

「うん、いいと思うよ。それでどんな本選んだの？」

箒はあまり本を読む方じゃないと思うが、彼女にどんな本を薦めるというのだろう。

私の言葉に笑顔で微笑むとベンチの上に三冊の本を並べた。

「まずは比較的有名どころからと思っただけで太宰治の『斜陽』が一つ。もう一冊は俺の好きな作家の代表作『重力ピエロ』だな。最後の一つは『我が逃走』だね。賛否両論あるけど俺は好きだよ。とまあ、こんなもんかな」

そう言っただけは本を仕舞った。さっきから終始機嫌がいいのは何故だろうか。一夏の言っていたように、久しぶりに本に触れられた事に歓喜しているのか、箒の反応を気にしているのか、それとも私達の反応を見て楽しんでいいのか、何もわからなかった。

「？ ……何だかよくわからんが、いいと思うぞ」

「…今度貸してもらおうかな」

「ああ、時間があればな」

本を片付けている秋二の後ろから簪とラウラの二人が歩いてくる。一方は袋一杯に詰め込まれた本をぶら下げており、もう一方は一冊の本を手に取っている。どちらがどっちは言わずもがなだ。

「ん？ 終わったか？」

「うん、会計に手間取ったけど大丈夫だよ」

「ふむ、私も問題ない」

二人の返事を聞くと秋二は何も言わずに歩き出した。その後ろに簪とラウラが付いて行く。その背中に慌てて声を掛けるのは一夏だ。「待って秋二、何処行くんだよ？」

その声にゆっくりと振り返ると秋二はにっこりと笑って「服買いに行くんだよ。それから水着も」と言っ先を進んでいった。

そう言えばもうすぐ臨海学校での合宿があるんだった。その買い物も今日済ませるつもりだった事をさっきまで忘れていた。

ポケットとして一夏の手を引いて私はその背中に向かって駆けて行った。

織斑秋二は駆けて来る二人を眺める振りしながらその後ろに隠れている（つもり）三人に目を向ける。それを見て秋二は買い物はここでお仕舞い、これから楽しい悪戯の幕開けだと笑みを零す。

彼らの買い物はまだ始まったばかり。

22・キミドリ（後書き）

『我が逃走』は完全にネタです。本気にしないように。

その他の二つはちゃんと実在する本ですが、突っ込みはなしでお願いします。

嫉妬をする人はわけがあるから疑うんじゃないんです。疑い深いから疑うんです。

『オセロ』

水着を買い終え、女物の服を扱っている店で、その品揃えの多さにラウラ・ボーデヴィツヒは嘆息した。

「ほら行くよ、ラウラちゃん」

「ちよ、ちよっと待て！ 私にも心の準備というものが……」

「そんな事言って、さっきは逃げようとしていたじゃない。今度は逃がさないよ」

簪がさつきと言うのは、水着を購入する時の事であろう。あの時私は未知との遭遇を果たし、堪らず逃げ出したのだ。逃げた瞬間に簪に首根っこを掴まれてしまい、結局は逃げられなかったのであるが。

私は仕方なく観念し、目の前に佇む魔境の中へと引き摺り込まれて行った。

その隣を悠々と歩いているのは秋二だ。なんで女の身である私も落ち着いていられるのだろうか。

「それはそれとして、秋二は何故付いて来るのだ!？」

「ああ、ちよっと仕掛けをね……」

微笑むだけで目的が読めない。そう言っただけで彼は服を物色し始めた。!!! そう言えばクラリツサが以前にこんな事を言っていた。『男が服を贈るといふことは、その服を脱がしたいという願望から来るのですよ』と。

その通りだとしたら、まさか。

いや、確かに秋二は素晴らしい人間であるし、尊敬もしている。しかし、物事には順序というものがあって、その、と、床を共にするような間柄ではなく、そう！ 師弟のような、そんな感じだ。だから、彼の行動にだって他意はないはずだ。

「どうしたの？」

「い、いや！ なんでもない！！ こうなつたからにはさつさと決めてしまおう！」

その後、私は簪に促されるままに、彼女の着せ替え人形に成り果てた。

気が付けば私服を買い終えていた私は、その場に秋二がいないことに気が付いた。私の記憶があつた頃はまだ近くにいたはずなのだが、何処に行つたのだろうか。

「簪、秋二がいないぞ？」

「秋二君なら、ええつと……、ほら、あそこにいた」

そう言つて彼女が指差したところには綺麗な女性が立っていた。長い黒髪とよく映えた白いブラウスに黒いデニムを穿いたその女性は、お洒落というよりは清楚で簡素ながらもその人が持つ魅力を十二分に引き出していた。

確かクラリツサが言つていたな。『日本には大和撫子という人種の美しい女性がいるそうですよ』と。彼女のことをヤマトナデシコと言つのだらうな。

思考が逸れたが、今考える事はそうじゃない。

「おい、秋二は何処にもいないじゃないか」

そう振り返つて簪を見据えるが、彼女は不敵に笑うだけで何も言わない。

私が見過ごしたただけか？ そう思う私の頭上から不意に声が掛けられた。

「買い物はおわつた？」

聞き慣れぬ声に慌てて振り向くとそこには先程のヤマトナデシコ

が立っていた。簪の知り合いなんだろうか？ 少なくとも私は見覚えがない。少し織斑先生に似てるような気がしたくらいだ。

「うん、一杯買った」

「それじゃ、一夏のとこに行くよ」

そう言つて二人は私を置いて歩いていってしまふ。私は状況をさっぱり飲み込めずにいた。

「ま、待つてくれ！ 私にもわかるように説明を！！」

私の声に二人は振り返るとにつこり微笑んだ。そして、聞き馴染みのある声でヤマトナデシコは私に声を掛けた。

「早く行くぞラウラ。一夏とシャルロットが待つてる」

その声はまさしく、織斑秋二の声だった。その隣で簪は笑っている。つまりはこのヤマトナデシコは秋二で、秋二はヤマトナデシコらしい。そしてこのヤマトナデシコは秋二だから、あの時、簪が指を差したヤマトナデシコが秋二なのだ。

「しゅ、秋二？ なのか？」

「ご明察。これから鼠捕りをするから黙つててね」

そう言つて口の前に人差し指を当てる姿は、女の私が見てもうっとりしてしまいそうなくらい堂に入っていた。

それはシャルと二人で他の三人を待つていた時の出来事だったと織斑一夏は記憶する。この記憶は口外せずに墓まで持つて逝きたい類の出来事であつたとも付け加えておこう。

「いゝちか」

背後からの甘つたるい声と共に背中に柔らかな感触が押し付けられる。それと一緒に鼻腔を刺激する女性特有の甘い香りがする。

この二つの事だけでも背後にいる女性の胸が当たっているということとは容易に想像できた。

その事実には俺は堪らず飛び起きた。

地面を転がりながら、さっきまで俺が座っていたベンチの後ろに見知らぬ女性が立っていた。白いブラウスに長い髪、黒のデニムといった簡素な服装は纏まっていて彼女に良く似合っていた。

口元に手を当てて屈託なく笑うその女性は花を連想させた。

「……ええつと、どちら様？」

「久しぶりだから忘れちゃった？ まあいいわ、折角だからお茶でもどう？」

そう言っただけで自然に俺の腕を取った彼女は近くにあった喫茶店へ歩いていく。

「い、いや…、今は待ち合わせしてるところだし」

「そんなのメール一通でチヨチヨイのチヨイじゃない。ほら、そこ可愛いお嬢さんもお出で。きつと楽しいわ」

俺もシャルもその勢いに押されて、喫茶店に連れ込まれた。一応秋二にはメールしておこう。

「ここのブルーベリーパイ美味しいのよ。ほら、一夏もどうぞ」

「あ、ああ」

隣から差し出されたフォークを放心状態で啄ばむ俺の姿は雛鳥さながらだったことだろう。正面にいるシャルの視線がさつきからきつくなっているのは何故だろう？俺だけが譲ってもらっているのが不満なんだろうか。

「えい」

今度は俺の手元にあつたチヨコレートケーキを掻っ攫っていった。それを口元に運んだ彼女は嬉しそうに顔を綻ばせた。その仕草に少しドキツとしてしまった。それが顔に出ていたのか正面にいたシャルに「鼻の下伸びてる」と言われて、咄嗟にウェットティッシュで顔を拭いた。

「そんなに恥ずかしがる事ないのに」

「っ！？」

二の腕に当たる柔らかな感触と耳に触れるくすぐったい吐息と甘

い匂いによつて俺の思考回路はスタボロだ。このままではどうにか
なつてしまふそうさ。

誰か助けてくれ。

人間祈つたらお仕舞いだと誰かが言つていたが、そう考えるなら
俺はこのときすでに終わつていたのだから。

「ちよおつと待つたー！ー！！！」

聞き馴染みのある声と共に三人の人影が飛び出してきた。飛び出
してきたのはチャイニーズレッド、鳳鈴音と、ブリティッシュユイエ
ロー、セシリア・オルコットと、ジャパニーズブルー、篠ノ之箒だ
った。戦隊モノみたいに並んで登場したので、何となく色付けして
しまったのは俺のせいじゃない。

「箒にセシリアに鈴！？　なんでこんなところに！？」

「『なんでこんなところに！？』ではありませんわ！！　その女
性とはどういう関係なのでしょう」

どういう関係と言われても答えようがないのが現状である。しか
し、そんな事を言つても相手にしないで決まっている。

次の瞬間、また二の腕に柔らかいものがぶつかる。

「ふふふ、私と一夏は…、そうね、貴女達よりも近い存在よ。貴
女達じゃ、私達の繋がりを別つ事はできないの」

腕に込められる力が強くなる。そうすると更に胸の弾力が押し付
けられて。

「うるさい！　いきなり出て来て何なんだお前は。私は一夏の幼
馴染だぞ！」

「そうよ！　私だって幼馴染だけどアンタの顔なんて見覚えな
いっのー！！」

「もちろんです！　後から出てきたポツと出に我が物顔で近寄ら
れては一夏さんだつて迷惑でしょうー！！」

「そうだよ！　さっきから聞いてれば一夏の事なんでも知ってる

ような口ぶりで、一体何者なんですか!」

ここぞとばかりにシャルも混じって、鬼気迫る表情で四人が謎の女性に詰め寄った。そんな勢いで迫ればヤマタノオロチも裸足で逃げ出すんじゃないだろうか?

その思いとは裏腹に、彼女は笑い始めた。口元を押さえ、グツと笑い声を堪えているようだった。

その光景に四人は怪訝な表情を浮かべる。その表情も数秒と持たず、彼女の一言で崩れ落ちる事となった。

「シャルロット、リン、オルコット、箒、俺が何者だと思っ？」

この声は知っている。俺が人生で最も頼りにしてきた男の声だ。呆然とする俺達を一瞥してから、謎おりむらしゅうじの女性は笑い出した。

「フッフ、ハハハハ、アーハツハツハツ!!! 最高だぜお前達! ここまで面白いように騙されてくれるとは思わなかったよ。特にシャルロット、お前はこれで二度目だぞ」

未だ茫然自失の俺達に気を掛けずに秋二は携帯電話を取り出して電話をかける。

「ああ簪、聞こえるか? もう終わったから入ってきてても良いぞ。その言葉の通りに更識さんとラウラが並んで喫茶店の中に入ってきた。ラウラはビデオカメラを片手に近づいてくる。

笑顔を絶やさずに「バッチリ撮れたか?」と聞く秋二にラウラは親指を一本立てて応じる。その隣で更識さんは汚物でも見るかのような目で俺を見下している。

「ちよつと! どういうことよ秋二!」

鈴のその台詞を待っていたと言わんばかりの表情を浮かべポケットの中から一枚の紙を取り出した。

そこにはやけに達筆で『ドッキリ大成功!!』と書かれていた。

赤く染まった西日を受けながら、歌を歌って織斑秋二が歩いていく後ろを、まるでパレードのように数人の人影が付いて行く。更識簪はその歌に合わせてコーラスを響かせる。ラウラ・ボー

デヴィツヒは鼻歌でメロディーを奏でる。他の四人は死人のようにその後ろを付いて行った。その様子はハーメルンの笛吹き男のようだったところに記録する。

23・HIDE&APP・SEEK(後書き)

悪ノリしました。サーセン。

人生には二つの悲劇がある。一つは願いがかなわぬこと、もうひとつはその願いがかなうこと。

『人と超人』

遠方に煌く水面を眺めながら鳳鈴音は思考する。

勝負は一瞬。気を抜けば負ける。順番は七、しかし、あたしの手札にその番号の札は一枚もない。ならば、ポーカーフェイスで切り抜けるのみ。

「ふん、七よ」

その後にはダウトの宣言はない。次の子の番が来てその子が「八」と言いながらトランプを置いた事で私の嘘はばれなかったという事になる。

どうだ秋二！ 散々顔に出る顔に出ると言っていたくせに、あたしの嘘を暴けなかったってどんな気分？ それに次のアンタの番はもうないのよ。

順番が一巡したことで次の秋二の順番は十三になる。そして、その番号は一巡する前にあたしの所に回ってきた番号。更にそのときあたしの手の中には、ダウトで引かされまくった十三が四枚あったのだ。つまり、十三のカードは既に棄て切られていて、秋二が持っていることは絶対にありえない。

後たった数枚で上がれるという所まで来ているのに、ここでこの棄て札の山を引き受けるアンタの顔は見ものでしょうね。

さあ棄てる。棄てた瞬間に私がダウトと言って見せよう！

「十三つと。後二枚だぞ」

件の秋二は軽口を叩きながらトランプを一枚棄てた。

その余裕面も見飽きたのよ。いつもいつもあたし達をからかうばかりで、少し痛い目見てあたし達の気持ちを思い知れば良いわ。

「残念だったわね!! ダウトよ!!」

どんなに平静を装ったポーカーフェイスが上手くても、既に秋二が十三を持つていないことをあたしは知っているのだ。

さあ、喚け! 絶望しろ! そしてあたしに今まで、散々カードを引かせてきたことを後悔するといいい!!

その吠え面を拝んでやろうと視線を下げると、秋二は不敵に笑った。

そして、秋二が捲ったカードは私の予想外のカードであった。

「ワ、ワイルドカード!？」

「ははははは!! 恐怖には鮮度があるらしいぜ。怯えれば怯えるほど感情は死んでいってしまうんだと。希望が絶望に変わる瞬間。その一瞬が恐怖を最大まで高めるスパイスなんだそうだ。それでリン、お前はどんな悲鳴を上げてくれるんだ? 折角さっきのお前の番では『ダウト』って言わなかったんだぜ。俺の番が来る前のテナの番や観布子みふねの番でも言いたくなるのをじっと堪えてたんだ。ほら、俺を楽しませてくれよ、リン」

つまり、あたしはまたしてもコイツの掌の上で踊らされていたって事?

「ひい、ふう、みい、よおっと、うーん全部で三十七枚だ。ほら、これだけあれば何だって出せるぞ」

「う……うう……、ううう……、うわー……ん。秋二のバカ!! 鬼畜!! 鬼!! 悪魔!!」

「おいおい、泣く奴がいるか。ほれコツチ来い」

呆れながら秋二に首根っこ掴まれて膝の上に乗せられる。癩だけどその位置は凄く落ち着いた。首筋を撫でられるのが心地いい。このまま転寝してしまいたいくらいだ。

「こうして見ると兄弟みたいだよね」

「そうだね」

「あ！　一夏君と結婚すると秋二君が弟になるのか。お買い得だね」

「ナニソレ理想郷」

「……………どちらかというところごしゅじんさまとペット」

好き放題にするクラスメイト達の事はこの際放っておく。しかし、ボソツとあたしの事をペットとか言った観布子はただじゃおかない。

「猫將軍が御冠なんで、今日のところはこの辺で終了だな」

「猫言つな！！」

あたしが怒鳴り散らしてもどこ吹く風で、平然と海を眺めながら秋二は歌を歌っている。

英語の歌詞を口ずさんでいることから、おそらく洋楽なのだろうが、あたしにはまるでわからない。でもその声とメロディーは心地よいもので、あたしはいつの間にか寝息を立てていた。

「Hello, darkness my old friend .
I've come to talk with you again .
Because a vision softly creeping
Left its seeds while I was sleeping .
And the vision that was planted
in my brain still remains .
With in The Sound Of Silence .

綺麗で、心地良いけれど、何だか寂しい、そんな歌。まどろみながらあたしはそう思った。

合宿の時くらいはきちんとした服装をするかと思っただが、相変わ

らずのだらしない格好で生徒の引率をする佐藤先生を見て織斑秋二は呆れ返った。

背中で気持ち良さそうに寝息を立てるリンはこの際無視する事にする。

「あー、今日から三日間この花月荘でお世話になるからしつかり挨拶しろよー」

そういう貴女がしつかりしてくださいと口に出してしまいそうになるのを辛うじて堪えて、しつかりと頭を下げた。

「はい、短い間ですがよろしくお願いいたします。ではこちらへどうぞ」

そう言つてニツコリと笑う和服姿の女将は、真っ直ぐに伸びた背としつかりと着こなされた和服に身を包んでいる。客商売なので礼儀正しいのはもちろんのだが、ウチの担任とは大違いだ。比較対象が完全に間違っているが、気にはしていない。

「あの…、こちらの組にも男の子が一人いると聞いたのですけれど……、どちらにいらつしやるのでしょうか？」

「…あー、秋二君こっち来て」

佐藤先生が俺を手招きして呼び寄せる。

佐藤先生が手招きするまでもなくそちらへ歩いていたのだが、返事だけはしておく。

「紛らわしくて、申し訳ありませんでした。織斑秋二と申します」

「あら、ごめんなさいね。あまりに別嬪さんだったものだから…」

「私も美人にそう言われてしまうと少し気後れしてしまいますよ」

「あら、お世辞も上手いのね」

「いえいえ、お世辞ではありませんよ。まあ、よく間違えられます。この髪の毛のせいなんですしょうけれど。だから慣れてます」

先日は女装して一芝居打ったくらいだしね。それに美人さんに褒められて悪い気はしない。

「申し遅れました。私、花月荘の女将をしております、清洲景子と申します。では、皆さんこちらへどうぞ」

清洲さんに連れられて俺達は旅館の中へと案内された。

商売なので当然なのだが、彼女の作法は見事なもので感心した。それよりもこの背中で丸まっているドルバツキーを何とかしたいというのが本音である。丁度隣を歩いていた藤堂観布子に声を掛ける。

「なあ、観布子ってリンと同じ部屋だったか？」

「…うん、そう」

栗毛の前髪に隠れている彼女の目は開いているのだろうか？ 毎日日眠そうな仕草をしているが、居眠りとかはしていない。それに大人しそうな見た目に反して、結構な悪戯好きでもある。そのことを知っているのは俺だけかもしれない。

「案内してもらえるか？ いい加減この猫退かさない俺の制服を涎塗れにしそうだし」

「…りょかい、こつち」

彼女の口数は少ないが、五月蠅くない彼女は俺にとってこのクラスでのオアシスであった。

殆ど会話をする事もなくその小さな背中に付いて行く。歩幅を狭めて、なるべく追いつかないようにゆっくりと。

周りの喧騒からこの空間だけ切り取られているような錯覚。時間の流れがゆっくりと感じる。

その穏やかな空気は性にあっていたようで、傍から見れば気まずそうに見えるかも知れないが、俺はそれで満足だった。

「…ついた」

「ここか。じゃあ、開けてもらえる？」

「…ん」

彼女が開けた戸をくぐって部屋に入ると中は比較的広かった。この広さだと二人部屋ということはないだろうな。騒がしくなる前にリンを放り投げて、俺は部屋を後にした。

「またな」

「…また」

大した言葉も交わさず観布子と別れて自分の部屋に行こうとしたところで問題が発生した。

俺の部屋どこだ？

まあ、清洲さんに聞けばいいだけの話だよな。はつきり言っしまえば、佐藤先生から聞いてなかった俺が悪いのだが、いや、言わなかった先生が悪いのか、この場合。

どちらにしる、そろそろ彼女を先生と呼ぶのが辛くなってきた。次何かあつたら呼び捨てにしてやろうと心に誓った。

清洲さんに案内された部屋の前には『佐藤詩織 織斑秋二』と書かれた札が貼り付けられていた。

戸を開けようとする清洲さんを制止して、戸の横の壁をノックする。

清洲さんは不思議そうな顔をして見つめているが、何となくこのまま戸を開けるのは危険な気がした。

ノックの音に慌てている様子が外にいてもわかった。大方着替えでもしていたんだろうと予想する。やはり、ノックしておいてよかった。

「はいはーいーい！ ちょっと待つてくださいねーいー！ って、え！？」

その安堵も束の間、部屋の中から下着姿の女性が飛び出してきた。俺は無言で戸を絶てた。

ふいと視線を横に向けると清洲さんは気まずそうに苦笑いをしていた。部屋の中で寛いで、だらしない格好をしているかと危惧したから、ノックまでしたのに、下着姿で応対するのはどういう事だ。俺が彼女を先生と呼ぶことは二度とないだろう。これで彼女を先生と呼ぶのは何人だ？ まあそんなことはどうでもいい。

ゆっくりと戸が開いてその隙間から佐藤が頭だけ覗かせる。あん

な自損事故で顔を赤くするくらいなら、初めからしつかりしていてくれという言葉は口にしなかった。

「あ…、あのね…、えーっと、見ちゃった？」

「あの状況で見えないわけじゃないじゃないですか。良いから早く着替えてください。俺が入れません」

「なんで着替えてないってわかるの!？」

「肩と鎖骨が見えてればわかります」

そう言うともともと赤かった顔を更に赤くして部屋の中に逃げ込んでいった。

「……………なんと言いますか、その…、可愛らしい方、でしたね」

「無理に褒めようとなさらないでください。かえって惨めに見えます」

そう言うため息が漏れた。

数分経って出てきた佐藤はボタンを掛け間違っていたものの、これ以上待ち惚けを喰らうのも御免だったので、指摘しない事にした。

「申し訳ありませんでした清洲さん。お仕事のところ…」

「いえいえ、私に出来る事がございましたら、気軽に申し付けください」

丁寧にお辞儀をする彼女を見送って、部屋の中に入った。彼女に迷惑をかけるのもこれっきりにしたいものだ。

中に入って部屋の隅にカバンを置いてから、佐藤の方に振り向いた。彼女は蹲って座布団を被っている。その元までゆっくりと畳を擦らせながら近づくと、その肩がびくりと跳ねたのがわかった。震えている彼女が握り締めている座布団を無理やり引っぺがす。

「ああああ、あのの、あの、そう！ あれは事故なの！ だから忘れて、秋二君!!」

「御免だ」

「そんな殺生な!!!!」

「恥ずかしいと思う暇があるなら、それを直す努力をしろ。それ

まで俺は忘れない事にしよう。剥き出しになった体の線も、浮き出た鎖骨も、膨らみのある胸部も、予想より括れていた腰も、細長い脚線も、その白い肌も全部」

俺の台詞にどんどんと顔を赤くしていく。この人の前世は紅葉だきつと。

そして、これ以上赤くなる事はないだろうところ、彼女は泣きながら逃げ出した。

やり過ぎたかと思ったが、もう一押ししておこうとその背中に一言声を掛ける。

「桃色の下着はお似合いですよ」

「う、うう、うわーーーーーん!!!! シュージくんのバカーーーーー!!!!」

ちょっとした既視感を彷彿させる悲鳴を上げながら駆けて行った。ここまでやれば彼女も反省するだろう。

静かになった部屋で俺は荷物から本とMP3プレーヤーを取り出し、読書の準備をして海に向かう事にした。そうした理由はどうせ部屋に引き籠もっていても引きずり出されるのがオチだという一種の諦観からであった。

不躰な視線を隠そうともしないスケベ魔人からラウラちゃんを守る楯となるべく、その前に立つ更識簪は憤慨した。

この男は海へ来てからというものの、水着の女の子を舐め回す様に見ている。今も鼻の下を伸ばして眺めている。

「あ、おりむーだ」

私の隣を歩いていた本音の声に応じてスケベ魔人がこつちを見る。咄嗟に私はラウラちゃんを隠すように背負った。

「のほほんさんに更識さんか、ふた」

「近寄らないでください」

スケベ魔人の言葉を遮ってこれ以上前に進まないように制止する。顔をしかめながらもその場に止まった事は評価してやるう。

「いや、あ」

「踵を返してUターン」

またも言葉を遮って命令する。その言葉に従う辺り、いい犬になる素質はあるのかもしれない。躡けるのは御免こうむるが。

その様子を見て本音が微笑んでいるのが横目に映る。

「ふふふ、かんちゃんも口が達者になったねー」

「私の周りにはいい師匠がいたからね」

その師とは目の前の本音であったり、秋二君であったりする。お蔭でそこら辺の人には口喧嘩で負ける気がしない。

「うーん、折角、海に来たのにその服はダメ」

「……………いいじゃない、別に」

そう言いながら視線を下げる。そこには水着ではなく、グレーのパーカーが映った。大き目のパーカーは膝の少し上くらいまで覆い隠している。その下に水着は着ているのだが、この服装が本音は気に入らないらしい。

「あの、簪もう良いか？」

背中からひよっこり顔を出す仕草が愛らしい。抱きしめたくなるのをグツと堪えて横に並ぶように促す。

「そのまま振り向かずにパラソルのところまで移動」

スケベ魔人には振り向かないように念を押しておく。

何人くらいかは入れそうな大きめなパラソルの所に敷いてある莫塵の上に腰をかける。その時にラウラちゃんがスケベ魔人の視界に入らないように壁になる事も忘れない。

「おりむー、しゅーちゃんは？」

「…秋二？ 見てないけど。部屋も違ったしな」

発言をする前に私の顔を伺うように覗き込んできたが、それには無視を決め込んだ。

「ん？ 一緒ではないのか？」

「ああ、俺の部屋が千冬姉と同じ部屋だったから、秋二は二組の先生と同じ部」

「うわーーーーー！！！！ん！！！！」

またしてもスケベ魔人の声が遮られた。しかし、今回は私ではない。その声のする方へ目を向けると、二組の担任である佐藤先生が泣きながらこちらへ走っていた。

何なんだ一体？ その疑問は次の台詞で更なる疑問を増やす事になった。

「シユージくんのバカーーーーーー！！！！」

そう言い残して彼女は海の藻屑となった。見たところスーツ姿であったが、おそらく水着なんて着ていないのだろうと想像出来た。

その様子を何事かと何人かの生徒が駆けつけて来る中で、見知った顔を幾つか見つけた。

「……………何があつたの？ 詩織の悲鳴が聞こえたんだけど……………」

その声を掛けてくるのは鈴ちゃん、その後ろに篤さんとセシリアさんがいるのが見える。二人も鈴ちゃんと同じように不思議そうな顔をしている。答えようにも、こつちの方が聞きたいくらいだ。

「さあ？ 秋二のバカーって言って泳いで行っただけだ」

「何だそれは？」

「こつちが聞きたいくらいだよ」

謎は深まるばかりだった。

謎が謎を呼び、私達が頭を悩ませているところに秋二君は無言でやって来て、何事もなかったかのように莫座の上に座ると、イヤフオンを付けたまま読書を始めた。

その堂々とした態度に皆一瞬呆気にとられたが、すぐ我に返り、慌てて問い質した。

「ちよつと秋二、詩織に何したのよ？」

「ん？ ……ああ、ちよつと賤をね……………」

賤という言葉にそこにいた何人かが生唾を飲んだ。誰とは言わな
いが、数にして四。その中には男が混じっていた事も付け加えてお
く。

その後、織斑一夏がセシリア・オルコットにサンオイル
を塗っている時に、更識簪は三日間放置した生ゴミを見るような目
で見たり、準備運動もなしに泳ごうとする鳳鈴音を簪が準備運動を
きちんとするように強制したり、いつまで経っても泳ごうとしない
織斑秋二と簪の両名を布仏本音が無理やり連れ出したり、篠ノ之箒
とシャルロット・デュノア、セシリアに鈴が一夏を賭けてビーチバ
レーをしたりと様々な事があったが総じて平和であった。海の藻屑
と化した佐藤詩織を除いて。

24 - Book | Of | Days (後書き)

布仏本音の本音ってネタ思いついたんだけど、どう思う。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5327y/>

ドッペルゲンガー

2011年12月12日00時51分発行